

ピープルズバイブル
聖書ガイド

ヘブル人への手紙

リチャード・E・ラールズドルフ著
江川かをり訳

ウィスコンシン州ミルウォーキー

ノースウェスタン出版社

NORTHWESTERN PUBLISHING HOUSE

Milwaukee, Wisconsin

英語原本『The People's Bible: Hebrews』（著者：Richard E. Lauersdorf）は、ノースウェスタン出版社（1250 N. 113th St., Milwaukee, WI, USA, 53226-3284）によって出版されました。初版の著作権は1986年にノースウェスタン出版社が取得しています。

【ISBN：0-8100-1198-0、図書館議会カード番号：85-63195】

日本語版である本稿は、翻訳・執筆会社スタークロス代表、江川かをりの監修のもと、2025年に発行されました。日本語聖書の引用は、新改訳2017年版を使用しています。英語聖書の引用は、特に明記されていない限り、新国際版聖書（HOLY BIBLE, NEW INTERNATIONAL VERSION®, NIV®）からのもので、1973年、1978年、1984年の国際聖書協会の著作権に基づき、ゾンダーヴァン出版社の許可を得て使用しています。すべての権利は保留されています。

「NIV」および「New International Version」は、国際聖書協会によってアメリカ合衆国特許商標局に登録された商標です。これらの商標の使用には国際聖書協会の許可が必要です。出版社の明示的な許可なく、この出版物の一部をどのような形式や手段でも—電子的、機械的、複写、録音など—複製、保存、送信することは禁じられています。レビュー等の引用についても、事前の許可が必要です。

表紙の絵はフランク・オルダズが手掛け、内部イラストはグレン・マイヤーズによるものです。初版及び一部の第二版の表紙には、ジェームズ・ティソ（1836-1902）の絵画が採用されています。文中のCWという表記は、CHRISTIAN WORSHIP A Christian Hymnal（ノースウェスタン出版社）の略です。TLHという表記は、The Lutheran Hymnal（コンコルディア出版社）の略です。

本稿の作成にあたり、アメリカ・ウィスコンシン州のルーテル教会 WELS（Wisconsin Evangelical Lutheran Synod）、およびその姉妹教会である日本の LECC（ルーテル福音キリスト教会）のメンバーにご協力いただきましたことに感謝申し上げます。

目次

編集者のまえがき	5
へブル人への手紙の序章	6
神の完全な啓示として優れている (1:1-3)	10
天使たちよりも優れている(1:4-2:18)	12
モーセよりも優れている(3:1-4:13)	23
資格において優れた祭司 (4:14-6:20)	37
地位において優れた祭司 (7:1-28)	54
聖所と契約において優れた祭司 (8:1-13)	66
犠牲において優れた祭司 (9:1-10:18)	73
確信をもって神に近づこう (10:19-39)	91
信仰の英雄たちを思い起こそう (11:1-40)	101
神の訓練を通じて信仰を成長させよう (12:1-29)	120
周囲の人々に対しての信仰の生活 (13:18-25)	135
個人的な指導と最終的な挨拶 (13:18-25)	144

イラスト

モーセと十戒	24
大祭司の衣装	40
メルキゼデクの捧げ物	55
幕屋	74
契約の箱	75
完了した	86
アブラハムがイサクを捧げた	110
紅海が分けられた	115
よい羊飼い	145

編集者のまえがき

『ピープルズバイブル～聖書ガイド～』はその名前が示す通り、人々のため、つまり、皆さんのための聖書解説書です。難しく思える聖書の内容が、大勢の方に伝わるように書かれました。日本語での出版に際して、日本語聖書の引用には新改訳聖書2017を、英語聖書の引用にはNew International Version (NIV) を利用しています。それぞれの聖書箇所直後には解説が続き、著者の解釈や歴史的な背景とその説明が書かれています。

各巻の著者は、全員が神学者であり、長年の宣教経験に根差した、聖書の実用的な深い理解を持ち合わせています。また、文章においては、専門用語の使用をできる限り避け、専門家以外の読者にも広く読まれるよう工夫を重ねました。

この本の最も重要な特徴は、キリスト中心であるということです。旧約聖書でイエス・キリストは、「あなたがたは、聖書の中に永遠のいのちがあると思うので、聖書を調べています。その聖書が、わたしについて証言しているのです」(ヨハネ5:39)とっておられます。本シリーズ全巻が、読者の意識をイエス・キリストに向けるように書かれています。聖書の中心はキリストであり、イエスこそが私たちの唯一の救い主だからです。

解説書内では、イラスト、地図、考古学的な情報が、必要に応じて使用されています。また、すべての巻に小見出しを付けることによって、目的の聖書箇所にすぐ参照できるよう工夫されています。

『ピープルズバイブル 聖書ガイド』の全巻は、Wisconsin Evangelical Lutheran Synod (WELS)のクリスチャン文書委員会により編さんされました。

この文書伝道活動が長く続くことが私たちの祈りです。私たちは本書を、三位一体の神の栄光のため、また、まことの神を信じる人々の益のために捧げます。

へブル人への手紙の序章

著者

新約聖書の中でも、へブライ人への手紙は特に謎が多いとされます。例えば、著者に関する謎が挙げられます。この手紙では著者が自らを明かさないものの、幾つかの手がかりからその人物像をうかがうことができます。例えば、2章3節では、著者が主から直接ではなく、「それを聞いた人たち」から救いの言葉を得たと述べています。これと、13章23節での「私たちの兄弟テモテ」という言及から、彼がパウロの友人や同僚の中にいたことが推測されます。また、彼の書き方からは、旧約聖書やユダヤ人の宗教生活に深い知識があることも伺えます。

こうしたヒントを前にして、へブル人への手紙の著者は長い間、議論的的となっています。2世紀末までには、使徒パウロがこの手紙の著者とされることがありました。しかし、パウロの文体とは異なる書き方や、彼が他の手紙で自らを著者として名乗る習慣、そして彼がコリント人への手紙第一15章8節で、主から直接福音を受けたと主張することなどが、パウロ説に疑問を投げかけています。「キプロス生まれのレビ人」と使徒の働き4章36節に書かれているバルナバのようなパウロの仲間を候補として挙げる人もいます。

ルターは、使徒の働き18章24、25節で、ユダヤ人で「聖書に通じていた」、「主の道の教えを受け、霊に燃えて、イエスのことを正確に語り、また教えていた」とされるアポロスを、この手紙の著者として強く推奨しました。ルターの考えは他の推測と同様に一理ありますが、最終的には初期教父の言葉「手紙の本当の著者が誰かは、神のみぞ知る」という見解に賛同せざるを得ません。

しかし、著者の不確かさはこの書の価値を減じるものではありません。この素晴らしい書に対する感謝は聖霊に捧げられます。へブル人への手紙は、聖霊によって触発されたことが随所に感じられ、全ての年代に向けた大切なメッセージを伝えています。それはイエス・キリストに罪からの完全な救い主として焦点を当て、私たちの全ての必要に対する答えとして描き出しています。

宛先について

へブル人への手紙の正確な宛先は不明です。「へブル人への」というタイトルは後世の2世紀に追加されたもので、元の手紙には含まれていませんでした。著者は読者を直接名指ししていませんが、13章19節によると読者が著者と過去に共に生活し、将来の再会を望んでいる特定のクリスチャン集団であることを示唆しています。また5章12節によれば、彼らは長い間にわたり信仰を持ち続けていましたが、10章32-

34 節から分かるとおり、信仰の停滞や迫害に直面している状況で、さらなる迫害の可能性と、キリストへの信仰から遠ざかってしまう危険に直面していました。また、彼らがユダヤ教的背景を持つことを示す旧約聖書からの引用や言及が多く含まれています。

読者の居住地もはっきりしていませんが、13 章 24 節の「イタリアから来た人たち」による挨拶が含まれていることから、イタリアに元々住んでいたクリスチャンが以前いた母教会に当てて手紙を書いた可能性を示唆しています。また、この手紙がローマの著者によって初めて言及されたことから、ローマに住むクリスチャンが読者であったと結論づける人もいます。

このような不確かさがあっても、この手紙の価値は変わりません。元の読者がだれであったにせよ、強い牧師的な勧告を含むこの書は、すべての信者にとって重要なメッセージを持っています。キリスト教の真理に固く根ざし、キリストに対する信頼を保ち、信仰の成熟を目指すことを強調する呼びかけを必要としない人など、いるでしょうか。

書かれた時期

ヘブル人への手紙の正確な執筆時期は不確かですが、西暦 96 年以前に書かれたことは、他の文献での引用から明らかです。しかし、どれほど前に書かれたかを言い当てるのは困難です。ひとつのヒントになるのは、迫害についての記述です。10 章 34 節によると、読者は過去に侮辱や迫害を経験しており、一部は投獄や財産の喪失を経験していたことを示しています。迫害は、流血の事態には陥っていないにせよ、過激化していました (12:4)。ローマの歴史に照らすと、ネロ帝によるキリスト教徒への迫害が西暦 64 年にピークを迎えたことから、この手紙はその迫害期間中に書かれた可能性があります。

また、西暦 70 年のエルサレムの神殿の破壊に言及がないことから、手紙がそれより少し前に書かれた可能性もあります。この有名なユダヤ人の都市は、西暦 70 年にローマ軍の手に落ちました。エルサレム陥落と神殿の破壊は、キリストの御業 (みわざ) が、旧約時代の犠牲制度を時代遅れにした、というヘブル書の著者の主張を後押しする出来事であったことでしょう。しかし、その言及がないということは、この書が西暦 70 年より少し前に書かれたことを思わせます。

したがって、ヘブル人への手紙は西暦 64 年から 70 年の間に書かれた可能性が最も高いと推測されます。書かれた時期にかかわらず、この書に書かれたキリストの至上性、つまり、キリストこそが全てに勝って重要であるというメッセージは、時を超えて、すべての信者に語りかけるものです。

書かれた目的

この書が書かれた目的は明確です。この手紙は、人々がキリストへの信仰を捨てないよう励ますために書かれました。著者は自らを「勧めのことば」と表現しており（13:22）、教義を解説し、それを読者の日常生活に応用する説教風のアプローチを取っています。手紙の前半では、キリストの至上性とそのみわざの全能性を論じ、後半でこれらの真理を読者の生活に適用しています。まるで「キリストとキリスト教にどれほど価値があるかを見てください。さあ、あなたはこの宝をどう活かしますか」と問いかけているようです。

キリスト教からユダヤ教への回帰を考えるユダヤ人クリスチャンにとって、これらの言葉は極めて適切でした。ネロの迫害が始まりキリスト教が違法とされた一方で、ユダヤ教は合法とされ国家の保護を受けていました。迫害が激しくなるにつれ、ユダヤ教への回帰の圧力が現実のものとなりつつありました。

一部の人々はすでに信仰から離れ、その他の人々はその危険に瀕していましたが、著者は彼らに「信仰を捨ててはいけません」と強く論じました。そして、キリスト教の優れた点を、美しく詳細に説明しました。旧約聖書についてまるで大胆なタッチで美しい絵を描き出すように語り、キリストの人格とみわざによって神の救いのご計画が完成したことを示しました。キリスト教こそが唯一まことの宗教であり、神から人への完璧で最終的な啓示であることを、「より良い」というキーワードを繰り返しながら描写しました。

この書は新約聖書の中でも難解な一冊として敬遠されがちですが、それは本当にもったいないことです。この書はキリストの優位性を証明し、キリストを神の完璧なみことば、また人にとっての完璧な代弁者として提示しています。また、今なお天国で続くキリストの働きを説明し、この不安定な世の中における揺るぎない安息について語ります。神の子であるクリスチャンに、キリストが切り開いた道を前進して歩むよう促し、落胆したときには励まし、天国の永遠の住まいへと向かうための動機付けを与えます。間違いなく、この書は私たち全員に多くを語りかけています！

概要

へブル人への手紙の流れを分断することには躊躇しますが、概要化することで理解が深まるかもしれません。およそ7,000語からなるこの書は、1時間以内で読むことが可能です。読み進める前に一読を試みることをお勧めします。手紙の前半部分（1:1-10:18）は、キリストの至上性とキリストのみわざの完全性についての教義を展開します。後半部分（10:19-13:17）は、これらの教えを日常生活に応用する実践的な指針を提供しています。著者は手紙の前半でも、警告と具体的な応用を通じて重要な

ポイントを何度も強調しています。しかし、具体的な応用は後半部分で始まり、「私たちは…しましょう」というフレーズを繰り返し使用しています。そして、最後には簡潔な結論（13:18-25）が続きます。

I. キリストは至高の宝（1:1-10:18）

A. キリストの神格における優位性（1:1-4:13）

1. 神の完全な啓示として優れている（1:1-3）
2. 天使たちよりも優れている（1:4-2:18）
3. モーセよりも優れている（3:1-4:13）

B. キリストの聖職における優位性（4:14-10:18）

1. 資格において優れた祭司（4:14-6:20）
2. 地位において優れた祭司（7:1-28）
3. 聖所と契約において優れた祭司（8:1-13）
4. 犠牲において優れた祭司（9:1-10:18）

II. この至高の宝をどう扱うか（10:19-13:25）

- A. 確信をもって神に近づこう（10:19-39）
- B. 信仰の英雄たちを思い起こそう（11:1-40）
- C. 神の訓練を通じて信仰を成長させよう（12:1-29）
- D. 周囲の人々に対しての信仰の生活（13:1-17）
- E. 個人的な指導と最終的な挨拶（13:18-25）

第一部

キリストは至高の宝 (1:1-10:18)

キリストの神格における優位性

神の完全な啓示として優れている

へブル人への手紙 1 章 1-3 節

- 1 神は、むかし父祖たちに、預言者たちを通して、多くの部分に分け、また、いろいろな方法で語られました、
- 2 この終わりの時には、御子によって、私たちに語られました。神は、御子を万物の相続者とし、また御子によって世界を造られました。
- 3 御子は神の栄光の輝き、また神の本質の完全な現れであり、その力あるみことばによって万物を保っておられます。また、罪のきよめを成し遂げて、すぐれて高い所の大能者の右の座に着かれました。

新約聖書の中で、この手紙ほど素早く本題に入るものは他にありません。序文や挨拶もなしに、著者は直ちに主題に飛び込みます。まるでイエス・キリストの輝かしい優位性を語ることを、待ちきれないかのようです。

困難や危険に直面し、ユダヤ教への回帰を考え始めていた人々に向けて、著者は彼らがほとんど反論することのできない点から話を始めました。確かに、神は過去に彼らの祖先に語りかけました。律法、歴史、詩、預言のさまざまな形式を通じて、モーセからマラキに至るまでの預言者を介して、神は彼らに語りかけました。しかし、預言者たちの働きは部分的であり、彼らの伝えたメッセージも未完成な内容でした。この後には、それまでに神聖に伝えられたものを無効にするのではなく、それを完成させるものが来る予定となっていました。

そして、祖先たちに告げられた通りに、それは実現しました。モーセは申命記 18:15 で、「あなたの神、【主】は、あなたのうちから、あなたの同胞の中から、私のようなひとりの預言者をあなたのために起こされる。彼に聞き従わなければならない。」と彼らに語られました。ついにそれが実現したのです！「この終わりの時」、すなわち私た

ちが生きている新約時代において、そしてその後、永遠が待ち受けるこの時代に、神はご自身の神格を持つみ子を通じて語られました。

聖霊の働きに重きが置かれていることに注意しましょう。預言者を通して、そして今のご自身のみ子を通して、神は語りました。彼らは神のみことばを伝えました。預言者たちは神を代弁し、み子は神として語りました。神がみ子を通じて語り終えた今、神が人類に伝えるべきことは、これ以上何もありません。旧約聖書が示す救い主であるみ子は、神の最終的なみことばであり、完璧な啓示です。どのような理由があるにせよ、この神の啓示を拒むことは、なんと愚かなことでしょうか！

次に、神の完全な啓示であるキリストの優れた地位を示す、7つの重要な声明が続きます。

(1)まず、終わりの時において、キリストは全宇宙の所有者であり統治者である「相続人」として認識されます。

(2)次に天地創造における全ての始まりにおいて、キリストは創造の行為に参加した創造主として存在したことが挙げられています。

(3)さらにキリストは「神の栄光の輝き」とされます。イエスにおいて、神の栄光と神の全ての神聖な属性の輝きが放射されます。この輝きは、太陽が天空で輝くような内側から発する明るさであり、流れるように輝きます。その光を見ることは、太陽そのものを見ることに等しく、イエスを見ることは栄光の神を見ることに他なりません。

(4)そしてキリストは「神の本質の完全な現れ」です。完璧な表現とは、例えば鋳型で打たれた硬貨のように、道具によって作り出される精密な制作を意味します。従ってイエスは父なる神を完璧に表しています。イエスを知ることは、神の本質と栄光を知ることです。イエスは「焦点を絞られた神」とも言えるでしょう。イエスがヨハネの福音書14章9節で「わたしを見た者は、父を見たのです。」と表現したのは、このことをよく示しています。

(5)さらにイエスは、天地創造において活動していたことに加え、「その力あるみことばによって万物を保って」おられます。多くの科学者が様々な理論を唱え、実験を重ねる一方で、全てを統治し、最終目標へと導くのは、確かにイエスだと私たちは知っています。イエスは、この世のはじまりにおいて、力あるみことばによって全てを創造した方です。「御子は、万物よりも先に存在し、万物は御子にあって成り立っています。」とコロサイ人への手紙1章17節には書かれています。このキリストの確かなみ手の中で、信者たちは永遠に守られています。

(6)第六の声明は、私たちを議論の中核へと導きます。この手紙は、「罪の聖化」をもたらすために来たキリストが優れている点を示すために書かれました。罪は汚れをもたらし、穢^{けが}れを与え、罪を定めます。それを浄化できるのは真実の神ただ一人で、その行為は一度きりで事足ります。ゴルゴダの十字架において、創造主であり統治者であ

るイエスは、私たちの罪の担い手となりました。これがイエスの最も驚異的な栄光です！主権者である主が、犠牲の小羊となったという事実は、驚嘆に値します！

(7) 救済の仕事が完了した後イエスは、「すぐれて高い所の大能者の右の座」に着きました。「右の座」とは権力と名誉の位置を意味し、「すぐれて高い所」とは神とその圧倒的な偉大さを示します。昇天した主イエスは、釘で傷つけられた手で王笏を持ち、天上、地上、そして地獄において全てを支配します。これほどの偉大さを描いた光景は他にありません！

迫害による苦悩の中で疲弊し、信仰を断念しようかと追い詰められていたユダヤのキリスト教徒たちには、完全で勝利に輝くキリストの姿が必要でした。私たちも同じです！日増しに反抗的になる世界の中で、キリストへの信仰を保つ戦いに直面し、たびたび単なる膠着状態に陥っているように感じられる今、私たちは神の究極の啓示である主イエスを見上げるべきです。著者が示すキリストの輝きが、私たちを導き、「私の主。私の神。」（ヨハネ 20:28）と心から叫ぶきっかけとなりますように。

天使たちよりも優れている

へブル人への手紙 1 章 4—6 節

4 御子は、御使いたちよりもさらにすぐれた御名を相続されたように、それだけ御使いよりもまさるものとなりました。

5 神は、かつてどの御使いに向かって、こう言われたでしょう。「あなたは、わたしの子。きょう、わたしがあなたを生んだ。」またさらに、「わたしは彼の父となり、彼はわたしの子となる。」

6 さらに、長子をこの世界にお送りになるとき、こう言われました。「神の御使いはみな、彼を拜め。」

旧約聖書において、律法は天使を介して授けられました。この時代には、天使たちがしばしば神の民の前に現れたので、ユダヤのキリスト教徒たちは、天使という天上の存在の重要性を深く理解し、尊敬していました。にもかかわらず、イエスの存在は天使をはるかに超えるものでした。著者は「優れている」という言葉を使い、イエスが天使たちを大きく凌駕していることを強調します。この表現はへブル書において全体で 13 回も繰り返されています。実際、イエスは全てのものの中で最も優れ、極めつけは彼らの救い主でした。そのようなイエスへの信仰を、彼らがどうして放棄しようと思えたのか、不思議でなりません。

ユダヤのキリスト教徒たちは旧約聖書にも精通しており、その権威を自然と受け入れていました。そこで著者は旧約聖書を引用することにしました。この書の各章には少なくとも1つの旧約聖書の引用が含まれており、この章では7つもの引用があります。これらを読むと、旧約聖書の奥深さに改めて驚かされます。

メシアは旧約聖書全体の中心であり核でした。私たちが予想もしなかった箇所にもメシアは存在しています。ヨハネの福音書5章39節では、メシアご自身であるイエスがユダヤ人に対し、「あなたがたは、、、聖書を調べています。その聖書が、わたしについて証言しているのです。」と語りました。使徒の働き10章43節でペテロはコルネリウスに向かって、「イエスについては、預言者たちもみな、この方を信じる者はだれでも、その名によって罪の赦しを受けられる、とあかししています。」と、この重大な思想を繰り返しました。そしてヘブル書の著者はこの点を重ねて強調しています。著者は聖霊の靈感を受けて、旧約聖書がどのようにキリストについて証言しているかを、巧みに示しています。

最初の引用は詩篇2篇からのものです。著者は、イエスが天使たちより遥かに優れた名を持つことを示すために、ダビデの詩の第7節を引用します。「あなたは、わたしの子。きょう、わたしがあなたを生んだ。」と天の父が、そのみ子に宣言しているのです。イエスは永遠から神のみ子であり、三位一体の神の第二位の神格であり、父と聖霊と共に真の神です。

「子」という名前は、特別な意味でイエスに属しています。このことは、天使ガブリエルがルカの福音書1章32節でマリアに告げた際に言及されました。「その子はすぐれた者となり、いと高き方の子と呼ばれます。」イエスは人としても「子」という称号を受け継ぎました。神であり人でもあるイエスは、神の息子なのです。イエスがヨルダン川で洗礼を受けた際や、変容の山で栄光を放った際に、父は「あなたは、わたしの愛する子」と公に宣言しました（ルカ3:22、9:35）。

復活に際して、父はこの宣言に感嘆符を打ちました。使徒の働き13章33節には、パウロが詩篇2篇を、どのようにキリストの復活に関連付けて、イエスが神のみ子であることを示したかが説明されています。「神は、イエスをよみがえらせ、それによって、私たち子孫にその約束を果たされました。詩篇の第二篇に、『あなたは、わたしの子。きょう、わたしがあなたを生んだ』と書いてあるとおりです。」（使徒13:33）この節の「きょう」という言葉は、み子が人間となり、世の罪を取り除くため、父によって遣わされた使命を指し、それによりイエスが天使たちを大きく超える存在であることを示しています。

続いてサムエル記第二7章14節があります。「わたしは彼にとって父となり、彼はわたしにとって子となる。」（IIサムエル7:14）この言葉はもともとソロモンに対して語られましたが、より深い意味を持っています。それは、ダビデよりもさらに偉大なみ子を指し、その方の王国は永遠に続くことを示しています。著者はさらに言葉を強めて

イエスを「子」と呼ぶだけでなく、神を「父」と呼んでいます。このことにも深い意味があります。天使たちには、このような神の子としての地位は与えられていないことを示しているのです。

イエスが天使たちを超える存在であるという更なる証拠が必要でしょうか？それなら、神が再び「長子をお送りになる時」、つまり壮大な審判の日を想像してみてください。その日、間違いなくキリストは「長子」として、地位と階級で第一位となり、天使の全員、つまり、一部ではなく全ての天使が、彼の前にひざまずいて礼拝するのです。ヨハネの黙示録 5 章 11,12 節では、ヨハネがその場面の予告をしています。「また私は見た。私は、御座と生き物と長老たちとの回りに、多くの御使いたちの声を聞いた。その数は万の幾万倍、千の幾千倍であった。彼らは大声で言った。『ほふられた小羊は、力と、富と、知恵と、勢いと、誉れと、栄光と、賛美を受けるにふさわしい方です。』」

第 6 節の終わりに関して、疑問を持つ人もいます。ヘブライ語の原文では、「神の御使いはみな、彼を拝め。」という一節が申命記 32 章 43 節に見当たりません。しかし、その言葉は旧約聖書のギリシャ語訳である七十人訳には含まれています。これをヘブル書の著者が使用していることは明らかです。ヘブル書の著者が聖霊に導かれて引用していることを考慮すれば、このような問題は私たちを悩ますことはないでしょう。聖霊が直接解釈を行い、新約聖書の著者が旧約聖書の預言者の意図とメッセージを理解するのを助けているのです。

ヘブル人への手紙 1 章 7-14 節

7 また御使いについては、「神は、御使いたちを風とし、仕える者たちを炎とされる。」と言われましたが、

8 御子については、こう言われます。「神よ。あなたの御座は世々限りなく、あなたの御国の杖こそ、まっすぐな杖です。

9 あなたは義を愛し、不正を憎まれます。それゆえ、神よ。あなたの神は、あふれるばかりの喜びの油を、あなたとともに立つ者にまして、あなたに注ぎなさいました。」

10 またこう言われます。「主よ。あなたは、初めに地の基を据えられました。天も、あなたの御手のわざです。

11 これらのものは滅びます。しかし、あなたはいつまでもながらえられます。すべてのものは着物のように古びます。

12 あなたはこれらを、外套のように巻かれます。これらを、着物のように取り替えられます。しかし、あなたは変わることがなく、あなたの年は尽きることがありません。」

13 神は、かつてどの御使いに向かって、こう言われたでしょう。「わたしがあなたの敵をあなたの足台とするまでは、わたしの右の座に着いていなさい。」

14 御使いはみな、仕える霊であって、救いの相続者となる人々に仕えるため遣わされたものではありませんか。

み子は肩書きにおいて優れているだけでなく、性質においても優れています。著者は詩篇 104:4 を引用して語ります。「天使」とは「メッセンジャー」や「使者」を意味し、「仕える霊」とは職務を担う者を指します。天使たちは確かに高位の使者で、重要な役割を果たします。風の如く素早く神の言葉を伝え、火の如く激しく神の裁きを下します。マリヤがルカの福音書 1 章 26-38 節で天使から神の言葉を受け取り、ヘロデ王が使徒の働き 12 章 23 節で天使を通じて神の裁きを経験したのはその例です。しかし、天使たちの役割は、神の絶対的な支配下にある使者と召使いに限られます。

詩篇 45 篇 6,7 節を見れば、み子の至上性が明らかになります。詩篇の著者もヘブル人への手紙の著者も「神よ。」と呼ぶこの存在は、「御座は世々限りなく」続く神であり、単なる使者ではなく、全てを統治する永遠の王です。神の統治は「義」に基づいており、地上の王とは異なり偏見やえこひいきは存在しません。その心には、地上での生涯を通じて示されたように、正義への愛と、悪への憎悪が宿っています。その 33 年間、み子は一度も欠けることなく父の御心を完璧に実行しました。今や「喜びの油」によって注がれ、神の右手での完璧な喜びと至福を享受するみ子は天国で統治しています。父はみ子のみわぎの完成と完全性を心から喜び、み子を、その仲間たち、すなわち彼の喜びを共に味わう信者たちよりも、遥かに高い位置に置きました。

周りを見渡せば、まだまだ多くの驚異があります。壮大な夕焼け、波しぶきを上げる海、星々で輝く夜空を見てください。それらが創造される以前から、み子は存在し、これらの基盤を築いたのです。これらの基盤がいかに堅固に見えても、衣服のようにやがては擦り切れ、取り替えが必要な着物のように巻き上げられる運命にあります。「しかし、あなたは」とイエスを指し示す著者は、詩篇 102 篇 25-27 節を引用して「いつまでもながらえられます。」と述べます。み子には老いも死も及ばず、その年月に終わりはありません。永遠に変わらぬこの王、すなわちイエス・キリストは、「きのうもきょうも、いつまでも、同じです。」(ヘブル 13:8)。イエスは、まさに驚異的な支配者です。その王座は馬小屋から始まり、権力はきよいみ手によって保持され、天の王国は永遠に続き、その兄弟たちはみ子と喜びを共にします。

著者は詩篇 110 篇 1 節の言葉で結びます。「わたしの右の座に着いていよ。」と神が天使に語ったことは一度もありません。その権力と栄光の座は、み子にのみ与えられています。み子の敵はすべて、彼の足元の踏み台として無力に地に伏します。歴史はみ子の物語となり、み子は教会の永遠の益のために物語を紡ぎ出します。

では天使たちはどうでしょうか？彼らにできることと言えば、「仕える霊であって、

救いの相続者となる人々に仕えるため」遣わされることです。信者のために神の意志を遂行することが彼らの使命であり、同時に限界でもあります。どんなに卑しい信者であっても、天国へ向かうまでの旅路の途中で天使の奉仕を享受できますが、「天使たちを遥かに超える」とされる永遠の救い主が「わたしは決してあなたを離れず、また、あなたを捨てない。」とヘブル人への手紙 13 章 5 節で約束してくださっていることは、はるかに優れた恵みです。

警告

聞いたことから離れていかないでください。

ヘブル人への手紙 2 章 1－4 節

- 1 ですから、私たちは聞いたことを、ますますしっかり心に留めて、押し流されないようにしなければなりません。
- 2 もし、御使いたちを通して語られたみことばでさえ、堅く立てられて動くことがなく、すべての違反と不従順が当然の処罰を受けたとすれば、
- 3 私たちがこんなにすばらしい救いをないがしろにした場合、どうしてのがれることができましょう。この救いは最初主によって語られ、それを聞いた人たちが、確かなものとしてこれを私たちに示し、
- 4 そのうえ神も、しるしと不思議とさまさまの力あるわざにより、また、みこころに従って聖霊が分け与えてくださる賜物によってあかしされました。

著者が、牧師としてどれほど深い配慮を持っていたかが伺えます。彼は、キリストを神の最終的な啓示とし、天使たち以上に遥かに優れた存在として描写する過程で、読者たちへの警告という形で、牧師としての心配りを見せます。「ですから、私たちは聞いたことを、ますますしっかり心に留めて、」と彼は述べ、「押し流されないようにしなければなりません。」と警鐘を鳴らします。こうした表現は私たちを海のイメージへと導きます。「押し流されないように」という言葉は、安全な港へと向かう代わりに通り過ぎてしまう船を連想させます。何らかの風が、ほとんど気付かれずに、ゆっくりと目的地を越えて船を運んでいくのです。「ますますしっかり心に留めて」という言葉は、船を安全に港に着けるために一切の努力を惜しまない船員たちの姿を思い浮かべさせます。

この懸念は、著者にとって大きなものでした。ユダヤ人クリスチャンたちの間では、すでに港を通り過ぎる事態が始まっていたのです。迫害や圧力の風が彼らをさらに外海

へと遠ざけていました。誰かが彼らに呼びかけ、港へ戻るよう警告する必要がありました。その時も今も、神とみことばから離れていくことは、非常にゆっくりとした、気づかれにくいプロセスです。調節弁から空気が漏れ出るタイヤのように、信仰は少しずつ小さくなってしまい、最終的には完全にしぼんでしまいます。

著者は読者たちに対して強い警告を発し、それを深い質問で補強しました。ユダヤ人の読者全員が神の律法の厳しさを理解していたことは間違いありません。律法が授けられた際の様子からもその厳格さが示されています。神ご自身がその律法を語り（出エジプト記 20:1）、二枚の石板に記し（申命記 5:22）、何らかの方法で天使を介して伝える（ガラテヤ人への手紙 3:19）、すべての人にそれを守る義務を課しました。思考、言葉、行動において律法を破った者、それを聞くことを拒み、従わなかった者は、誰もが正当に罰せられる運命にありました。公正かつ公平な神によって、どんな過失も怠慢も見逃されることはありませんでした。これは旧約聖書が、神の民の歴史を通してはっきりと示していることです。

神が律法に対して抱いていたこのような考えを踏まえて、著者はさらに議論を進め、「私たちがこんなにすばらしい救いをないがしろにした場合、どうしてのがれることができますしょう。」と問います。彼は続けてその救いの偉大さについて詳細に語ります。それは「この救いは最初主によって」語られたものでした。栄光ある福音のメッセージを伝えたのは天使ではなく、主ご自身でした。ルカの福音書 19 章 10 節で「人の子は、失われた人を捜して救うために来たのです。」とイエスは言い、マタイの福音書 20 章 28 節では「人の子が来たのが・・・多くの人のための、贖いの代価として、自分のいのちを与えるためである」と、主ご自身の口で語りました。イエスはメッセージそのものであり、そのメッセージの伝達者でもありました。そして、ご自身の犠牲をもって、その救いを可能にした救い主でもあったのです。

この偉大な救いの宣言は、イエスの昇天によって終わったわけではありません。イエスによって任命された初代の弟子たちは、自らが直接聞いたことを証言し、それを確かなものとして示す使命に取り組みました。「確かなものとして示す」とは、法的に適切に文書化することを意味する用語です。つまり、イエスの実際を目撃者である弟子達が公に証言を残したということです。目撃者による正式な証拠を退ける裁判所など、ありえるでしょうか。

さらに、神は、使徒たちを単独で証言させることはなく、「しるしと不思議とさまざまの力あるわざにより、また、みこころに従って聖霊が分け与えてくださる賜物によってあかしされました」。福音は人間の憶測ではなく、神の啓示でした。それは人の考えではなく、神の真理でした。そして神はこれを明確に示されたのです！

「しるし」という用語は、奇跡の背後にある意味合いに焦点を当てます。「さまざまの力あるわざ」、つまり奇跡は、単なる見世物であってはならず、何かを指し示すべきものです。これは、イエスがヨハネ福音書 6 章で五千人に食事を提供した例に顕著に見

られます。イエスはこの奇跡を「命のパン」としてのご自身を指し示すしるしとして用いられました。

「不思議」という言葉は、奇跡が観察者に与える感銘を表し、「さまさまの力あるわざ」という言葉は、全能者が源泉であると示す超自然的な力に言及しています。

「みこころに従って聖霊が分け与えてくださる賜物」が与えられたのは、福音のメッセージの真実性を証明するためでした。このような賜物を今日も強く望む人々は、「みこころに従って」という部分に特に注意すべきです。聖霊は、ご自身の意志に基づいて、誰に、何を、いつ、どこで与えるかを決めました。そして、賜物を与える目的は、偉大な救いのメッセージを証しすることだったのです。

このメッセージは、神ご自身によって与えられ、それを聞いた者によって確認され、聖霊の賜物によってその真実性が証明されました。これが、救いをもたらす唯一のメッセージです。信者も信者でない人も、重大な問いに直面しています。「このような偉大な救いを無視して、どうして逃げることができるだろうか？」著者はこの問いを投げかけ、読者一人ひとりが答えるのを待っています。そして、著者の忠告に耳を傾けるよう促しています。「ですから、私たちは聞いたことを、ますますしっかり心に留めて、押し流されないようにしなければなりません。」

ヘブル人への手紙 2章 5-9節

5 神は、私たちがいま話している後の世を、御使いたちに従わせることはなさらなかったのです。

6 むしろ、ある個所で、ある人がこうあかししています。「人間が何者だというので、これをみこころに留められるのでしょうか。人の子が何者だというので、これを顧みられるのでしょうか。」

7 あなたは、彼を、御使いよりも、しばらくの間、低いものとし、彼に栄光と誉れの冠を与え、

8 万物をその足の下に従わせられました。」万物を彼に従わせたとき、神は、彼に従わないものを何一つ残されなかったのです。それなのに、今でもなお、私たちはすべてのものが人間に従わせられているのを見てはいません。

9 ただ、御使いよりも、しばらくの間、低くされた方であるイエスのことは見えています。イエスは、死の苦しみのゆえに、栄光と誉れの冠をお受けになりました。その死は、神の恵みによって、すべての人のために味わわれたものです。

ヘブル書の著者は 1:14 で信者たちを救済の相続人として述べた後、牧師としての警告を終えてから、再びその考えに言及します。ここで彼が論じているのは、人間が一時

的に住むこの小さな地球のことではなく、「後の世」についてです。人間が地球上で恒久的な所有権を主張できるのは、自身の墓地の一区画に過ぎません。しかし、約束された天の御国では、天使たちではなく、人間がキリストと共に支配するのです。信者は「万物の相続人」(1:2)であるキリストと共に、その玉座につくことになります。聖書は、来たるべき後の世界と、そこでの我々の王権が具体的に何を意味するのかを完全には明らかにしていませんが、そこへの道を明確に指し示しています。

星空に比べると、人類はちっぽけな存在に過ぎません。しかし、神が人間をどのように創造したか見てみましょう。詩篇8篇を引用して、著者はダビデと共に神が人間に対してどれほど恵み深く接してくださるかに驚嘆しています。初めに、神は人間を特別な寵愛の対象としました。全宇宙を統治し、天を手中に収める神は、人間に心を寄せ、人間がよりよく生きるために心を砕きます。神は絶えず人間を思い、数え切れないほどの方法で見守り、世話をします。

さらに、神は人間を特権的な生き物としました。人間は動物と同列にされることなく、創造物の中で特別な地位に置かれました。尊い天使たちにも劣らず、わずかに下に位置するものとして創造され、さらに独自の威厳と、同列のものが存在しない無比の支配権を持つ存在とされました。神の創造の中で最も崇高なものとして、栄光と名誉が人間に与えられるべきでした。これを示すために、神は「万物をその足の下に」従わせました。これは文字どおりの意味で、著者は「彼に従わないものを何一つ残されなかった。」と強調しています。

これは創世記1章26から28節の響きに似ています。そこには次のように書かれています。「神は仰せられた。『さあ人を造ろう。われわれのかたちとして、われわれに似せて。彼らが、海の魚、空の鳥、家畜、地のすべてのもの、地をはうすべてのものを支配するように。』」神がこれほどまでに人間に対して寛大なことには驚かされます。

しかし、今日の人類について考えるとき、本当にこの通りになっているのでしょうか？ 支配する運命にあった人間は、今や、罪の支配下にあります。統治すべきものが、その権威を手放しているのです。人間がどのようにして自らの特権を乱用し、運命を見失い、支配を制限してしまったのか、ヘブル書の著者が説明する必要はありません。読者は、エデンの園での出来事や、罪が人間を勝利者から被害者に変えた経緯をよく知っています。その結果、「現在、全てが彼の支配下にあるわけではない」という状況がもたらされています。

それでもなお、私たちは栄光と名誉に包まれたイエスを目にしています。著者が「イエス」という人間の名前を用いるのは、神が私たちと同じ人間となったことを思い起こさせるためです。私たちの主は、遠く離れた天の玉座で私たちの弱さや無力さを嘆くだけでなく、自ら地上に降りて私たちと同様の人間性を身に纏いました。天使たちにとって、その主が永遠の栄光を離れ、人間の肉体をまとい、ご自身を彼らよりも僅かに低くされた姿は、どれほど驚くべき光景だったことでしょうか。

しかし現在、イエスは、詩篇 8 篇のダビデの言葉以上の意味で「栄光と誉れの冠をお受けに」なりました。その名は「すべての名にまさる名」であり、ピリピ人への手紙 2 章 9 節から 11 節にある通り、「天にあるもの、地にあるもの、地の下にあるもののすべてが、ひざをかがめ、すべての口が、『イエス・キリストは主である』と告白して、父なる神がほめたたえられる」のです。

イエスの犠牲は、「神の恵みによって、すべての人のために味わわれた」ものです。人類の救済のため、イエスは人となり、最終的には死を迎えました。死を迎える、という表現は、恐怖に満ちた杯を一口だけ味わうという意味ではなく、その杯を最後の一滴まで飲み干し、死の全貌を受け入れることを意味します。イエスは文字通り「すべての人」のためにこれを成し遂げました。このことをヘブル書の著者は強調しており、あえて単数形を用いることで「イエスは私個人のために死んだ」という思いを持たせています。また、イエスのこの行為が「神の恵み」によるものであることも強調されています。「恵み」とは、キリスト教の中心的な概念で、無条件で与えられる贈り物を意味します。イエスが罪に満ちた人々全てのために死を全面的に受け入れ、その結果、彼らの罪が赦されたことは、まさに神からの測り知れない贈り物です。

では、人はどうすれば神の約束の地に辿り着くことができるのでしょうか？また、来たるべき世での生活や支配に向け、どのような準備が必要なののでしょうか？その答えはただ一つ、イエスを通してです。イエスの救いのみわざがなければ、人の運命は永遠の命へと導かれることはありません。イエスのような存在から、一体誰が目を逸らすことができるのでしょうか？

ヘブル人への手紙 2 章 10—13 節

10 神が多くの子たちを栄光に導くのに、彼らの救いの創始者を、多くの苦しみを通して全うされたということは、万物の存在の目的であり、また原因でもある方として、ふさわしいことであつたのです。

11 聖とする方も、聖とされる者たちも、すべて元は一つです。それで、主は彼らを兄弟と呼ぶことを恥としないで、こう言われます。

12 「わたしは御名を、わたしの兄弟たちに告げよう。教会の中で、わたしはあなたを賛美しよう。」

13 またさらに、「わたしは彼に信頼する。」またさらに、「見よ、わたしと、神がわたしに賜った子たちは。」と言われます。

人間がイエスの苦しみを通じて栄光へと昇華されることについて、疑問を持つ人もいるかもしれません。しかし、この救済計画は偶然によるものではないことを理解してください。

この計画は、「万物の存在の目的であり、また原因でもある方」とされる永遠の神のみ心と意志から始まりました。全てを創造し、統べ治める神は、特に救済の計画において、何一つ偶然に委ねることはありませんでした。

公正かつ聖なる神は、神を裏切った人々の罪を見過ごすのではなく、その罪と向き合うことで人々を天の栄光へと導く偉業を成し遂げました。神はご自身のひとり子をこの世に送り、「彼らの救いの創始者」となるよう命じました。この「創始者」という言葉は、5章9節で述べられている「彼に従うすべての人々に対して、とこしえの救いを与える者」という表現と同様の意味合いを持ちます。イエスはただ救いへ導くだけでなく、それ以上の役割を果たしました。イエスは単なる道しるべ以上の存在であり、唯一無二の道となったのです。それはヨハネ 14章6節に、イエスを通してでなければ、「だれひとり父のみもとに来ることはありません。」と明記されている通りです。

著者が、神が「彼らの救いの創始者を、多くの苦しみを通して全うされた」と述べた言葉は、「目標の達成」を意味していました。イエスの目標、すなわち救いを整えることは、イエスご自身の苦しみを通して達成されました。イエスの苦しみと死がなければ、神の子らとしての栄光に至る人間は誰一人いないというのが、神の永遠にわたる愛から生まれたご計画だったのです。

全てを統べ治める主が、この世に下り、罪ある人間と一つになるほどの深い愛。それは、どれほど偉大なものでしょうか。人間の罪を聖化する主も、聖化される人間も、同じ家族の一員なのです。罪のないイエスも、罪のある人間も、同じ天の父を持ち、同じ人間性を共有しています。イエスと人類は真の兄弟関係にあり、イエスはこの事実を進んで公に宣言しました。

著者は、ユダヤ人の読者を説得するために再び旧約聖書を引用しました。特に、キリストの苦しみに焦点を当てたこの部分では、イエスの死を予言するメシア的詩篇、詩篇 22 篇を引き合いに出しています。苦難を受けるこの救世主は、自分の兄弟たちに対して御父の名を忠実に宣言しました。イエスはただその神性を彼らに示しただけではなく、彼らと共に詩篇や賛美を歌い、天の父を褒めたたえました。

その後、著者はイザヤ書からさらに二つの言葉を引用しています。まず、イザヤ 8章 17 節のメシアの表象として語られる「わたしは彼に信頼する。」という言葉を引き起こしています。これにより、キリストの地上での生涯、祈り、そして神への絶対的信頼を振り返っています。イエスは死に際しても、「父よ。わが霊を御手にゆだねます。」と述べました（ルカ 23:46）。次にイザヤ 8章 18 節では、「見よ。私と、主が私に下さった子たち」とあります。

イザヤと同様、メシアはご自身が伝えたメッセージを拒絶され、周囲から抑圧されましたが、神が与えてくださった信者たち、すなわち子どもたちと共に、御父への信頼を保ちました。これらの三つの引用はすべて、救いに来た人々の中でのキリストの確固た

る存在感を示しています。そして、私たちの兄弟としてのキリストと、その愛に感動する理由を人々に与えています。

ヘブル人への手紙 2 章 14—18 節

14 そこで、子たちはみな血と肉とを持っているので、主もまた同じように、これらのものをお持ちになりました。これは、その死によって、悪魔という、死の力を持つ者を滅ぼし、

15 一生涯死の恐怖につながれて奴隷となっていた人々を解放してくださるためでした。

16 主は御使いたちを助けるのではなく、確かに、アブラハムの子孫を助けてくださるのです。

17 そういうわけで、神のことについて、あわれみ深い、忠実な大祭司となるため、主はすべての点で兄弟たちと同じようにならなければなりません。それは民の罪のために、なだめがなされるためなのです。

18 主は、ご自身が試みを受けて苦しまれたので、試みられている者たちを助けることがおできになるのです。

キリストが私たちの兄弟になることで達成したことは何でしょうか？著者は最初に、サタンに焦点を当てています。「滅ぼし」という表現は、ここでは存在を消滅させることではなく、力を無効化することを意味します。これこそがキリストが死の権威を持つ悪魔に対して行ったことです。死は、悪魔が人間に対して握っていた力の源でした。しかし、神のみが死を完全に支配し、誰がいつ死ぬかを定めます。悪魔は罪をこの世に持ち込むことで、罪の報酬として地上と地獄に死をもたらしました。人間が罪を犯し続ける限り、悪魔はこの恐ろしい代価を支払わせることができます。罪人の末路は何でしょうか？それは、一生を奴隷のように過ごし、サタンが死の鞭を振るうたびに恐れおののくことです。

しかし、それはもう過去の話です！代わりに、信者はパウロの言葉である、ピリピ人への手紙 1 章 23 節に共感します。「私は、その二つのものの間に板ばさみとなっています。私の願いは、世を去ってキリストとともにいることです。実はそのほうが、はるかにまさっています。」私たちの兄弟であるイエスは、悪魔の力を無効化し、死という最終兵器を無力化しました。これを達成するため、イエスは「人間の性質を共有した」のです。イエスは私たちと同様の肉体をとり、私たちを悪魔の束縛から解放するために、聖なる死を遂げました。

イエスは、サタンが人間を苦しめていた武器を使ってサタン自身を打ち負かしました。サタンはまるで凶暴な犬が鎖に繋がれたかのように無力化されました。もしまだその噛み傷で人が死ぬとすれば、それはその人がサタンに近づきすぎ、永遠のいのちの王であるイエスから遠ざかりすぎたためなのです。

キリストがさらに成し遂げたことは何でしょうか？著者は「アブラハムの子孫」としての読者に理解しやすい表現を用いて、キリストを「あわれみ深い、忠実な大祭司」と称しました。ヘブル書独特の表現である「大祭司」は、イエスがどれほど素晴らしい存在であったかを示しています。イエスは兄弟たちに対しては慈悲深く、神に対しては完全な忠実さで仕えました。イエスは、苦しみや死を意味していたとしても、神のみこころを完全に遂行しました。

「贖罪」という言葉は、ユダヤ人にとって特別な意味を持ち、大贖罪の日に思いを馳せます。この日、大祭司は神殿の奥で動物の血を慈悲の座に振りかけ、罪の清めと神との和解を象徴しました。

しかし、私たちの大祭司キリストが用いるのは、象徴的なものではないご自身の聖なる血です。これは人類の罪を根底からきよめ、神の怒りを鎮める、永遠の贖罪をもたらします。キリストの救いは、罪のない不死の天使たちのためではなく、あくまでも罪深い死ぬべき運命の人間たちのために与えられています。

著者が言う「アブラハムの子孫」や「民」は、救いの古い約束を受けたイスラエルの子孫、つまりユダヤ人を指しますが、これは異邦人も救済の対象に含んでいると言えます。全人類が共通してこの大祭司を必要としているからです。

著者が触れたもう一つの点は、イエスの受肉に基づいています。イエスが人間としてこの世に生まれたことは、イエスが試練を乗り越え、私たちに助けを提供できる唯一の存在であることを意味します。人として試練にあったことのない者は人の痛みに共感することができず、敗北者は人を救うことができません。しかし、試みに完全に勝利した、まことの神であると同時にまことの人間であるイエスは、確かに人類を救うことができます。まさしく、イエスが多くの苦しみを通じて目標を達成することが、神にとって最も相応しいことでした（ヘブル 2:10）。罪のないイエスの試練は私たちのものとは異なり、完全に外部からもたらされたものでした。それにも関わらず、試練は非常に現実的でした。ゲッセマネでのイエスの苦悩は、いかにその試練が現実的であったかを物語っています。そして、イエスはこの試練に打ち勝ちました！今や、私たちの試練がイエスの特別な関心事です。イエスは、私たちがあらゆる攻撃に立ち向かうことができるための準備を整えてくださいました。イエスは、私たちを守ります。この事実は、当時困難な状況にあったユダヤ人クリスチャンだけでなく、私たち全員にとって必要な保証です。

モーセよりも優れている

ヘブル人への手紙 3章 1-6節

- 1 そういうわけですから、天の召しにあずかっている聖なる兄弟たち。私たちの告白する信仰の使徒であり、大祭司であるイエスのことを考えなさい。
- 2 モーセが神の家全体のために忠実であったのと同様に、イエスはご自分を立てた方に対して忠実なのです。
- 3 家よりも、家を建てる者が大きな栄誉を持つと同様に、イエスはモーセよりも大きな栄光を受けるのにふさわしいとされました。
- 4 家はそれぞれ、だれかが建てるのですが、すべてのものを造られた方は、神です。
- 5 モーセは、しもべとして神の家全体のために忠実でした。それは、後に語られる事をあかしするためでした。
- 6 しかし、キリストは御子として神の家を忠実に治められるのです。もし私たちが、確信と、希望による誇りとを、終わりまでしっかりと持ち続けるならば、私たちが神の家なのです。

著者は一貫してイエスが他のどんな人物やものよりも優れているという論点を展開してきました。ここで彼は、ユダヤの歴史と思想において極めて重要な旧約聖書の人物に焦点を当てています。ユダヤ人にとって、モーセを超える人物を想像することは極めて困難で



モーセと十戒

す。

実際、新約聖書はモーセの偉大さを称賛し、彼について 80 回ほど言及しています。これは旧約聖書の人物の中で最も多い回数です。しかし、モーセがどれほど偉大であっても、イエスはそれを遥かに上回ります。そのため、イエスを見捨てることは、モーセを見捨てることよりも遥かに深刻な結果を招きます。これは、迫害により、そうすることに誘われているユダヤ人の読者への強い警告です。

「天の召しにあずかっている聖なる兄弟たち」と著者は真剣な警告を開始します。手紙で初めて、彼は読者たちに直接語りかけ、その助言をより心温まるものにしていきます。「兄弟たち」とはキリストを信じる者同士を指し、「聖なる」とはイエスによって罪から清められ、奉仕のために聖別された者たちを意味します。彼らの「召し」は「天の召し」であり、天から来て最終的には天の神へと導くものです。私たちは、このような召しを軽んじたくはないはずです。

そのため著者は「イエスのことを考えなさい」と警告しています。イエスを慎重に、絶えず深く考察することが必要です。イエスという名前を用いることで、イエスの地上での使命、神が人となって達成しようとした目的に焦点が当てられます。「信仰の使徒であり、大祭司である」という肩書きもイエスの使命に注目を集めます。「使徒」という言葉は新約聖書でイエスに唯一使われ、使命を帯びた者を指します。神はご自身の息子を公認の使者として送り、神のご意志を伝え、実行させました。「大祭司」は、2 章 17 節で触れたように、イエスの使命の犠牲的な側面を指し、後にさらに詳しく説明されます。このイエスこそが、読者たちが既に認め、今後も彼らの信仰の核として認め続けるべき存在だったのです。

イエスがモーセを上回ることは、忠実さに関する問題ではありません。両者ともに自分たちに与えられた役割を忠実に果たしました。民数記 12 章 7 節では、神ご自身がモーセについて「彼はわたしの全家を通じて忠実な者である。」と言及しています。モーセは神が選んだ民、イスラエルのために自らを捧げました。彼はイスラエルの存続と引き換えに自分の名を神の書から抹消することを申し出たほどでした。イエスもまた、使徒や大祭司として任命された者に対して忠実であったことは疑いようがありません。聖木曜日の夜、ヨハネ 17 章 4 節において、イエスは天の父に「あなたがわたしに行わせるためにお与えになったわざを、わたしは成し遂げて、地上でああなたの栄光を現しました。」と語りました。

比較の焦点は忠実さではなく、地位にありました。どれほど豪華に建てられ装飾された家であっても、その建築家に与えられるべき名誉を、家に与える人はいません。建築家と建築物を同一視することは不合理です。モーセとイエスの例を見てみましょう。モーセは重要な指導者でしたが、イスラエル民族の一員に過ぎませんでした。イエスはその家および「すべてのもの」を造られた方である神です。被造物であるモーセは、イスラエルにおいて高い地位を占め、尊敬に値しましたが、モーセを含む全ての創造主であるイエスは、モーセをはるかに上回る、最高の尊敬に値するのです。

創造主が被造物よりも優れているように、子は下僕よりも優れています。モーセはイスラエルの家における「下僕」や「しもべ」でした。これは強制された奴隷ではなく、奉仕したいと願う自由な召使いを指しています。出エジプト記に繰り返し登場する「主が命じた通りに行った」という言葉が示す通り、モーセは忠実な召使いでした。モーセの最大の貢献は「将来語られるべきことについての証言」でした。ヨハネの福音書 5 章 46 節で、イエスはこの意味を明らかにし、当時のユダヤ人に「もしあなたがたがモーセを信じているのなら、わたしを信じたはずです。モーセが書いたのはわたしのことだからです。」と述べました。

「しかし『キリスト』は更に偉大です」と著者は述べ、本書において初めてこの称号を用いています。「キリスト」という言葉は、イエスの高位とその立場にふさわしい敬意を示します。キリストは家の中のしもべではなく、「神の家の息子」としての立場にあります。イエスはその家の主であり、創始者であり、統治者です。そして、この「家」はモーセの時代のように遠い未来のものではなく、著者はそれを現在の現実として扱っています。「私たちは彼の家である」と著者が参照するその家とは、何を意味するのでしょうか？それは、エペソ人への手紙 2 章 20、21 節に「使徒と預言者たちの基礎の上に築かれた神の家族で、キリスト・イエス自身が最も重要な礎石です。彼の中で全体が結合され、主において聖なる神殿として成長します」と記されている家族です。旧約聖書と新約聖書のすべての信者は、この栄えある家族の一部であり、息子によって築かれ、統治されています。しかし、警告があります！一部の人は、著者が後に示すように、この栄えある家での彼らの位置を失っています。しかし、私たちの節で、著者は「私たちが自慢する勇気と希望を持ち続ける」ように励ましています。勇気とは、言葉が自由に流れることを可能にする自信の感覚です。このような主観的な勇気は、「私たちが自慢する希望」なしでは意味をなしません。「自慢する」という言葉は、自慢の行為ではなく、自慢の理由を指します。希望は、私たちの自慢の理由と内容を示し、信仰の目を、その卓越したキリスト・イエスにおいて私たちが持っているもの、そしてこれからも永遠に持ち続けるものに向けさせます。

警告

イスラエルのように、不信仰によって心を硬くしないでください。

へブル人への手紙 3 章 7-11 節

7 ですから、聖霊が言われるとおりです。「きょう、もし御声を聞くならば、
8 荒野での試みの日に御怒りを引き起こしたときのように、心をかたくなにしてはならない。

9 あなたがたの父祖たちは、そこでわたしを試みて証拠を求め、四十年の間、わたしのわざを見た。

10 だから、わたしはその時代を憤って言った。彼らは常に心が迷い、わたしの道を悟らなかつた。

11 わたしは、怒りをもって誓ったように、決して彼らをわたしの安息に入らせない。」

キリストとモーセの比較から、著者はそれぞれの信者へと話題を転じます。ユダヤ人の読者にとって、イスラエルが40年間の荒野での旅で経験したことほど強力な警告はないでしょう。モーセは特に出エジプト記でこれらの出来事を記録し、ダビデはそれを詩篇95:7-11で改めて要約しました。次に著者は、ダビデの詩から引用しつつ、「聖霊が言われる」と述べています。再び、私たちは靈感の事実を確認します。ダビデの言葉は聖霊の言葉です。後のヘブル4章7節では、この同じ節が繰り返され、「神は…ダビデを通して…語られたのです」と著者はさらに具体的に述べています。

神がダビデを通して、私たちに伝えたいことは何でしょうか？それは非常に重要です。「今日、もし彼の声を聞くならば、心を硬くするな」ということです。「今日」とは、神が語る現在を指し、その一日の長さは、神のみが決定できます。「硬くする」という表現は、曲がらない、屈しない、乾燥して硬いもの、例えば木の枝などを想起させます。これを心に適用することは、ユダヤ人が全存在の拠り所としている心に対する、霊的な災難を意味します。それは、神の恩恵を味わい、その素晴らしさを知りながらも、意図的な不信仰によって、神の恩恵に背を向ける心を表します。このように意図的な不信仰に固執する心は、神の霊が悔い改めを働かせることが不可能なため、霊的自殺とも呼ぶことができます。

荒野でのイスラエルを思い出してください。出エジプトの始まりで、紅海の岸で勝利を収めた20歳以上の男性60万人のうち、約束の地に最終的に入ったのはヨシュアとカレブだけでした。他の者たちは心が硬くなったため、その末路は、荒野に点在する墓の中となりました。ヘブライ語では詩篇95篇の「反抗」と「試練」という言葉は、メリバとマッサ、すなわち、レフィディムで人々が飲む水がない、と不平を言った出来事を指す固有名詞です（出エジプト記17章を参照）。著者が引用した旧約聖書のギリシャ語訳、七十人訳では、これらは「反抗」と「試練」と訳され、ここでは40年間全体を指して使われています。40年にわたり、その始めから終わりにかけて、まるで冬に川が徐々に凍っていくように、イスラエル人の心の硬化の過程は進みました。彼らは神が自分たちのためになさったこと、そして、神が一度たりとも彼らを見放さなかつたことを目にしながら、頑固な不信仰のうちに神を試し続けました。彼らは目で見たものの、心では理解せず、絶えず自らの中で神の存在を示す新たな証拠を求め続けました。

詩篇95篇の教えに基づき、ヘブル書の著者は神のみことばを引用して「だから、わたしはその時代を憤って言った。」と書いています。「憤る」とは強い表現で、神が罪に対して示す避けがたい反応を意味します。神は、ヘブル人への手紙12章29節で「焼き尽くす火」

と表現され、罪を甘く見たり、罪人を永遠に放置したりはしません。心が神の「今日」を全く無視し、神の「道」を一貫して軽蔑する時、イスラエルが経験したように、神の異なる反応が訪れます。荒野で神の寛容を全て使い果たしたイスラエルは、神が正義の怒りで「彼らは決して私の休息に入ることはない」と誓うのを聞きました。神が誓う時、それは決して変えられないことであり、非常に重大な意味を持ちます。地上の約束の地カナンを失うことは十分深刻ですが、天のカナンである御国を失うことはそれ以上に深刻です。全ての読者への警告は明瞭です。イスラエルの民が犯した過ちを、私たちは繰り返してはなりません。

ヘブル人への手紙 3 章 12-14 節

12 兄弟たち。あなたがたの中では、だれも悪い不信仰の心になって生ける神から離れる者がいないように気をつけなさい。

13 「きょう」と言われている間に、日々互いに励まし合って、だれも罪に惑わされてかたくなにならないようにしなさい。

14 もし最初の確信を終わりまでしっかり保ちさえすれば、私たちは、キリストにあずかる者となるのです。

牧師としての配慮を込めて、著者は警告を読者や信仰の仲間に向けて適用します。「兄弟たち。あなたがたの中では、だれも悪い不信仰の心になって生ける神から離れる者がいないように気をつけなさい。」と著者は勧め、一人たりとも失われることなく、全員が救われることを望んでいます。不信仰は心の問題であり、内面に関わるものです。そして、キリストの救済を拒否する不信仰は、常に深刻です。「生ける神から離れる」不信仰な心に対して、著者は読者一人ひとりに対して次のように警鐘を鳴らします。これは偶然の流れなどではなく、かつては神の言葉を聞き、信じた心が、意図的に生ける神から自らを切り離す自殺行為です。迫害の圧力のためにユダヤ教に戻ろうと考えている読者はいませんか？警告を受け止めてください。イエスから離れることは、生きる神を拒絶することなのです。イエスはヨハネ 5 章 23 節で、「子を敬わない者は、子を遣わした父をも敬いません。」と述べています。

彼らは全員、お互いから絶えず励ましを受ける必要がありました。罪は非常に巧妙に人を欺きます。それは恐ろしい目的を隠し、毒の味を薄め、最終的には完全に人を破壊します。迫害に直面し、キリスト教からユダヤ教に戻る行為が、それほど深刻でなく、むしろ賢明に思えますか？「気をつけなさい」と著者は警告します。「だれも罪に惑わされてかたくなにならないようにしなさい」と。著者はさらに、「互いに励まし合って」と促します。キリスト教徒は孤立した存在ではなく、共同体の中で生きるものです。信仰と霊的健康は、個人と神との間の問題だけでなく、信仰の仲間の間での極めて重要な関心事でもあります。地域の

集会に参加することは、「日々互いに励まし合う」ために、単に望ましいだけでなく必須です。

信者たちはキリストにおいてすでに多くを共有しており、将来にはさらに多くの良いものが用意されています。「もし最初の確信を終わりまでしっかり保ちさえすれば」という条件の下で、天から来た救い主によって与えられる全ての祝福が私たちのものとなります。信仰に導かれた当初、読者たちが示した強固で自信に満ちた信仰は、何と素晴らしいものだったのでしょうか。しかし、マルコの福音書4章16、17節で言及されている岩だらけの地のように、信仰の種が「根を張らないで、ただしばらく続くだけです。それで、みことばのために困難や迫害が起こると、すぐにつまずいてしまいます。」ということになるとすれば、どんなに悲しいことでしょうか。

ヘブル人への手紙3章15-19節

15 「きょう、もし御声を聞かならば、御怒りを引き起こしたときのように、心をかたくなにしてはならない。」とされているからです。

16 聞いていながら、御怒りを引き起こしたのはだれでしたか。モーセに率いられてエジプトを出た人々の全部ではありませんか。

17 神は四十年の間だれを怒っておられたのですか。罪を犯した人々、しかばねを荒野にさらした、あの人たちをではありませんか。

18 また、わたしの安息に入らせないと神が誓われたのは、ほかでもない、従おうとしなかった人たちのことではありませんか。

19 それゆえ、彼らが安息に入れなかったのは、不信仰のためであったことがわかります。

著者は読者への警告を繰り返し、心を硬くしないよう呼びかけます。強い質問で、その要点が力強く伝えられます。「神の声を聞いて反逆したのは誰でしょうか？」それは神の驚異的なみわざを一度も経験しなかった無知な人々ではなく、「モーセによってエジプトから導かれたすべての人々」でした。「神が40年間にわたり怒り続けたのは誰でしょうか？」それは知識がなかった、あるいは無罪だった人々ではなく、「罪を犯した人々」でした。神の怒りは気まぐれでも急ぎ足でもありませんでした。神の摂理を豊かに体験した人々の拒絶と反逆が、砂漠に散らばる無数の墓の原因だったのです。

「わたしの安息に入らせないと神が誓われた」のは誰でしたか？それは、ゆるしの余地のない、神の素晴らしさを知りながらも不従順で、神を信じることを拒んだ人々でした。この重要な点を見逃す読者はいるのでしょうか。著者は、彼らがカナンに入ることができなかった理由を「彼らが不信仰のために入ることができなかった」と結論づけています。地上および天上のカナンでの安息を、その世代のイスラエル人から奪ったのは何でしょうか？答えは

不信仰です。現代において、優れた救い主イエスから離れる人々に対する神の扱いは、これと同じくらい厳しいのでしょうか？

ヘブル書の初期の読者と現代の私たちには、多くが求められているようです。信仰のレースには常に全力を出すことが求められ、危険と障害に満ちたコースを走り続けなければなりません。では、どうやってこれを乗り越えることができるのでしょうか？「信仰の使徒であり、大祭司であるイエスのことを考えなさい。」（ヘブル3:1）つまり、イエスに心を留めなさい、と著者は促します。優れたイエスと、そのみことばを、私たちの確信の堅固な基盤としましょう。神よ、どうか私たちの信仰を、私たち自身や私たちの行動に頼るのではなく、イエスがどなたであるか、イエスが人類のために何を成し遂げたかに基づかせてください。そうすれば、私たちは人生という荒野の旅を、イスラエルとは異なり、良い始まりと良い終わりで迎えることができるでしょう。

彼らが失った安息を求めましょう。

ヘブル人への手紙4章1－5節

- 1 こういうわけで、神の安息に入るための約束はまだ残っているのですから、あなたがたのうちのひとりでも、万が一にもこれに入れられないようなことのないように、私たちは恐れる心を持つようではありませんか。
- 2 福音を説き聞かされていることは、私たちも彼らと同じなのです。ところが、その聞いたみことばも、彼らには益になりませんでした。みことばが、それを聞いた人たちに、信仰によって、結びつけられなかったからです。
- 3 信じた私たちは安息に入るのです。「わたしは、怒りをもって誓ったように、決して彼らをわたしの安息に入らせない。」と神が言われたとおりです。みわざは創世の初めから、もう終わっているのです。
- 4 というのは、神は七日目について、ある個所で、「そして、神は、すべてのみわざを終えて七日目に休まれた」と言われました。
- 5 そして、ここでは、「決して彼らをわたしの安息に入らせない」と言われたのです。

これらの節でのキーワードは「安息」です。著者はそれを8回使用し、さらに特別な「安息日の休息」の説明を加えています。著者が説明するこの安息とは、よほど重要なのでしょうか。事実、キリストを信じるすべての信者を待ち受けている天国での永遠の安息は極めて重要です。そのため著者は、牧師として、読者たちに永遠の安息についての緊急の警告を発しています。「万が一にもこれに入れられないようなことのないように、私たちは恐れる心を持つようではありませんか。」と著者は促しています。創造の

業を終えた際に、神は天の安息に入りました。著者は、私たちが同様の天の安息を、だれ一人として逃さないことを望みました。それはヨシュアのもとでの、イスラエル人のカナンの地への入国が指し示していたものでもあります。

しかし、その安息は自動的に得られません。荒野で信仰を失ったイスラエルは、天の安息を失うことがどういうことかについて、私たちに警告を発しています。まだ神の「約束」（著者が14回も使用し、新約聖書のどの書よりも多く使用されている言葉）を信じている人たちは、どうか用心してください。イスラエルが、すべての利点にもかかわらず約束された安息を失ったならば、読者もそうなるかもしれません。だからこそ、私たちは気をつけなければならない、と著者は促したのです。「あなたがたのうちのひとりでも、万が一にもこれに入れないようなことのないように」と。

イスラエル人は、そして読者はどのように、この天の安息を失うかもしれないのでしょうか？それは彼らが約束された安息について聞いていなかったり、どのようにしてそこに入るかを知らなかったからではありません。「福音を説き聞かされていることは、私たちも彼らと同じなのです」と、著者は彼らに思い出させました。神の永遠の安息への入り口は、約束された救い主を通じて、隠された謎では決してありませんでした。「あなたがたの父アブラハムは、わたしの日を見ることを思って大いに喜びました。彼はそれを見て、喜んだのです。」とヨハネの福音書8章56節で、イエスはユダヤ人に伝えました。また、イエスは荒野で彼らを導いたモーセに言及して、ヨハネ5章46節で「モーセが書いたのはわたしのことだからです。」と言いました。

旧約時代の民、特にエジプト記に登場するユダヤ人は、この福音の約束を預言において受けていました。著者が手紙を書いているヘブルのキリスト教徒たちは、その約束を成就の中で受けています。どちらの時代の人々も、天の安息への扉を開く鍵として、カルバリ丘で十字架にかかった救い主を見ていました。旧約時代の信者たちはイエスを待ち望み、新約時代の信者たちはイエスを振り返ります。どちらにとっても、救い主は同じです。

「ところが」と著者は警告します。「その聞いたみことばも、彼らには益になりませんでした。みことばが、それを聞いた人たちに、信仰によって、結びつけられなかった[信じなかった]からです。」キリストを見捨てるように誘惑されたヘブルのキリスト教徒たちは、その警告を理解したのでしょうか？また、私たちはどうでしょうか？信仰は単に耳の問題ではなく、心の問題です。耳で福音のメッセージを受け取っても、永遠の安息には至りません。「信仰」が必要であると著者は私たちに思い出させます。著者はこの言葉を、好んで使う言葉として初めて使用しています。イスラエルは信仰の欠如のために約束された安息を失ってしまいました。しかし、私たちはイエスの尊い福音を聞くたびに、「信じます。不信仰な私をお助けください。」(マルコ9:24)と絶え間なく願い、祈るべきではありませんか？

不信者には天の安息はありませんが、信者にとっては、それは確かで確実です。「信じた私たちは安息に入ります。」と著者は現在形で書いています。その安息へ入ることは今、この瞬間に進行中です。「まことに、まことに、あなたがたに告げます。わたしのことばを聞いて、わたしを遣わした方を信じる者は、永遠のいのちを持ち、さばきに会うことがなく、死からいのちに移っているのです。」とイエスはヨハネ5章24節で言いました。ヘブル書の著者も「神のすばらしいみことばと、後にやがて来る世の力とを味わった」と6章5節で書いています。これらの引用は、私たちが現在、その安息に入っていることを指しています。

私たちはこの世では旅人に過ぎず、天国が私たちの真の家です。私たちはその家への荒野の道を一步一步進みながら、そこで与えられる完全な安息に向かっていきます。しかし、その道中でさえ、旅がどれほど長く続いたとしても、その安息は私たちのものです。神が「私の安息」と呼ぶその完全な平和と神との完全な交わりを少し味わうだけで、私たちはそのすべてを味わい尽くしたいと切望します。しかし、果たして、この「私の休息」という言葉に込められた深遠な意味を完全に理解し、言葉で表現することが私たちに可能なのでしょうか？

著者は再び詩篇95章11節を引用しています。神が正義の怒りから、荒野のイスラエル人が天の安息に入ることをゆるさないと誓ったとき、神はご自身の約束を破棄したり、天の扉を完全に封鎖したりしていただけではありません。その喜びに満ちた安息はまだ変わらず存在し続けています。それは今までも存在し、これからも存在し続けるでしょう。この重要な真実を、著者は、私たちが天地創造の時代に立ち返らせることで強調しています。

旧約聖書において、創世記2章2節、出エジプト記20章11節、31章17節の三箇所、「神は第七日目に、なさっていたすべてのわざを休まれた。」と記されていますが、著者は「ある箇所で」と言っています。これは靈感を受けた記述であることに改めて注目しましょう。モーセがこれらの節を書いたにも関わらず、著者は「神は七日目について、ある個所で、『そして、神は、すべてのみわざを終えて七日目に休まれた』と、神ご自身が述べたように記しています。神の七日目の休みとは何だったのでしょうか？それは、すべてを創造した六日間の疲労を取るために設けられたものでは決してありません。預言者イザヤは私たちに思い出させます。「主は永遠の神、地の果てまで創造された方。疲れることなく、たゆむことなく、その英知は測り知れない。」(イザヤ40:28)。また、それは神が雀を見守ることや私たちの頭の毛を数えることを止めた、無活動の状態でもありません。ヨハネの福音書5章17節でイエスはユダヤ人に、「わたしの父は今に至るまで働いておられます。ですからわたしも働いているのです。」と言いました。

神の七日目の休みは、完成された聖なる仕事の後の休息であり、完璧な満足と無限の充足感によって特徴づけられる休息です。神はこの休息、この永遠の至福と完全な充足を、その子どもたちと分かち合いたいと願っています。創世記1章を読むと、創造の各日「夕があり、朝があった」と記述されていることに気づきます。しかし、七日目について

はそうは言われていません。創造の六日間は始まりと終わりがありましたが、休息の日についてはそうは述べられていません。もちろん、その七日目も他の日々と同じく 24 時間の一日であったでしょう。しかし、それが象徴する天の安息には終わりがありません。

創造が完了して以来、人間の罪にも関わらず、神の安息への道は開かれています。「決して彼らをわたしの安息に入らせない。」と神はイスラエルについて言いましたが、他の者は入るでしょう。罪の重荷に疲れ果てた世界に、永遠の神は開かれた招待を差し伸べています。「…わたしのところに来なさい。わたしがあなたがたを休ませてあげます。」(マタイ 11:28)。その素晴らしい点は、神が招待するだけでなく、御言葉と聖礼典を通じた神の恵みが、私たちの中で、永遠の安息へ入るために必要な信仰を育むことにあります。

ヘブル人への手紙 4 章 6-11 節

6 こういうわけで、その安息に入る人々がまだ残っており、前に福音を説き聞かされた人々は、不従順のゆえに入れなかったのですから、

7 神は再びある日を「きょう」と定めて、長い年月の後に、前に言われたと同じように、ダビデを通して、「きょう、もし御声を聞くならば、あなたがたの心をかたくなにしてはならない。」と語られたのです。

8 もしヨシュアが彼らに安息を与えたのであったら、神はそのあとで別の日のことを話されることはなかったでしょう。

9 したがって、安息日の休みは、神の民のためにまだ残っているのです。

10 神の安息に入った者ならば、神がご自分のわざを終えて休まれたように、自分のわざを終えて休んだはずです。

11 ですから、私たちは、この安息に入るよう力を尽くして努め、あの不従順の例にならって落後する者が、ひとりもないようにしようではありませんか。

イザヤ書の 40 章 8 節で、イザヤは「私たちの神のことばは永遠に立つ。」と宣言し、マタイ 24 章 35 節で、イエスはそれを繰り返すように「わたしのことばは決して滅びることがありません。」と言っています。神の言葉はいつも確かです。神は安息を約束され、イスラエルがその安息を失ってもなお、他の人々がその安息に入るという意味で、約束は守られています。「その安息に入る人々がまだ残っており」と本文にあります。「その安息に入る人々」とは、神ができるだけ多くの者を望んでおられることを意味します。ここで再び、この安息に入る道は、「福音を説き聞かされた」ことであること、つまり、福音と信仰に密接な関係があることに注意します。荒野のイスラエルは、「不従順のゆえに」安息を失いました。「不従順」という言葉はしばしば福

音に関連して使われ、不信仰、神の約束を信じることを拒否することと同じ意味を持っています。

しかし、神が安息を与えた「今日」は、砂漠での悲しい出来事で終わったわけではありません。「それから400年以上も経ってから、神はダビデの時代のイスラエルに安息を与えられました。また、神の「今日」がダビデの時代のイスラエルで終わったわけでもありません。何世紀も後に神の言葉を読むヘブライ人クリスチャンたち、そして今日のすべての人たちに、神はいまだに語っておられます。現在が神の「今日」なのです。それがいつまで続くかは、神のみがご存じです。みことばを通して、神の声は私たちに語りかけ、福音を宣べ伝え、イスラエルがかつて聞いたときよりも輝かしい形で、神の安息を差し出しています。8節のヨシュアへの言及は、神が語られる安息についてのさらなる説明を加えています。これは、ヨシュアが、道を踏み外した世代のイスラエルの民に与えたような、地上のカナンの地への入り口ではありません。数百年後に神がダビデを通して語ったように、これは天国のカナンのことです。ギリシャ語では、ヨシュアとイエスという名前は同じです。どちらが言及されているかは、前後の文脈から判断する必要があります。考えてみてください！最初の「ヨシュア」は、イスラエルの民の多くを神のまことの安息に導くことができませんでした。もう一人の「ヨシュア」が到来しました。その方は、ご自分の命と尊い血とを、人類の罪の代価として差し出すことができ、実際にそれを成し遂げたのです。

ポイントは明確です。「したがって、安息日の休みは、神の民のためにまだ残っているのです。」「安息日」は英語で Sabbath-rest と訳され、ヘブル書の著者は新約聖書の中でここでしか見られない用語を用いて、考えを組み合わせています。「神の民」つまり、すべての真の信者である霊的なイスラエルは、平和とゆるしを頂き、神と結ばれ、神との交わりと、天国での永遠の休息の約束を持っています。天地創造後の最初の安息日における神の安息は、旧約聖書で守られてきたすべての安息日と同様に、この素晴らしい安息を象徴するものでした。

新約時代に生きる私たちにとって、その姿はさらに明確です。コロサイ人への手紙2章17節が指摘するように、「これらは、次に来るものの影であって、本体はキリストにあるのです。」キリストにおいて、影は現実となりました。キリストの死と復活によって、神の永遠の安息への道は完全に整えられ、大きく開かれたのです。今、私たちに必要なのは旧約聖書どおりの安息日ではなく、イエス・キリストへの信仰です。私たちは、「手ごわい敵にも ひるまぬよう 強い信仰 あたえたまえ」(CW* 405 番1節 *Oh, for a Faith That Will Not Shrink*)と神に祈ります。

休息とは、労働の一時的な停止、疲労を引き起こすものからの離脱を意味します。これは、キリストがもたらし、私たちが導かれる天の休息にも当てはまります。「神の安息に入った者ならば、神がご自分のわざを終えて休まれたように、自分のわざを終えて休んだはずです」と、著者は私たちに教えています。信仰に至る前の人は、自ら

の救いを自力で達成しようと努力します。無駄で恐れに満ちた試みで、罪の汚れを消し去り、その罪の代償を支払おうとします。しかし、信仰を持ってイザヤ書 40 章 1 節、2 節に記されている主の言葉を聞くと、その人にどれほどの休息が与えられることでしょうか。「『慰めよ。慰めよ。わたしの民を』とあなたがたの神は仰せられる。『エルサレムに優しく語りかけよ。これに呼びかけよ。その労苦は終わり、その咎は償われた。そのすべての罪に引き替え、二倍のものを【主】の手から受けたと。』」

キリストのみわざを知り信じる者は、自分自身の無駄な努力をすぐに放棄します。救済を受けた後も、信者は引き続き労働します。自らを神に献げ、神を愛しその信者のためにご自身を捧げたイエスへの献身的な奉仕を行います。この奉仕活動に飽きることはありませんが、時にはその最中に疲労を感じることもあります。黙示録 14 章 13 節に記されている天の声を聞くと、どれほど素晴らしい瞬間でしょうか。「『今から後、主にあつて死ぬ死者は幸いである。』」御霊も言われる。「『しかり。彼らはその労苦から解き放されて休むことができる。彼らの行いは彼らについて行くからである。』」

信者は今、部分的に神の栄光ある休息を味わい、天国でそれを完全に永遠に味わいたいと願っています。そのために、牧師としての親切心を持つ著者の言葉に耳を傾け、「私たちは、この安息に入るよう力を尽くして努め・・・ようではありませんか」との警告に従います。良いスタートだけでは不十分で、キリストの御旗に対する名ばかりの忠誠や、時折の口先だけの従順では足りません。その休息を得るためには、全力投球が必要です。常に注意深く行動し、荒野において不服従で不信仰だったイスラエルのようにならないようにしなければなりません。そして、その努力は正しい方向、つまり神の福音へと常に近づき、その力強い恵みが信仰を支え強化するように向けられなければなりません。私たちが「イエスよ、慈悲をもって私を愛すべき休息の地へ導いてください」と祈る前に、「主よ、このわたしの心を開いて、みことばを聞かせ、みちびいてください」(CW* 282 番)と謙虚に祈ることが必要です。

*CW は英語讃美歌集 *Christian Worship* (Northwestern Publishing House) を指します。

へブル人への手紙 4 章 12-13 節

12 神のことばは生きていて、力があり、両刃の剣よりも鋭く、たましいと霊、関節と骨髄の分かれ目さえも刺し通し、心のいろいろな考えやはかりごとを判別することができます。

13 造られたもので、神の前で隠れおおせるものは何一つなく、神の目には、すべてが裸であり、さらけ出されています。私たちはこの神に対して弁明をするのです。

著者は、神が信者には安息を与え、不信者には与えないという事実を力強く述べています。さらに、彼は読者に対し、神のことばが信者と不信者を容易に見分けることができるという点をはっきりと思い出させています。「神のことば」とは、詩篇 95 篇や旧約聖書に限らず、当時のユダヤ人クリスチャンが既に持っていた新約聖書全体を指しています。このことばとは、埃っぽい事実が詰まった無味乾燥な百科事典のようなものではなく、話された後すぐに消え去る、単なる人間の言葉でもありません。それは著者が示したように、三つの思想を通じて、聴者が注意深く耳を傾けるべき資質があります。

「神のことばは生きていて、力があり、」というのが一つ目の思想です。この言葉は生き生きとしており、神自身の生命力に満ち、破壊不可能で不朽です。また、「力があり」とも表現されます。神の言葉はいつも行動を伴い、受動的ではなく、時代遅れになることもありません。常に現代的で効果的であり、イザヤ書 55 章 11 節で神自身が述べているように、「そのように、わたしの口から出るわたしのことばも、むなしく、わたしのところに帰っては来ない。必ず、わたしの望む事を成し遂げ、わたしの言い送った事を成功させる。」とあります。ヨハネの福音書 4 章でのサマリアの女や、十字架上で悔い改めた強盗も、神のことばの生命力とエネルギーについて語る事ができるでしょう。

「両刃の剣よりも鋭く、たましいと霊、関節と骨髄の分かれ目さえも刺し通し」というのが二つ目の思想です。ローマ軍団兵の持つ短剣は非常に鋭く、その両刃によりどの方向にも切り込むことができましたが、神の言葉はそれよりも遥かに鋭く、分けがたいものさえも分けることが可能です。魂と霊の区別は難しく、これらは同じ要素の異なる機能と考えられています。「魂」は人間の肉体的生活とその欲望や興味を指し、「霊」はより高い霊的生活と神との交わりを必要とするものです。神のことばは、鋭いはさみが薄布をすいすいと切るように、魂と霊を容易に分けます。関節と髓についても、骨が接合する場所と髓が存在する骨自体を露わにするという新たな考えを著者は提示しています。神のことばは、人間の最も内部に深く入り込み、最も秘められた部分を露わにします。ペンテコステの日ペテロの説教を聞いた人々は、この両刃の剣の貫通力を体験しました。使徒の働き 2 章 37 節は、「人々はこれを聞いて心を刺され、ペテロとほかの使徒たちに、『兄弟たち。私たちはどうしたらよいのでしょうか』と言った。」と記録しています。

三つ目の思想については、「心のいろいろな考えやはかりごとを判別することができます。」と述べられています。神のことばは、人々の心を見るための神の目として機能します。その鋭い視線で、心の最も深い隙間にまで入り込み、見つけた思いと態度を正確に裁きます。終わりの日にも、このことばが裁くこととなります。ヨハネの福音書 12 章 48 節でイエスは警告しています。「わたしを拒み、わたしの言うことを受け入れない者には、その人をさばくものがあります。わたしが話したことばが、終わりの日にその人をさばくのです。」

この後半部でも同じ考えが表現されています。神のことばから神ご自身の人格へと話題を移すことで、著者はその二つがいかに密接に関連しているかを示しています。全てを見

通す全知全能の神の視線の下では、誰も自分や自身の行為を隠すことができず、すべてが明るみに出ます。「神の前で隠れおおせるものは何一つなく、神の目には、すべてが裸であり、さらけ出されています。」その秘密の罪、隠れた誘惑、小さな腐敗の粒、神や神のことばから徐々に離れていくその過程、そのすべてが神の目の前に露わにされるのです。いけにえの動物の首が横に曲げられ、ナイフが切り込まれるためにその箇所が完全に露出するように、神の目から隠されるものは何もありません。

ここで、著者が三つの思想を通じて導いてきた結論に到達します。著者は「私たちはこの神に対して弁明をするのです」と指摘しています。神のことばは私たちに救いを与え、私たちの心に永遠をもたらします。しかし、そのことばが無視されたり軽んじられたりした場合、私たちが神の全知全能の目を見つめる日が来るでしょう。不信者にとってこの考えは律法であり、私たちが神を欺くことはできず、嘲笑することもできないと警告します。一方、信者にとってこの考えは福音であり、神が各信者のすべての弱さを知り、キリストを通じて、信者に必要なすべてを与える準備ができているというメッセージは信者の心を温めます。この章で繰り返される「きょう、もし御声を聞くならば、あなたがたの心をかたくなにしてはならない。」というテーマは、不信者、信者の双方にとってどれほど重要でしょうか。

キリストの聖職における優位性

資格において優れた祭司

ヘブル人への手紙 4 章 14-16 節

14 さて、私たちのためには、もろもろの天を通られた偉大な大祭司である神の子イエスがおられるのですから、私たちの信仰の告白を堅く保とうではありませんか。

15 私たちの大祭司は、私たちの弱さに同情できない方ではありません。罪は犯されませんでした。すべての点で、私たちと同じように、試みに会われたのです。

16 ですから、私たちは、あわれみを受け、また恵みをいただいて、おりにかなった助けを受けるために、大胆に恵みの御座に近づこうではありませんか。

「大祭司」という言葉は、ヘブル書でのみイエス・キリストに適用される用語です。実際、彼の大祭司としての役割に関する考察がこの書の中心テーマです。著者はこの重要な概念に向けて、書籍の序盤から進んでおり、2 章 17 節や 3 章 1 節で示唆されたヒントによりそれが明示されています。現在、著者は私たちをこのテーマにさらに近づけていますが、より充実した議論については 7 章、8 章、9 章まで待たなければなりません。

祭司制はユダヤ教の基本的な要素でした。すべてのユダヤ人は、エルサレムの神殿で奉仕を行う祭司たちや、その指導者である大祭司の概念をよく知っていました。旧約の祭司制が読者の中でどのような魅力を持っていたのでしょうか？キリスト教からユダヤ教への転向の理由が、「キリスト教には大祭司がない」という言い訳に基づいていたのでしょうか？その場合、彼らは耳を傾け、学ぶべきです。私たちには「偉大な大祭司である神の子イエスがおられる」と著者は述べています。旧約時代のどの大祭司にも、「偉大だ」という形容はされていませんでした。アロンでさえ、初代の大祭司であるにも関わらずです。しかし、神の大祭司についてはそのように語られています。

さらに、この偉大な大祭司は「天を通り抜けました」。彼らは、この大祭司が目に見えない存在だったことに困惑したのでしょうか？彼らは年に一度の贖罪の日に、アロンの家系の目に見える祭司が神殿の中庭を横切って聖所へ、そして見えない至聖所へと犠牲の血を運ぶのをより好んだのでしょうか？

もしそうだとしたら、彼らは次のことを忘れてはなりません。神の大祭司は、地上の祭司たちのように神殿の部屋を通り抜け、今日存在して明日は消えてしまうような存在ではありません。神の大祭司は天を超えて神の玉座へと至り、そこで永遠に生き、統治します。その不可視性は利点であり、その不在は神の大祭司の存在の偉大さを示しています。神の大祭司が捧げた犠牲、神の慈悲の座に運んだ血は、この方ご自身のものでした。彼は「ご自身が犠牲であり 司祭であられる」(*Draw Near and Take the Body of the Lord* CW 309 番 1 節)とされています。そしてその犠牲は完璧でした。この方はたった一度、その尊い命を捧げる必要がありましたが、それですべての犠牲は完了しました。毎年、年に一度、動物の血を捧げる大祭司たちと違うことは、この方の栄光ある天への昇天によって明らかになっています。

この「偉大な大祭司」とは誰でしょうか？著者は「神の子イエス」と明確に述べています。この方を「イエス」と呼ぶことでその人間性を思い起こさせ、「神の子」と呼ぶことで神性を強調しています。イエスの人性と功績は、地上のどの大祭司よりも遥かに優れています。

イエスは、私たちの大祭司でもあります。著者はヘブル人に、「偉大な大祭司である神の子イエスがおられる」と伝えていますが、神はイエスを彼らに与え、神の恵みによって、彼らはイエスとイエスへの信仰の本質として与えられた全てを信じ、告白しました。今は、その信仰を疑う時ではありません。どのような外部の圧力があろうとも、臆病になる余地はないのです。人生を価値あるものにし、死を意味あるものにする偉大な大祭司を軽視し、それに劣る何か他のものと安易に交換してはなりません。代わりに、イエスとイエスの祝福をしっかりと掴み続けるべきなのです。

では、私たちの弱点はどうでしょうか？「私たちの信仰の告白を堅く保とうではありませんか。」と言うのは簡単ですが、神に対する疑いや不従順、人に対する愛情の欠如、自己中心的な考えが誘発する弱点はどうでしょうか？私たちの大祭司は、そうした弱点もよ

く理解しています。それがこの方を偉大にする理由の一つです。イエスが地上で人間性を身にまとい、まことの人間として生きた時、イエスも「私たちと同じように、試みに会われたのです」。イエスは地上での生涯を通じて、私たちに到底想像もつかないほどの厳しい誘惑に直面しました。地獄の軍勢と武器が襲いかかる中、イエスはそれらすべての圧力を感じ取りました。私たちが誘惑の最初の波でしばしば負けるのに対し、イエスは最後まで耐え抜き、全ての攻撃を受け止めたのです。

それにもかかわらず、イエスには「罪がなかった」のです。この考えは二通りに解釈でき、どちらも妥当です。一つ目の解釈は、イエスは誘惑されましたがそれに屈せず、聖なる状態のままだったというものです。聖書はキリストに罪がないことを強調しています。コリント人への手紙第二 5 章 21 節はイエスを「罪を知らない方」と述べ、ペテロの手紙第一 2 章 22 節は「キリストは罪を犯したことがなく、その口に何の偽りも見いだされませんでした。」と教えています。イエスが罪を犯していたなら救い主でも大祭司でもあり得ません。

イエスの無罪についての言及は、イエスの完璧な人間性を指し示しています。私たちとは異なり、イエスには「古いアダム」がなく、先天的な罪深い性質がないため、誘惑が内側から生じることはありませんでした。すべての攻撃は外から来たもので、サタンや邪悪な世界からのものでした。このため、イエスはヨハネの福音書 14 章 30 節で弟子たちに「わたしは、もう、あなたがたに多くは話すまい。この世を支配する者が来るからです。彼はわたしに対して何もすることはできません。」と行うことができました。

繰り返された非常にリアルな誘惑にもかかわらず、イエスの無罪は揺るぎませんでした。しかし、イエスはこの世の誘惑がどのようなものかを深く理解しています。その経験から、イエスは私たちが直面する事柄を知り、その心は私たちに深く共感することができます。

そのような偉大な大祭司を放棄することができますか？年に一度だけ人間の大祭司を介して聖なる神に近づくユダヤ教へと戻るのでしょうか？いいえ、著者は私たちに「大胆に恵みの御座に近づこうではありませんか。」と勧めています。神の無限の威厳と聖なる正義を持つ御座に私たちは近づくことができます。この壮麗な御座の前では、罪人たちは恐怖に震え、罪の意識に沈黙します。しかし、キリストが私たちの偉大な大祭司としてそこに立っておられるおかげで、神の御座は信者にとっては「あわれみを受け、また恵みをいただいで、おりにかなった助けを受けるため」の「恵みの御座」となります。

誘惑が迫り来る時私たちは、私たちの必要を満たすことを知るイエスに、助けを求めることができるでしょう。その時、神の愛が「あわれみ」として現れ、自らの弱さに圧倒された信者に手を差し伸べます。「恵み」もそこにはあります。それは罪人をゆるす、私たちに完全に不釣り合いな神の無償の愛です。私たちは恵みの御座に大胆に近づき、罪を告白し、ゆるしを受け、悲しみを打ち明け、慰めを求め、弱さを捨て、力を得るために神の

御座に近づきます。これが可能なのは、すべて「偉大な大祭司」が私たちの罪のために完全な償いを成し遂げられたからです。

へブル人への手紙 5 章 1-4 節

- 1 大祭司はみな、人々の中から選ばれ、神に仕える事がらについて人々に代わる者として、任命を受けたのです。それは、罪のために、ささげ物といけにえとをささげるためです。
- 2 彼は、自分自身も弱さを身にまとっているのです、無知な迷っている人々を思いやることができるのです。
- 3 そしてまた、その弱さのゆえに、民のためだけでなく、自分のためにも、罪のためのささげ物をしなければなりません。
- 4 まただれでも、この名誉は自分で得るのではなく、アロンのように神に召されて受けるのです。

著者はキリストの優れた祭司職を、ユダヤ教の大祭司を比較することで詳述しています。旧約聖書における大祭司は、彼が仕えるべき民の中から選ばれ、主に「罪のために、ささげ物といけにえとをささげる」役割を担っていました。特にレビ記 16 章に



大祭司の衣装

詳しく書かれているとおり、贖罪の日にはこの奉仕が求められていました。

また、大祭司は罪人との関わりにおいて、特に「無知」で「迷っている」人々に対して優しさを持って接するよう求められていました。「優しく接する」とは、過度に寛大になることなく、しかし厳しさも避ける、感情のバランスを取ることを意味します。著者はこの点を強調し、無知による罪と故意による罪との区別を述べています。

この区別については民数記 15 章 27-31 節が参照されています。

ヘブル人への手紙 5 章 5-10 節

5 同様に、キリストも大祭司となる栄誉を自分で得られたのではなく、彼に、「あなたは、わたしの子。きょう、わたしがあなたを生んだ。」と言われた方が、それをお与えになったのです。

6 別の個所で、こうも言われます。「あなたは、とこしえに、メルキゼデクの位に等しい祭司である。」

7 キリストは、人としてこの世におられたとき、自分を死から救うことのできる方に向かって、大きな叫び声と涙とをもって祈りと願いをささげ、そしてその敬虔のゆえに聞き入れられました。

8 キリストは御子であられるのに、お受けになった多くの苦しみによって従順を学び、

9 完全な者とされ、彼に従うすべての人々に対して、とこしえの救いを与える者となり、

10 神によって、メルキゼデクの位に等しい大祭司ととなえられたのです。

洞察力のある読者であれば、著者がどのような方向性を追求しているのかすでに理解しているかもしれません。キリスト・イエスは旧約聖書の大祭司よりどれほど優れているかが、はっきりと示されています。神が祭司職についてどう考えているのか、その答えは神ご自身が詩篇 2 篇で述べた言葉に現れています。ここで、神はキリストを「わが子」と呼び、これは旧約のどの大祭司にも言及されていないという点で重要です。さらに、詩篇 2 篇では、神がキリストにメシアとしての高い地位と権威をお与えになる様子が描かれています。著者は、これに基づき、キリストの祭司職について説明しています。

権威と認可に関心を持つ読者にとって、これは重要な解決すべき問題です。神は肉体を持ってこの世に来られた御子キリストに祭司職を授けました。特に注目すべきは、5 節で「名誉」ではなく、「栄誉」という、より偉大な言葉が使われていることです。これはキリストの祭司職がいかに優れているかを示しています。また、ヨハネの

福音書 8 章 54 節で、イエスがユダヤ人に対して、ご自分がどのようにしてその栄光を得たのかを説明しています。「わたしがもし自分自身に栄光を帰するなら、わたしの栄光はむなしいものです。わたしに栄光を与える方は、わたしの父です。」こうして、神ご自身によって任命された栄光ある職を持つ偉大な大祭司イエスが存在したのです。

著者は詩篇 110 篇を引用して、キリストが神によって祭司に任命されたことを強調しています。このダビデの詩の第 4 節で、神はメシアに向けて「あなたは、メルキゼデクの例にならい、とこしえに祭司である。」と宣言しています。アロンとその後継者たちは役目を終えて亡くなりましたが、この偉大な大祭司は「永遠に」その任務を保持し続けます。

神は「メルキゼデクの例にならい」と言って、御子の祭司職を強調しました。メルキゼデクは謎に包まれた存在で、聖書の中でたった 3 回しか言及されません。彼は創世記 14 章 18-20 節で短く登場し、アブラハムがロトを救出して帰還する際にアブラハムを出迎えて祝福しました。そこで彼は「サレムの王」と「最高神の祭司」と呼ばれています。詩篇 110 篇 4 節でダビデはさらに簡潔に彼について言及し、キリストが王であり祭司であることを象徴する存在として、メルキゼデクをキリストの型として描いています。そして、このヘブル書では後に見ていくように、この話題がより詳細に取り上げられます。

ヘブル人のクリスチャンたちは、大祭司制度を持つユダヤ教へ戻ろうと望んでいたのでしょうか？ここには、永遠に任命されたはるかに偉大な大祭司がいます。この大祭司は、アロンの時代よりもずっと昔から存在し、アブラハムの時代のメルキゼデクのように、王の権威と祭司の犠牲を併せ持っています。

ヘブル人のクリスチャンたちは、イエスとその民に共感することについて疑問があったのでしょうか？読者はイエスが「人としてこの世におられたとき」を振り返ってみてください。偉大な大祭司であるイエスは、彼が代表する人々の人間的な弱点を理解していたはずで、彼は自ら進んでその人間性を受け入れたのです。著者は特に、イエスが十字架にかかる前夜に、ゲッセマネの園で発生した大きな危機について指摘しています。

著者は聖霊の導きの下で、四つの福音書以上の詳細を重ねて語っています。「祈り」という言葉は「願い」へと変わりました。これは極度の必要を象徴するオリーブの枝を持つ嘆願者に用いられる言葉です。キリストからは「大きな叫び声」が発せられました。これはキリストが発することを望まなかった叫びであり、極度の苦痛によって引き出されたものです。その目からは悲哀の明確な兆候として涙が流れました。その苦悩と痛みは深まり、ルカによる福音書 22 章 44 節で記されているように、「汗が血のしずくのように地に落ちた」ほどでした。ヘブル人のクリスチャンの中に孤独を感じている者はいたでしょうか？迫害の圧力が彼らの魂を擦り減らしていたでしょう

か？ここに、完全に一人で、彼らが決して知り得ないほどの苦痛を経験した方がいます。イエスは彼らを助ける方法を正確に知っておられます。

偉大な大祭司がゲッセマネの園で祈ったのは、「自分を死から救うことのできる方」に対してでした。世界の罪の暗闇が彼を包み込み、地獄の恐怖が彼を覆う中、イエスの人間性はその任務から逃れようとしたのですが、これは拒否ではなく後退でした。完全な従順の中で、イエスは熱心な祈りを捧げ、マタイの福音書 26 章 42 節に記録されているように、「わが父よ。どうしても飲まずには済まされぬ杯でしたら、どうぞみこころのとおりをなさってください。」と祈りました。そしてイエスのこの祈りは「その敬虔のゆえに」聞かれました。御父の聖なる意志に完全に調和し、完璧に従順であったため、神はイエスの祈りに答えられました。御父の答えは、御子を十字架から解放することではなく、それに備えることであり、イエスを強めるために天から天使を送りました（ルカ 22:43）。

考えてみてください。永遠から神の御子であるイエスが人間の姿を取り、苦しむのです。永遠から御子としてご自分の父に完全に従う方が、今、「多くの苦しみによって従順を」学ぶのです。イエスはここで初めて従うことを学んだわけではありません。それはイエスがすでに知っていたことであり、12 歳のときに神殿で地上の両親に「どうしてわたしをお捜しになったのですか。わたしが必ず自分の父の家にいることを、ご存じなかったのですか。」（ルカ 2:49）と述べたときにすでに示されていました。

イエスはその服従の代価を学び、それを限界まで実行しました。イエスは「自分を卑しくし、死にまで従い、実に十字架の死にまでも従われました。」とピリピ人への手紙 2 章 8 節で述べられています。祈りつつ従順を保ち、奇跡的に力を得て、イエスは十字架、墓、そして玉座へと進んでいきました。

「完全にされた」とは文字通りには「十字架、墓、そして玉座という目標に到達した」という意味です。これは、この偉大な大祭司が「彼に従うすべての人々に対して、とこしえの救いを与える者」となったことを意味します。アロンとその後継者たちは罪を持ち、まず自分自身の罪のために贖罪を必要としましたが、この方は罪がなく、完璧な服従を実現しました。アロンとその後継者たちは毎年犠牲を捧げて罪を贖いましたが、この方はたった一度の犠牲で充分でした。アロンとその後継者たちが捧げた動物の血は、この偉大な大祭司の血が「すべての罪から私たちにきよめる」（ヨハネの手紙第一 1:7）ことを示唆するためのものに過ぎませんでした。ここに、苦しみと死を通じて「完全な者とされ」、すなわち「とこしえの救いを与える者」となる目標を達成した大祭司がいます。

「彼に従うすべての人々」という言葉は、キリストの従順さと調和しています。ヨハネの手紙第一 3 章 22,23 節に「私たちが神の命令を守り、神に喜ばれることを行っているからです。神の命令とは、私たちが御子イエス・キリストの御名を信じ、キリストが命じられたとおりに、私たちが互いに愛し合うことです。」と記されている通り

です。信仰は神への従順であり、み言葉と聖礼を通じて神の恵みによって個人に働きかけられます。この従順を通じて、人は神と共に、また神のために生きることが出来ます。これは神の贈り物です。

ヘブル人キリスト教徒たちは、詩篇 110 章 4 節で預言され、十字架上の犠牲によってその使命が完成された、この優れた大祭司を見捨てようとしていたのでしょうか？神ご自身によってこの高い地位に指名されたイエスから離れるとは、ユダヤ教とその劣った大祭司制に戻ることを意味し、最終的には致命的です。警告しておきます。

そして、今日この靈感を受けた著者の言葉を読む私たちにとって、これはどういう意味を持つのでしょうか？現代においては、祭司や祭壇、迫害や厳しい圧力が直接的な問題ではないかもしれませんが、誘惑は常に存在します。信仰を働かせることができるのは神だけです。神が私たちに信頼と確信を与え、「どこに逃れ 行けるだろう？罪を取り去れるのは、ただ主よ、あなただけ」(CW 401 番 *Your Works, Not Mine, O Christ*) と叫ぶ心を与えてくださいますように。

警告

幼稚にならないでください。また、怠けないでください。

ヘブル人への手紙 5 章 11 節

11 この方について、私たちは話すべきことをたくさん持っていますが、あなたがたの耳が鈍くなっているため、説き明かすことが困難です。

12 あなたがたは年数からすれば教師になっていなければならないにもかかわらず、神のことばの初歩をもう一度だれかに教えてもらう必要があるのです。あなたがたは堅い食物ではなく、乳を必要とするようになっています。

13 まだ乳ばかり飲んでいるような者はみな、義の教えに通じてはいません。幼子なのです。

14 しかし、堅い食物はおとなの物であって、経験によって良い物と悪い物とを見分ける感覚を訓練された人たちの物です。

再び、著者の牧師としての深い愛が感じられます。著者は彼らに、キリストがメルキゼデクのような大祭司であることについて多くを語りたいて考えていましたが、それは容易ではありませんでした。問題は、話題の不明瞭さやプレゼンテーションの未熟さにあるのではなく、聞く者たちにありました。「あなたがたの耳が鈍くなっている」と、著者は叱

りましたが、この言葉は「麻痺した」や「鈍感になった」を意味するものでした。かつて熱心に聞いていた耳は今や鈍感になり、深い真理を受け入れることが困難になっていました。完璧ではない群れを持つ牧師のように、著者は愛情を込めて読者を叱責しています。彼の意図は彼らの聴力の鈍さを責めることではなく、キリストの高位の祭司職という栄光ある話題に耳を傾ける準備をさせることです。

読者たちは、自らの行動が著者にどれほどの苦勞をかけているかを認識していたのでしょうか？キリスト教徒としてある程度の時期が経過した今、彼らは教師になるべきでした。教える能力は、その話題をよく理解し、しっかりと掌握していることを示します。しかし、ヘブル人クリスチャンたちを見てください。彼らは教師になるどころか、「神のことばの初歩」を再び教えてもらう必要がありました。ABCを超えた、より深い真理の学びに進むのではなく、彼らは後退し、基本を再び学び直さなければなりません。彼らは精神的にはまだ赤ちゃんに戻っており、胃がミルクしか受け付けられません。著者はどうやってそのような赤ちゃんにキリストの高位の祭司職の「堅い食物」を与えることができるのでしょうか？

誰もが知っているように、赤ちゃんがミルクしか飲めないのと同様、成熟が遅れた信者は最も基本的な霊的真理しか扱うことができません。これらの信者は「義についての教え」に精通しておらず、キリスト教の真理に関する知識が少ないため、正と悪を区別するのが難しくなっています。エペソ人への手紙4章14節でパウロが言及したように、「人の悪巧みや、人を欺く悪賢い策略により、教えの風に吹き回されたり、波にもてあそばれたりする」という状況です。

著者の牧師としての心が見えますか？彼は信仰の赤ちゃんを軽蔑したり、基本的な真理を見下したりしているわけではありません。信仰には常に赤ちゃんと大人が存在し、神のみことばには赤ちゃんのためのミルクと大人のための固形食が含まれています。しかし、赤ちゃんは永遠にそのままのままでいるべきではなく、大人も子ども時代に逆戻りするべきではありません。成長は必要であり、これは常日頃の訓練を通じてのみ実現されます。霊的な運動プログラムが不可欠であり、それに必要な装備はみことばのみです。これが、著者が読者に望むことであり、著者はそれによって読者をより深い真理へと導きたいと考えています。

この言葉は私たちの耳にも響かないのでしょうか？キリスト教では、停滞という概念はありません。信者が前進するか、時間をただ過ごすかは、神のみことばとの関連に大きく依存します。神の深い真実は、何気なく不注意に読む者には明かされませんが、注意深く継続的に学ぶ者には明かされます。私たちの生活がどれだけ忙しく、一日がどれだけ速く過ぎても、真剣な聖書研究のための定期的な時間を確保する必要があります。そのように行動する人々は、初歩から上級へ、子ども時代から成人期へと成長するのを見ることでしょう。

ヘブル人への手紙 6章 1 - 3 節

- 1 ですから、私たちは、キリストについての初歩の教えをあとにして、成熟を目ざして進もうではありませんか。死んだ行いからの回心、神に対する信仰、
- 2 きよめの洗いについての教え、手を置く儀式、死者の復活、とこしえのさばきなど基礎的なことを再びやり直したりしないようにしましょう。
- 3 神がお許しになるならば、私たちはそうすべきです。

著者は、非難を述べた後、それが効果をもたらしたことを望みながら、次の段階へ進む準備を整えました。彼の願いは、キリストに関する基本的な教えを捨て去ることではなく、むしろそれを基盤としてさらに構築していくことです。基礎を何度も敷き直すだけで、その上に何も建てないとしたら、それにどんな意味があるのでしょうか？そこで「成熟を目ざして進もうではありませんか」という言葉が出てきます。ここで使われるギリシャ語は、信者が一人で進むのではなく、成熟に向かって導かれるという意味を含んでいます。これは聖霊による作用で、教えと、力強いみことばを通じて行われます。

確かに、基礎は重要です。著者が「キリストについての基本的教え」の中で挙げる項目を見れば、その重要性が明らかです。例えば、「死んだ行いからの回心」があります。「回心」つまり悔い改めは心の変化を意味し、罪から離れ、罪の意識からゆるしへと向かう転換を表します。「死んだ行い」は、読者が信じていない時には「自分の罪過と罪との中に死んでいた者であって」（エペソ人への手紙 2:1）、さらに「罪から来る報酬は死」（ローマ人への手紙 6:23）であるということ強く思い起こさせます。

ここでの悔い改めには、「神に対する信仰」という要素が組み込まれています。この二つは切り離すことができません。罪から真に離れるためには、罪人がまず神とその約束に基づいた信仰に向かわなければなりません。悔い改めは常に二つの方向を見ます：過去に対しては罪への真摯な悔恨を、未来に対しては神のゆるしに対する確固たる信頼を持っています。

次に、著者は「教え」、すなわち教義の教育に言及しています。読者たちは「きよめの洗いについての教え」を受けたとのこと。洗礼の用語が原語で複数形で用いられているのは、ユダヤ人の間で行われていた様々な儀式的な洗浄と、イエスが命じた真の洗礼との間の指導や区別を反映しているのかもしれませんが。また、洗礼は非常に個人的なものであるため、複数形はそれぞれの個人の洗礼を指している可能性もあります。現在でも、洗礼には「手を置く儀式」つまり手の按手が伴うことがあります。使徒の働きは、様々な状況で手の按手が、祝福を象徴するものとして用いられたことを示しています（使徒の働き 8:17; 9:12; 13:3; 19:6）。

さらに、「死者の復活、とこしえのさばき」についても教えています。キリスト教はその始まりから、復活と審判を中心とした宗教です。キリストの十字架と空っぽの墓

の信仰をもって導かれた者は、死者の復活と天国の裁判所での有利な判決に対する確かな希望を理解し、心に留めます。その人は死と審判に直面しなければならないものの、その勝利は既に保証されています。

これらの領域はすべて、悔い改めから永遠の審判に至るまで、キリスト教の生活に欠かせない重要なテーマと教えを形成しています。しかし、著者が強調しているのは、これらが信仰のほんの初歩の教えに過ぎないという点です。新たな段階へ進む時が来ました。「神がお許しになるならば」そのように進めること、それが著者の意図していることでした。著者は単に礼儀正しいフレーズを使うだけではなく、明確に認識しています。神だけが聞き手の鈍くなった耳を敏感にし、著者が計画している追加の指導が成功するよう導けるのです。

ヘブル人への手紙 6 章 4 – 8 節

- 4 一度光を受けて天からの賜物の味を知り、聖霊にあずかる者となり、
- 5 神のすばらしいみことばと、後にやがて来る世の力とを味わったうえで、
- 6 しかも墮落してしまうならば、そういう人々をもう一度悔い改めに立ち返らせることはできません。彼らは、自分で神の子をもう一度十字架にかけて、恥辱を与える人たちだからです。
- 7 土地は、その上にしばしば降る雨を吸い込んで、これを耕す人たちのために有用な作物を生じるなら、神の祝福にあずかります。
- 8 しかし、いばらやあざみなどを生えさせるなら、無用なものであって、やがてのろいを受け、ついには焼かれてしまいます。

これらの節と 10 章 26 節から 31 節は、「聖霊に対する罪」と呼ばれる教えの一部を扱っています。多く議論され、頻繁に討論の対象となる箇所ですが、最も適切なのは、みことばそのものが語ることを許すことです。

著者は、かつて福音の甘美さを実際に味わい、その祝福を体験した人々について述べています。彼らは「啓発され」、ヨハネの福音書 8 章 12 節で「世の光」と称される方の輝く真理によって、心の闇が取り除かれました。

彼らはまた、「天からの贈り物を味わった」のです。ヨハネの福音書 4 章 10 節で、サマリアの井戸にいた女性に話しかける際、イエスは自分自身を「神の賜物」と表現しました。神はその愛から、ご自身の御子を天から送り、これらの人々はその天からの贈り物の喜びを享受したのです。

さらに、彼らは「聖霊にあずかる」経験をしました。福音を通じた聖霊の聖化の働きにより、彼らは救い主の甘美な贈り物を見て、味わう信仰を持つに至りました。そ

のため、著者は彼らが「神のすばらしいみことば...を味わった」と述べました。これほど良い言葉は他に存在しません。神のみことばを通じてのみ、聖霊は人々の心に来てそこに宿ってくださるのです。

そして最後に、彼らは「後にやがて来る世の力」を体験しました。この力あるみことばが彼らの心に影響を及ぼし、永遠に続く効果をもたらしました。パウロはコリント人への手紙第一2章9節で、これを見事に表現しています。「目が見たことのないもの、耳が聞いたことのないもの、そして、人の心に思い浮かんだことのないもの。神を愛する者のために、神の備えてくださったものは、みなそうである。」

著者は悲しみを込めて信者たちについて語りますが、特に「墮落してしまう」信者たちのことを指しています。この用語は新約聖書でここにしか使われず、「脇に落ちる」、「完全に離れ去る」という意味があります。ここには、弱さから否認を続けるペテロのような慌てた様子はありません。これは、真実であると知られているものを意識的に、故意に否定する行動です。こうした信者は、意図的に不信の闇へと後退し、キリストの天の賜物を意図的に捨て去っています。

著者は、この人々について「そういう人々をもう一度悔い改めに立ち返らせることはできません」と述べています。これら裏切り者の信者はキリストを自分たちの心から引き剥がし、皆が嘲笑う中で再びキリストを十字架にかけます。彼らは神の子を十字架につけた人々の仲間に加えることで、自身の損失を招きます。

「神の子」という表現を通じて、著者は彼らの犯した罪の重大さを強調しています。高い宗教知識に反して、彼らはまことの神でありまことの人であるキリストを木に釘付けにし、その足下であざ笑いながら行進します。それはまるで当時の宗教指導者のサンヘドリンのようです。かつて友人であった者たちからのこのような裏切りは、特に恥ずべき行為です。内部者の言葉は強い影響力を持ち、その内部者が批判者になったときの言葉は、より鋭いものになります。このような人々は悔い改めることがありません。

著者は、彼らに救いがないとは言っていない。キリストの犠牲は、聖霊に対する罪も含めた全ての罪のために支払われましたが、彼らは経験を通じてこれが真実であると知りながらも意図的に背を向けたことで、悔い改めのさらなる働きを不可能にし、自分自身をキリストが得た救いから遠ざけました。キリストが提供するすべてを試した後で背を向ける人々に対し、聖霊はこれ以上何もできません。全能の神にとって何かが不可能であることや、真実であると認識しながら故意にそれを放棄することがあり得ることを、私たちの限られた能力で理解するのは難しいでしょう。しかし、著者はそれが起こり得ると述べ、ヘブル人クリスチャンにもそれが起こり得ると警告しています。この節で「あなたたち」と「私たち」から「彼ら」への言葉の切り替えを通じて、著者は読者がまだこの罪に陥っていないことを示していますが、彼らがキ

リストとその宝を意図的に放棄して、ユダヤ教の安全を求めることを懸念し、真剣に警告しています。

神の審判についての理解を助けるために、たとえ話が役立つでしょうか？そうであれば、頻繁に雨が降り、所有者の期待通りに作物が育つ土地を想像してください。このような土地は、将来にわたって収穫を続けられるように、農夫から何年にもわたる継続的なケアを受けることができます。

しかし、もしその心が同じ世話を受け、雨に濡れ、丁寧に育てられても、棘や薊を生産するだけなら、最終的には審判が下されるでしょう。そのような心は試され、無価値であると判断されます。彼らの運命は栽培ではなく、呪いです。彼らの最後は収穫ではなく、火による破壊です。この例えは審判を語っており、「離れて行く」人々に対する適用は明確です。

NIV 聖書の脚注（「または、その間の悔い改め」）は、この難解な箇所別の翻訳の可能性を示唆しています。4 節からのこの箇所を読むと、次のようになります。「神のすばらしいみことばと、後にやがて来る世の力とを味わったうえで、…墮落してしまうならば、そういう人々をもう一度悔い改めに立ち返らせることはできません。彼らは、自分で神の子をもう一度十字架にかけて、恥辱を与える人たちだからです。」

つまり、十字架につけられたキリストを救い主として意図的に拒否し続ける限り、そのような人々には悔い改めが不可能です。彼らは自らをキリスト・イエスにおける神の恩寵から切り離していますが、かつてはその恩寵の受け手であり、信者でした。しかし、彼らが主であり救い主に対する無意味な反抗を止めた場合、悔い改めの可能性が残されています。この解釈は、10 章 26 から 31 節で続く警告と矛盾しません。

この箇所のどちらの解釈からも、一度信仰に入った真の信者が信仰から落ちることがないとする考え（「一度信者になった者は、いつでも信者であり続ける」）が明確に否定されています。ここには信者が信仰を失い、不信仰に迷い込む可能性があるという明確な警告が示されています。「ですから、立っていると思う者は、倒れないように気をつけなさい。」（I コリント 10:12）。

多くの牧師が、聖霊に対する許されない罪を犯したと恐れている人々に出会います。彼らは自分たちにはもう希望がなく、悔い改める機会もなく、地獄が彼らの運命であると心配しています。それでも、救い主イエスにおける神の愛が彼らにとっての答えです。キリストの愛は罪の代価を支払いました。また、実践的な慰めとして、聖霊に対して罪を犯したと恐れている人々が、実際には罪を犯していないことが分かります。彼らが恐れを抱いていること自体、罪を犯していない証拠です。罪を犯した人々はそれについて心配しません。彼らが初めて恐怖を感じるのは地獄に行ってからであり、その恐怖は永遠に終わることがありません。

ヘブル人への手紙 6章 9-12 節

9 だが、愛する人たち。私たちはこのように言いますが、あなたがたについては、もっと良いことを確信しています。それは救いにつながることです。

10 神は正しい方であって、あなたがたの行いを忘れず、あなたがたがこれまで聖徒たちに仕え、また今も仕えて神の御名のために示したあの愛をお忘れにならないのです。

11 そこで、私たちは、あなたがたひとりひとりが、同じ熱心さを示して、最後まで、私たちの希望について十分な確信を持ち続けてくれるように切望します。

12 それは、あなたがたがなまけずに、信仰と忍耐によって約束のものを相続するあの人たちに、ならう者となるためです。

警告は厳しいものでしたが、状況は決して絶望的ではありませんでした。「愛する人たち」と著者は依然として彼らを呼び、警告の背後にある愛を示しつつ、読者たちが先に述べたような極端な状態には陥っていないと信じていることを表現しています。確かに、状況は下降しており、理想的ではありませんでしたが、著者はこれらのヘブル人キリスト教徒たちに対して依然として前向きに考えていました。「あなたがたについては、もっと良いことを確信しています。」そして「それは救いにつながることです。」と彼は言いました。著者は破壊ではなく救いを、呪いではなく祝福を、棘やあざみで覆われた不毛の野ではなく実り豊かで生産的な野を、読者に期待していました。

このような確信は、神の不変の性質という唯一の根拠に基づいています。「神は正しい方であって」と著者は述べています。霊的な反逆を見逃さない正義の裁きを下す神は、信仰と愛に満ちた生活を見過ごすことはありません。「労働」と「愛」は常に一緒にあります。人の行いを見る際、神はうわべではなく、より深い部分を見ます。心を見つめ、行動の背後にある動機を観察します。信仰から生じる愛だけが、信者の労働を神に受け入れられるものにします。

次の言葉に、著者は同意しています。「私たちは愛しています。神がまず私たちを愛してくださったからです。神を愛すると言いながら兄弟を憎んでいるなら、その人は偽り者です。目に見える兄弟を愛していない者に、目に見えない神を愛することはできません。神を愛する者は、兄弟をも愛すべきです。私たちはこの命令をキリストから受けています。」(ヨハネ第一 4:19-21) 読者たちは、神の人々を助け続けることで、実際に神に対する愛を示していました。

後に、10章 32節から 34節で、著者はこれらの愛の行為について説明します。彼はこう書いています。「あなたがたは、光に照らされて後、苦難に会いながら激しい戦いに耐えた初めのころを、思い起こしなさい。人々の目の前で、そしりと苦しみとを受けた者もあれば、このようなめにあった人々の仲間になった者もありました。あなたがたは、捕らえ

られている人々を思いやり、また、もっとすぐれた、いつまでも残る財産を持っていることを知っていたので、自分の財産が奪われても、喜んで忍びました。」著者は、これらの行為が神の栄光のために純粋な愛から行われたものであるとして、彼らの信仰を評価しました。彼は、正義の主もそれを認識してくださっていると自信を持っていました。

著者は信頼感だけではなく、懸念も持っていました。彼ら一人一人に対して強く願っていることがあり、それは彼の牧師としての心からの願いでした。神が個々の人々を慕い、見守るように、著者も同様に感じていました。彼らが互いに示した愛の行動に対する勤勉さは、互いの信仰を強化するためにも同じくらい勤勉であるべきでした。信者たちはまだ進むべき道の途中であり、その道は容易ではありませんでした。重要なのは良いスタートではなく、正しい終わり方です。

そのため、筆者は「最後まで」勤勉であること、そして「私たちの希望について十分な確信を持ち続けてくれる」ための勤勉さを促しています。救い主によって勝ち取られ、約束された永遠の栄光の希望は、信者の心の中でいくら輝いても輝き過ぎることはありません。より確かな保証は、その希望が明かされ、それに基づいているみことばをより完全に活用することから生じます。キリストが再び来られるまで、そして希望が私たち一人一人にとっての栄光の現実となるまで、その力強いみことばを私たちの勤勉な関心事としましょう。最後まで、私たちの希望について十分な確信を持ち続けられるように切望します。

怠惰な耳は最終的に怠惰な信仰と希望につながります。著者は読者の間で信仰と希望が衰えつつあることに気づき、それを克服するために即座に行動を起こすよう促しました。その対策の一つとして、「信仰と忍耐によって約束のものを相続するあの人たちに、ならう者となる」ことが挙げられます。私たちの周りの信者や先人たちの例を見ることで、力を得ることが出来ます。11章で著者は、旧約聖書の信仰の英雄たちの例を紹介します。「ならう者」となりなさい、と彼は言います。「約束のものを相続するあの人たち」はつまり、彼らが「約束されたもの」をしっかりと保持していることを示しています。これらの貴重な約束は、しばしば多くの方法で与えられ、「信仰と忍耐」を通じて彼らが得たものです。

神の約束について語る時に信仰を無視することはできません。人々は神の約束を受け入れるために信仰を必要とし、神の約束はその信仰を動かし続け、それが天国で現実のものとなるまで続きます。信仰と忍耐は一緒に進むものです。忍耐は、人々の行動に耐え、困難にも動じない性質を意味します。信仰と忍耐を結びつけると、あらゆる危険にもかかわらずそれを乗り越える安定感が生まれます。著者は、戦って勝利した人々の例を示すことで、そのような信仰と希望を読者に強く望んでいました。何世紀も後の私たちが、天国への道を進む際にも、讚美歌の「われらは歩む 聖徒が歩んだ道を」という歌詞から、励みを得ることが出来ます (CW 537 番 2 節 *Onward, Christian Soldiers*)。

へブル人への手紙 6 章 13-20 節

- 13** 神は、アブラハムに約束される時、ご自分よりすぐれたものをさして誓うことがありえないため、ご自分をさして誓い、
- 14** こう言われました。「わたしは必ずあなたを祝福し、あなたを大いにふやす。」
- 15** こうして、アブラハムは、忍耐の末に、約束のものを得ました。
- 16** 確かに、人間は自分よりすぐれた者をさして誓います。そして、確証のための誓いというものは、人間のすべての反論をやめさせます。
- 17** そこで、神は約束の相続者たちに、ご計画の変わらないことをさらにはっきり示そうと思い、誓いをもって保証されたのです。
- 18** それは、変えることのできない二つの事がらによって、——神は、これらの事がらのゆえに、偽ることができません——前に置かれている望みを捕らえるためにのがれて来た私たちが、力強い励ましを受けるためです。
- 19** この望みは、私たちのたましいのために、安全で確かな錨の役を果たし、またこの望みは幕の内側に入るのです。
- 20** イエスは私たちの先駆けとしてそこに入り、永遠にメルキゼデクの位に等しい大祭司となりました。

アブラハムほど信仰と忍耐を通じて神の約束を受け継いだよい例は他にありません。ヘブル人読者にとっては、彼らがアブラハムの子孫であるという事実が、この例をより心に響かせるものでした。私たちキリスト教徒にとっても、アブラハムの約束された子孫であるキリストの例は深い意味を持ちます。アブラハムが神から受けた約束は、彼の子孫から偉大な国が生まれること、そして何よりも彼の子孫から救い主が現れることでした。しかし、25年もの長い年月が経過しても何も起こりませんでした。諦めるのは簡単でしたが、アブラハムは変わらぬ神と決して破られない約束を信じ、揺るぎない信頼を持って前進しました。そしてついに、息子イサクが生まれたのです！

数年後、神がアブラハムのもとを訪れた際、神が求めたのはイサクの犠牲ではなくアブラハムの心でした。その時、神は彼の恵みの約束を繰り返し、創世記 22 章 15-18 節に記録されている通り、誓いでそれを確かなものにしました。神はご自分に属する者への愛と配慮を示し、人間の慣習に従って誓いを用いたのです。誤りのない神から来た約束の背後には神の誠実さがあります。誓いは、より偉大な者を証人として呼び、嘘を罰することで機能します。神には誓うためのより偉大な者がいなかったため、ご自身に基づいた誓いでアブラハムへの約束を確かなものにしました。神はアブラハムにご自身の約束を信じることを望んでおり、信者たち全員にもそのようにする動機を与えています。

アブラハムは耐え忍び、約束を受け取りました。彼は息子イサク、さらに孫ヤコブとエサウの誕生を通じて、偉大な国の始まりを目の当たりにしました。イサクの誕生

を通して、彼はまた将来的な救世主の誕生が実現することも見ました。この救世主を信じるすべての人々の中において、アブラハムの子孫は計り知れないほどに増やされました。

アブラハムは死んでから、神の約束が完全に果たされるのを見ています。マタイによる福音書 8 章 11 節では、アブラハムの約束された子孫であるイエスがユダヤ人に語り、「あなたがたに言いますが、たくさんの人が東からも西からも来て、天の御国で、アブラハム、イサク、ヤコブといっしょに食卓に着きます。」と。世の初めから天の王国で、救いの真の相続人たちは全て、黙示録 13 章 8 節で「ほふられた小羊」と記されている方の御座の前にアブラハムと共に集います。

すべての信者はアブラハムと同じ立場にいます。彼らには神から救いの栄光ある約束が与えられ、その約束を堅く守るよう求められています。彼らはその約束の背後に神の誓いがあることを知っています。人間の誓いがどれほど重要かを理解している読者にとって、神を証人とする誓約は、問題を解決する手段です。誓いが交わされると、矛盾は消え、疑問は解消されます。

人間にとってこれが真実であるのなら、神にとってはなおさら当てはまります。人々に更なる確信を与えるため、神はご自身を低くして人間のレベルに降り、既に不動の救いの約束にさらなるご自身の揺るぎない誓いを加えました。神は救いの計画をこれ以上明確に示すことができましたでしょうか？約束自体とその背後にある神の誓い以外に、どんな証拠が必要でしょうか？これらの約束と誓いは、「変えることのできない二つの事がら」に基づき、「神は、これらの事がらのゆえに、偽ることができません」と記されています。

人間がしばしば真実を扱うのに苦労する一方で、神は「偽ることのない」方です（テトス 1:2）。人々は通常、法的な確認として二人の証人が提供されたとき、その証言内容を信じることができます。その二人の証人とは、アブラハムと私たちに与えられた救いの約束と、それを裏付ける誓いです。神は嘘をつくことができないため、これらは虚偽がありません。これらは「前に置かれている望みを捕らえるためにのがれて来た私たち」に対する最大限の励ましです。嵐から逃れる船員のように、罪人たちは裁判の嵐からイエス・キリストの安全な港へと逃れます。「前に置かれている望み」とは、イエス・キリストご自身を指し、次の場面で明確にされます。

嵐の中で船員にとって重要なのは、良い錨と良い地盤です。キリストを信じる者たちはその両方を持っています。クリスチャンには「安全で確かな」魂の「錨」があります。強力なアンカーが変形することなく機能するように、私たちはキリストにおいて絶対的に強く信頼できる希望を持っています。また、錨が正しい地盤に固定されたときにのみ機能するように、私たちの希望も正しい場所に固定されています。神は「幕の内側」におられます。これは大祭司だけが入ることが許され、贖罪の日にのみ入る至聖所を指します。

私たちの大祭司は今、天幕の向こう側におられます。そこで、「私たちの先駆け」が私たちを待っています。彼は待つ間、私たちのために取り成しを行っています。神による私たちのための完璧な罪の贖いは、神と人とを隔てていた幕を引き裂き、私たちもその天の聖所に入ることを可能にしました。アロンの系統の大祭司たちは、メルキゼデクの位にある永遠の大祭司であるイエスと比べることはできません。

今日に至るまで、そして最後の日まで、人々は希望を持ち続けます。それが人間の性質です。しかし、価値ある希望には、現実の基盤が必要です。聖霊の働きによってキリストに自らの希望を託した人々は、パウロの言葉を共に告白することができます。「そのために、私はこのような苦しみにも会っています。しかし、私はそれを恥とは思っていません。というのは、私は、自分の信じて来た方をよく知っており、また、その方は私のお任せしたものを、かの日のために守ってくださることができる確信しているからです。」(テモテの手紙第二 1 章 12 節)。その日が来るまで待つ間、私たちが嵐に遭っても、神が私たちに常に祈りを捧げさせてくださることを願います。

主の誓いと、契約の血が
荒れる洪水で 私を支える
この世の支えを すべて失い
主こそ私の 望みと力
私はキリスト、堅い岩の上に立つ
ほかの地面は 沈みゆく砂

(CW 382 番 3 節 *My Hope is Built on Nothing Less*)

地位において優れた祭司

へブル人への手紙 7 章 1-3 節

- 1 このメルキゼデクは、サレムの王で、すぐれて高い神の祭司でしたが、アブラハムが王たちを打ち破って帰るのを迎えて祝福しました。
- 2 またアブラハムは彼に、すべての戦利品の十分の一を分けました。まず彼は、その名を訳すと義の王であり、次に、サレムの王、すなわち平和の王です。
- 3 父もなく、母もなく、系図もなく、その生涯の初めもなく、いのちの終わりもなく、神の子に似た者とされ、いつまでも祭司としてとどまっているのです。

なぜこれほどキリストの大祭司職に焦点が当てられているのでしょうか？著者はすでに4章14節でそれに簡単に触れ、さらに三回（5:6、5:10、6:20）にわたりメルキゼデクの秩序に従う祭司職として述べています。そして7章で著者はこれについて詳細に語ります。祭司職がユダヤ教にとってどれほど中心的であったか、そしてユダヤ人がどれほど強くそれに固執していたかを私たちが理解するのは難しいかもしれませんが、しかし、迫害が迫るキリスト教から、名高い祭司職を持つユダヤ教へ転向する誘惑は非常に強いものであったと推測できます。この強い誘惑に対抗するため、著者はキリストの祭司職の優越性を説得力ある形で示し、キリストがレビの秩序ではなく、メルキゼデクの秩序に従う祭司であることを示します。メルキゼデクは、聖書において謎めいた存在で、彼についてもっと知りたいと私たちが願うような人物です。彼はキリストの誕生の約二千年前にアブラハムに関する些細な出来事の中で初めて言及され、その後約千年の間、何も記されていません。そしてダビデが詩篇110篇4節でその名前を取り上げた後、西暦70年頃にヘブル人への手紙で、彼の名前が再び登場します。



メルキゼデクの捧げ物

二千年以上前に書かれたわずか四節の記述に基づいているにも関わらず、ヘブル人への手紙の著者が、ここからどのような結論を引き出しているかに注目してください。聖霊に動かされて、この著者は私たちを再び驚かせます。彼はここで、旧約聖書全体がいかにキリスト中心であるかを明らかにしています。特に、創世記 14 章と詩篇 110 篇の両方で言及されるメルキゼデクに焦点を当て、イエス・キリストとその優れた大祭司職について明確に言及しています。このユダヤのキリスト教徒たちは、誇られ、尊敬されていたレビの祭司職を持つユダヤ教への回帰を考えていたのでしょうか？もしそうなら、彼らは旧約聖書に記されたこれらの節について考え、メルキゼデクの秩序における大祭司の優越性について深く考えるべきです。

創世記第 14 章と詩篇 110 篇はメルキゼデクについて個人的な詳細をほとんど教えてくれませんが、このこと自体は重要ではありません。これらの節は、彼が将来現れるキリストの象徴であることを示しています。創世記において、メルキゼデクはアブラハムと出会います。アブラハムは、東方の戦争をしている王たちから、甥のロトやソドムとゴモラの住民を救い出した後、帰途についていました。この神秘的な人物は「サレムの王」や「すぐれて高い神の祭司」と記されています。ここでの「サレム」は詩篇 76 篇 2 節の「シャレム」のようにエルサレムの都を指している可能性もありますし、他の都市である可能性もあります。「すぐれて高い神の祭司」という言葉は、彼が真の全能の神を知り奉仕していたことを伝えています。アブラハム同様、メルキゼデクも、偶像崇拝が行われていたカナン地方にいながら、ノアから伝承された真の信仰を保持していた人物の一人です。私たちにとっての意義は、メルキゼデクが王でありながら祭司であったことです。これはレビの家系の祭司には見られない特徴です。

メルキゼデクの行動は重要であり、彼の祭司職を明らかにしました。彼はアブラハムに祝福を与え、敗れた王たちから得た戦利品の十分の一を受け取りました。これはヘブル人キリスト教徒たちにとって深く考えるべき事柄です。彼らの父祖アブラハムは、メルキゼデクの祭司職を明確に認識し敬っていたのです。通常、より偉大な者がより小さい者を祝福し、より小さい者がより偉大な者に十分の一を支払います。彼の名前にも大きな意味があります。「メルキゼデク」は「正義の王」を、「サレムの王」は「平和の王」を意味します。彼はただの王ではなく、その王権が彼の祭司職と完全に調和している人物でした。

これは私たちに、天の王であり祭司であるキリストを思い起こさせますか？エレミヤ書 23 章 6 節によると、キリストの名は「主は私たちの正義」です。彼は罪深い人間が欠けているものを補い、私たちを神の前で義とするためにご自身を捧げました。その結果、彼はイザヤ書 9 章 6 節に預言された真の「平和の君」となりました。キリストが誕生した日には天使たちが「地の上に、平和が、御心にかなう人々にあるように。」(ルカ 2:14) と宣言しました。この素晴らしい王ご自身は「わたしは、あなたがたに平安を残します。わたしは、あなたがたにわたしの平安を与えます。わたしがあ

なたがたに与えるのは、世が与えるのとは違います。」と彼の弟子たちに伝えました（ヨハネ 14:27）。彼は祭司であり王です。その二つの役目は、十字架と王座が互いに入り組む、という最も素晴らしい方法で結びついています。

聖書がメルキゼデクについて言及していないこともまた重要です。彼の父母の記録や系図、生まれた時期や亡くなった時期について何も記されていません。これらは大祭司やレビの系統の祭司にとって極めて重要な事項でした。祭司になるには、レビ族から、さらにレビ族の中でもアロンの祭司家系からの出自を証明する必要がありました。エズラ記 2 章 61 節から 63 節には、ホバヤの子孫、コツの子孫、バルジライの子孫が家系の記録を見つけられなかったために祭司職から除外されたことが記されています。

しかし、メルキゼデクの系図について聖書は何も記していません。彼が登場しては消え去る様子が描かれ、「神の子に似た者とされ、いつまでも祭司としてとどまっているのです。」と述べています。ここが重要なのです。メルキゼデクは神の子であるキリストの型となる存在です。聖書がメルキゼデクについて記録し、また省略したことは、優れた大祭司であるキリストについて何か重要なことを私たちに示しています。それは、キリストには始まりも終わりもなく、その職務は家系によらず、その奉仕は永遠に続くということです。キリストはまことに「いつまでも祭司としてとどまっている」のです。

へブル人への手紙 7 章 4-10 節

4 その人がどんなに偉大であるかを、よく考えてごらんください。族長であるアブラハムでさえ、彼に一番良い戦利品の十分の一を与えたのです。

5 レビの子らの中で祭司職を受ける者たちは、自分もアブラハムの子孫でありながら、民から、すなわち彼らの兄弟たちから、十分の一を徴集するようにと、律法の中で命じられています。

6 ところが、レビ族の系図にない者が、アブラハムから十分の一を取って、約束を受けた人を祝福したのです。

7 いうまでもなく、下位の者が上位の者から祝福されるのです。

8 一方では、死ぬべき人間が十分の一を受けていますが、他の場合は、彼は生きるとあかしされている者が受けるのです。

9 また、いうならば、十分の一を受け取るレビでさえアブラハムを通して十分の一を納めているのです。

10 というのは、メルキゼデクがアブラハムを出迎えたときには、レビはまだ父の腰の中にいたからです。

メルキゼデクについての聖書の事実が紹介されました。ここで著者は、メルキゼデクの祭司職がレビの祭司職よりもいかに優れているかを詳述しています。族長アブラハムが偉大であったことに異論はないでしょう。しかし、アブラハムがメルキゼデクに出会い、この祭司に「戦利品の十分の一」を与えたことから、メルキゼデクがより偉大であることがわかります。靈感を受けた著者はモーセよりも詳しく述べています。創世記 14 章 20 節ではモーセは「アブラムはすべての物の十分の一を彼に与えた。」と述べていますが、ヘブル人への手紙の著者はそれを「戦利品の十分の一」、つまり勝利の山積みされた戦利品の中から最上の部分を与えたと記述しています。

この行動に誤解の余地はありませんでした。ユダヤ人クリスチャンは十分の一とそれが誰に支払われるべきかを知っていました。モーセの律法はレビの祭司職に同胞イスラエル人から十分の一を徴収する権限を与えました。彼らは皆アブラハムの子孫として兄弟であったにもかかわらず、律法によりレビの祭司職は十分の一の問題において権威と優位性を持っていたのです。

さて、メルキゼデクについて考えてみましょう。レビが生まれるはるか前、祭司職が始まるはるか前、モーセの律法が施行され十分の一が求められるはるか前に、アブラハムは自発的にメルキゼデクに十分の一を捧げました。この十分の一は兄弟からではなく、偉大な父アブラハムから来たものであり、求められたものではありませんでした。アブラハムから十分の一を受け取るだけでなく、メルキゼデクは創世記 14 章に記録されているようにアブラハムを祝福することで、その優位性を示しました。アブラハムがこの神の使者から祝福を受けたとき、誰が偉大であるかは明らかでした。一般的な原則として、より偉大な者だけが劣った者を祝福することができるのです。

アブラハムから十分の一を受け取り、祝福を与えるだけでなく、メルキゼデクは別の方法でもその偉大さを示しました。レビの祭司たちが、その職務の尊厳を持ち、十分の一を集めることができたのはわずかな間だけでした。著者が用いる現在形の「十分の一を受けています」という言葉から、おそらく旧約聖書の祭司職がまだエルサレムで機能していたことがうかがえます。もしそうであれば、この手紙は紀元 70 年以前に書かれたものでしょう。その年、ローマ軍がエルサレムを破壊し、ユダヤ人を追放し、祭司職を解散させました。いずれにせよ、レビの大祭司職が機能している間、それは死すべき人間たちが代々受け継ぎましたが、メルキゼデクの祭司職には終わりがありませんでした。彼もまた死すべき人間であったにもかかわらず、聖書には彼の死の記録がなく、この点で彼はキリストの型として用いられています。メルキゼデクの優れた祭司職は、先代も後継者もない大祭司キリストにおいてその成就を見ました。

ヘブル人の読者たちはこの論点を理解したでしょうか。もしメルキゼデクがアブラハムよりも偉大であるならば、彼はアブラハムの曾孫レビを通じて彼の子孫である祭司たちよりも偉大であるに違いありません。当然ながら、レビは直接メルキゼデクに

十分の一を捧げたわけではありません。アブラハムがメルキゼデクに会ったとき、イサクはまだ生まれておらず、したがってレビはまだ曾祖父アブラハムの体内にいたのです。レビ自身がイスラエル人から直接十分の一を集めたわけでもありません。十分の一は彼の子孫アロンが最初の大祭司に任命され、モーセの律法が与えられたときに始まりました。しかしレビが子孫を通じて十分の一を集めたように、彼もまた先祖を通じてそれを捧げました。

レビの祭司職が優れており、そこに戻ることが最善の道だと思った人はいますか？それならば、レビがアブラハムの中でメルキゼデクという優れた大祭司に敬意を表したことを思い出してください。そして何よりも、メルキゼデクの位に従って永遠の大祭司であるイエスを見上げてください。彼こそが最高の祝福者です。彼こそが民数記 6 章 22-27 節の祝福をレビの祭司たちに与えました。そしてイエスはレビの祭司たちを通じてその祝福を民に与えたのです。彼こそがルカ 24 章 50 節で「手を挙げて彼らを祝福した」昇天の際の祝福者です。イエスこそが永遠にご自身の者たちを祝福する大祭司の手を差し伸べている方です。そして全ての真の信者が、霊的な先祖アブラハムのように、イエスに敬意と賛美を捧げるのです。

へブル人への手紙 7 章 11-17 節

11 さて、もしレビ系の祭司職によって完全に到達できたのだったら、——民はそれを基礎として律法を与えられたのです——それ以上何の必要があって、アロンの位でなく、メルキゼデクの位に等しいと呼ばれる他の祭司が立てられたのでしょうか。

12 祭司職が変われば、律法も必ず変わらなければなりません、

13 私たちが今まで論じて来たその方は、祭壇に仕える者を出したことの無い別の部族に属しておられるのです。

14 私たちの主が、ユダ族から出られたことは明らかですが、モーセは、この部族については、祭司に関する何を何も述べていません。

15 もしメルキゼデクに等しい、別の祭司が立てられるのなら、以上のことは、いよいよ明らかになります。

16 その祭司は、肉についての戒めである律法にはよらないで、朽ちることのない、いのちの力によって祭司となったのです。

17 この方については、こうあかしされています。「あなたは、とこしえに、メルキゼデクの位に等しい祭司である。」

著者は一步一步進めながら、キリストの大祭司職の優越性を示してきました。もしメルキゼデクが優れていたならば、彼が指し示す大祭司もまた優れているに違いあり

ません。この事実を示すために、著者は祭司職の目的に注目します。その役割は、罪深い人間を神の前に受け入れられるようにすることでしたが、レビの祭司職にはそれができませんでした。神はこの祭司職を支持するためにモーセの律法を与え、その運営に関する規定を次々と定めましたが、レビの祭司職が不完全であるという事実は変わりませんでした。繰り返し捧げられた動物の犠牲の血は、罪人が完全にきよめられるために必要な、たった一つの偉大な犠牲を指し示すものでしかありませんでした。

この無力さのために、レビの祭司職は置き換えられる必要がありました。そして実際にそうになりました。ダビデはレビの祭司職が施行されてから長い後に書かれた詩篇 110 篇で、この置き換えについて語っています。新しい大祭司が現れるのです。それはアロンのような者ではなく、メルキゼデクのような存在です。著者は大胆に続けます。もし祭司職が置き換えられたなら、それを支持するために与えられたモーセの律法はどうなるのでしょうか？それもまた変えられました。8章で示されるように、もはやモーセの契約は無効となりました。これらのユダヤ人クリスチャンたちは、不完全な祭司職と時代遅れの契約に戻りたいのでしょうか？彼らの前には、祭司職を完全に成就し、神と人を永遠に和解させる優れた大祭司が立っているというのに。

この大祭司の系譜は、律法が変更されたことをも示しています。律法のどこにも、レビ族以外の者が祭司になるための規定はなく、ましてや神殿外の大祭壇で犠牲を捧げるための規定はありませんでした。それでも、皆この大祭司が「ユダ族」から出ることを知っていました。マタイの福音書 1 章とルカの福音書 3 章の系図、そしてルカの福音書 2 章のイエスの誕生の記録には、イエスがユダ族から出たことが記されています。著者は「私たちの主が、ユダ族から出られた」と述べ、この言葉が星のように昇るか、根から芽が出るように出現することを意味し、エレミヤ 23 章 5 節の「わたしは、ダビデに一つの正しい若枝を起す。」という神の約束を思い起こさせます。著者はまた、「私たちの主」と書き、読者をこの偉大な祭司の告白へと優しく導いています。律法は変更されました。レビ人はもはや祭司ではありません。今やユダ族から出た者が現われ、はるかに優れた方法で奉仕しています。

レビの祭司職の不完全さ、モーセの律法の廃止、そしてキリストがユダから出たことについて言われたすべてのことが、イエスを優れた大祭司として明確に示しています。さらにこれを明確にするものがあります。キリストは「肉についての戒めである律法にはよらないで、朽ちることのない、いのちの力によって祭司となった」のです。レビの祭司職は死ぬ運命にある人間になるものであったため、継承に関する法律が必要でした。法律はレビの子孫を祭司とし、交代が必要なきにも祭司職を続けさせました。

この偉大な大祭司の場合、それは全く異なります。その方を祭司としたのは律法ではなく、後継者についての法律も必要ありません。その命は「朽ちることのない」ものです。彼は神と人の融合体であり、命そのものです。ヨハネの福音書 14 章 6 節で

「私は命である」というその方の言葉は真実を言い表しています。その祭司職は永遠であり、実際に終わりのない命を与えることができます。その祭司としての心は、死によっても断ち切ることでできない愛で私たちと結ばれています。神ご自身が既にダビデ王を通してこれを述べています。詩篇 110 篇 4 節で、神は永遠の御子をレビの死すべき系統の優れた代替者として証言し、「あなたは、メルキゼデクの例にならい、とこしえに祭司である。」と宣言しています。

ヘブル人への手紙 7 章 18-19 節

18 一方で、前の戒めは、弱く無益なために、廃止されましたが、
19 ——律法は何事も全うしなかったのです——他方で、さらにすぐれた希望が導き入れられました。私たちはこれによって神に近づくのです。

著者は、この大祭司とその偉大な祭司職の優越性にさらに焦点を当てています。まず、キリストの大祭司としての働きのより良い結果を指摘しています。12 節で彼は、この偉大な大祭司の到来がレビ系祭司職を支配する法律や規則の変更を必要とすると述べました。彼はさらに強調して言います。「前の戒めは、弱く無益なために、廃止されました。」と。「廃止する」というのは、何か新しいものに適合するように修正や修理すること以上の意味を持っています。これは完全な取り消しを伴う法律用語です。レビ系祭司職を支えるモーセの律法はもはや有効ではなく、完全に廃止されました。

著者は正当な理由でそう言っています。それはモーセの律法が「弱く無益」であったためです。神がモーセの律法を与えたにもかかわらず、それにはある種の弱さと無益さがありました。その主な弱点は、何も完全にすることができなかったことです。著者が言っているのは、律法がまったく役に立たなかったということではありません。律法とそれを支える祭司職は、より良いものの先駆けとして、またそれを指し示すために存在していました。それらは、来たるべきより良い大祭司の影を投げかけ、その詳細を示していました。しかし、それが以前の祭司職の目的の全てでした。それは動物の犠牲を通して人々を神と正しくすることも、人々の心を変えて神の戒めの道を歩みたいと思わせることもできませんでした。そのような結果は、メルキゼデクの位に従う大祭司の働きによってのみ達成されることができたのです。

「さらにすぐれた希望が導き入れられました。私たちはこれによって神に近づくのです。」と著者は述べ、この大祭司の働きの結果を強調しています。神は以前の祭司職を廃止し、さらにすぐれた希望を導入しました。後に著者は、このより良い希望について、永遠の命のために私たちが自信を持って頼ることができるものであることをより詳しく説明します。ここでは、それが偉大な大祭司の、すべてをあがなう犠牲に基

づいていることを指摘するだけで十分です。その方がカルバリ丘の十字架で血を流したとき、人と神を隔てる厚い幕のような罪が取り除かれました。イエスの血は、見えない刃物のようにその幕を二つに裂きました。それによって、この事実を信じる罪人は、この世でも、来たるべき世でも自信を持って神に近づくことができるようになったのです。旧約聖書の祭司職や動物の犠牲は、さらにすぐれた大祭司が来て、彼らができなかったことを完璧に成し遂げたときには、何の役にも立ちません。

ヘブル人への手紙 7 章 20-22 節

20 また、そのためには、はっきりと誓いがなされています。

21 ——彼らの場合は、誓いなしに祭司となるのですが、主の場合には、主に対して次のように言われた方の誓いがあります。「主は誓ってこう言われ、みこころを変えられることはない。『あなたはどこしえに祭司である。』」 ——

22 そのようにして、イエスは、さらにすぐれた契約の保証となられたのです。

次に、著者はキリストの大祭司職の優越性を、それについての神の誓いに言及することで強調しています。神はレビ系祭司職を支配し支えるための法律を与えましたが、その運営を保証する誓いを発することは一度もありませんでした。実際、レビ系祭司職は一時的なものであり、置き換えられるように作られていました。しかし、神はその御子の大祭司職について、すでにダビデの時代に誓われました。詩篇 110 篇 4 節では誓いの文言は明らかにされていませんが、その誓いが支えていたものは確かです。「あなたはどこしえに祭司である。」と神は誓われました。ダビデの子であり主である方は一定期間の祭司であるだけでなく、「どこしえに」つまり永遠に祭司であるとされました。その祭司職は終わることがなく、変わることもなく、したがって一時的なレビ族の祭司職よりもはるかに優れています。神がそう言われただけでなく、それを保証する誓いを立て、決してその考えを変えないと誓われたのです。

このキリストの永遠の祭司職に関する誓いが私たちに何を保証しているかを考えてみてください。そのために「イエスは、さらにすぐれた契約の保証となられた」のです。「さらにすぐれた」という言葉は、すでに見たように、著者のお気に入りの言葉です。同様に「契約」も、ヘブル人への手紙でここから 17 回登場するお気に入りの言葉です。「契約」は「意志」や「遺言」を意味します。神と人との契約は完全に一方的なものであり、それは神のご意志を示し、完全に神から来るものです。この「さらにすぐれた契約」である救いについては後ほどさらに詳しく説明されますが、イエスがその「保証人」なのです。

ここでの「イエス」という名前の戦略的な使用に注目してください。イエス、すなわち救い主は、そのすべてのみわざによってこの「さらにすぐれた契約」の保証人です。「保証人」という言葉は新約聖書ではここにしか使われておらず、「信頼できる担保」のような意味を持っています。保証人とは、契約に記載されたことが実行されることを保証する信頼できる担保です。神がより良い救いの契約について私たちに与えてくださった何と素晴らしい保証でしょうか！その救いを準備してくださったのはイエスです。永遠にわたって私たちの祭司であり続け、変わらない神の誓いによって保証され、神が私たちに約束されたことを正確に行ってくださいと確信させてくれるのはイエスなのです。

ヘブル人への手紙 7 章 23-25 節

23 また、彼らの場合は、死ということがあるため、務めにいつまでもとどまることができず、大ぜいの者が祭司となりました。

24 しかし、キリストは永遠に存在されるのであって、変わることもない祭司の務めを持っておられます。

25 したがって、ご自分によって神に近づく人々を、完全に救うことができになります。キリストはいつも生きていて、彼らのために、とりなしをしておられるからです。

著者は、キリストが大祭司として優れているというさらなる証拠を提示しています。つまり、キリストの祭司職が死によって途切れないという事実を、より深く述べているのです。すでに 8 節と 16 節で指摘されたように、レビ族の祭司職の一つの弱点は、職務を持つ者たちの死でした。「その祭司たちは多くいた。」と 1 世紀のユダヤ人歴史家ヨセフスは、最初の大祭司であるアロンから、紀元 70 年に神殿が破壊された時に最後に務めていた者まで、83 人を数えています。

レビ族の大祭司職の絶え間ない交代は、その弱点を明らかにしました。しかし「キリストは永遠に存在される」のです。イエスの命は、16 節がすでに宣言しているとおり「朽ちることのない」ものです。そしてそれはイエスが「変わることもない祭司の務めを持って」おられることを意味します。引退も交代もなく、死によって任期が短くなることもなく、後継者によって引き継がれることもなく、ただイエスだけが私たちの救い主キリストとして、常に永遠の大祭司としてそこにおられるのです。イエスが私たちにもたらす祝福には終わりがありません。私たちへのすべての益は常にその点にあります。ヘブル人キリスト教徒たちの中の誰が、このように優れたイエスを、レビ族の死すべき系譜に変えたいと思うのでしょうか？現代においても、あたかも神殿

の幕が再び縫い合わされ、神と人との間に再び仲介者が必要となるように、イエスの代わりに人間の祭司を置き換えたいと、誰が思うでしょうか。

このキリストの変わらぬ祭司職から引き出される重要な結論があります。それは、彼が祭司として整える救いについてです。キリストは「ご自分によって神に近づく人々を、完全に救うことがおできになります。」と著者は述べています。「救うことができる」—それはレビの祭司たちにはできなかったことであり、それこそがすべての罪人が必要としていることです。キリストという祭司にはそれができ、それも「完全に」救うことができます。これは中途半端な救いではなく、繰り返しが必要な犠牲でもありません。一度限りで、イエスはご自身を犠牲として捧げ、十字架上の祭壇で私たちの救いを成し遂げました。

著者が「ご自分によって神に近づく人々を、完全に救うことがおできになります。」と述べる時、それはキリストの救いの働きの範囲を、信じる人々だけに限定しているわけではありません。むしろ、著者はイエスへの信仰の役割と必要性を指し示しています。また、「ご自分によって神に近づく人々」について話すことで、信者がイエス以外の他の仲介者を必要としないことを示しています。彼らは神に近づくための人間の仲介者を必要とせず、イエスという偉大な大祭司の働きのおかげで、天の愛する父に大胆かつ自信を持って近づくことができるのです。神に近づく道は常に開かれています。なぜなら、この大祭司は「彼らのために、とりなしをしておられる」からです。

最初の聖木曜日の夜、イエスが十字架にかかる前に、ペテロはこの大祭司の取りなしについて学びました。ルカの福音書 22 章 32 節でペテロは救い主から「わたしは、あなたの信仰がなくならないように、あなたのために祈りました。」と告げられました。同じ夜、イエスはすべての時代のイエスの弟子たちのために祈りました。「わたしは彼らのためにお願いします。世のためにはなく、あなたがわたしに下さった者たちのためにです。なぜなら彼らはあなたのもだからです。」とイエスはヨハネの福音書 17 章 9 節で天の父に願いました。

天において、イエスの取りなしの祈りは終わることなく続きます。もし天に時間があるとすれば、時間ごと、日ごとに、大祭司であるイエスはその祈りで私たちを支え、守っています。この大祭司は、それ以上のことをする必要はあるでしょうか？イエスはすべてを成し遂げました。イエスの血によって私たちは完全にきよめられ、イエスの御霊によって日々新たにされています。イエスのおかげで、私たちは天の御父の御座の前で、何の汚点もない状態で立つことができます。

へブル人への手紙 7 章 26-28 節

26 また、このようにきよく、悪も汚れもなく、罪人から離れ、また、天よりも高くされた大祭司こそ、私たちにとってまさに必要な方です。

27 ほかの大祭司たちとは違い、キリストには、まず自分の罪のために、その次に、民の罪のために毎日いけにえをささげる必要はありません。というのは、キリストは自分自身をささげ、ただ一度でこのことを成し遂げられたからです。

28 律法は弱さを持つ人間を大祭司に立てますが、律法のあとから来た誓いのみことばは、永遠に全うされた御子を立てるのです。

著者は、この完全に適格な大祭司が捧げた優れた犠牲を指摘することで、キリストの優越性に関するこのセクションを締めくくっています。罪人たちにはどのような大祭司が必要でしょうか？どのような大祭司がその任務に完全に適しているのでしょうか？私たちが信じている方です！著者は具体的に名前を挙げていませんが、読者は誰のことを指しているのか知っています。それは、メルキゼデクの位に従う永遠の大祭司イエスです。

彼はその人間性においても「きよい」存在です。イエスの中には汚れが微塵もなく、神の戒めからのわずかな逸脱も見られません。キリストの聖さをより完全に説明するために、著者は3つの同義の表現を使用しています。彼は「悪がない」存在であり、悪を行わず、何の卑しいものや悪いものも彼には見いだされません。彼は「汚れがない」存在であり、大祭司の仕事を妨げるような道徳的な汚れは何もありません。そして彼は「罪人から離れ」ている存在です。彼は罪人たちの間で生活しなければなりませんでしたが、その罪の行いには決して加わりませんでした。「傷もなく汚れもない小羊」とペテロは1ペテロの手紙1章19節で彼を描写しています。彼はヨハネの福音書8章46節で「あなたがたのうちだれか、わたしに罪があると責める者がいますか。」と敵に挑戦することができる大祭司でした。そしてまた、彼は「天よりも高くされた」存在です。天に昇って以来、大祭司は神の御座の前で、私たちの仲介者としての職務に就いています。私たちはそれ以上、何を必要とするのでしょうか？イエスは私たち罪人のために完璧に仕えています！

著者はイエスの人間性からイエスのみわざに話を移し、イエスが私たちに必要な大祭司であることを示しています。イエスは完璧な大祭司であるだけでなく、完璧ないけにえでもありました。5章3節で著者は、レビ族の大祭司が毎年の贖罪の日に、自分の罪のために犠牲を捧げた後で、人々の罪のために犠牲を捧げる必要があったことを語っています。ここでその考えは繰り返され、私たち的大祭司と対比されています。イエスは毎日、天の父の前で罪人たちのために取りなしていますが、それは旧約時代の大祭司が年に一度行ったように行われています。

しかし、私たち的大祭司は、レビ族の大祭司が贖罪の日にしなければならなかったように、まず自分の罪のために「毎日」犠牲を捧げる必要はありません。「きよく、悪

も汚れもなく、罪人から離れ、また、天よりも高くされた」大祭司が自分のための犠牲を必要とするでしょうか？この事実だけでも、彼がレビ族の大祭司よりもはるかに優れていることを示しています。

キリストがもたらした犠牲も同様です。「キリストは自分自身をささげ、ただ一度でこのことを成し遂げられたからです。」キリストご自身のためには犠牲は必要ありませんでした。そして罪人のためには、たった一度の犠牲で十分でした。キリストがご自身を捧げたとき、レビの大祭司たちが決してできなかったことを成し遂げました。つまり全世界の罪のために完全で完璧な犠牲を捧げたのです。このことは次の章で明らかに示されています。

これらの対比は明らかであり、キリストの優位性を疑う余地なく証明しています。レビの祭司職を支えたモーセの律法は紀元前 1500 年に制定されましたが、神の誓いによってキリストの祭司職を確立したダビデの詩篇は紀元前 1000 年頃に作られ、明らかに古い祭司職に取って代わりました。律法は任命された祭司たちの弱さを認識し、祭司たち自身の罪のための犠牲も設けました。しかし、神の誓いによって任命された罪のない御子は「永遠に全うされた」のです。すなわち、キリストはたった一度で永遠にその目的を達成しました。神の御子として地上に来られたキリストは、大祭司の働きを完全かつ永遠に成し遂げたのです。全世界の罪のためのキリストによるたった一度の捧げ物によって、天の聖なる父への道は大きく開かれました。

著者は暗に疑問を投げかけています。読者たちは、神によって廃止された古い大祭司職に戻りたい、と本当に思っているのでしょうか？彼らと同様、犠牲を必要とする、弱く脆い人間の祭司たちに？彼らのような、死ぬべき大祭司たちの取りなしに？彼らは本当にキリストという優れた大祭司から離れたかったのでしょうか？一方、私たちはどうでしょうか？もし離れたいのならどのような理由で？下記の讚美歌で歌われているように、主よ、どうか私たちに救い主へと導いてください、と祈ってやみません。

私はイエスから 離れない
主は私のために 命を捧げた
贖いを成し遂げた主
私はイエスから 離れない

(TLH 365 番 1,5 節 *Jesus I will never leave*)

聖所と契約において優れた祭司

へブル人への手紙 8 章 1-2 節

- 1 以上述べたことの要点はこうです。すなわち、私たちの大祭司は天におられる大能者の御座の右に着座された方であり、
- 2 人間が設けたのではなくて、主が設けられた真実の幕屋である聖所で仕えておられる方です。

ユダヤ教もまた、祭司が仕える場所について非常に関心を持っていました。聖都エルサレムにある神殿は、その外面的な華麗さと儀式主義がユダヤ人の目に印象的に映り、その心に鮮明に刻まれていました。ヘブル人のキリスト者たちは、それを思い出して信仰が揺らいでいたのでしょうか？それならば、私たちの大祭司が仕える聖所について語り、その優位性を指摘する時です。

著者はすぐに核心に触れ、主要な考えを一度に述べます。私たちの大祭司は「天におられる大能者の御座の右に着座された方」だと断言することで、勝利のラッパの調べを響かせます。まるで読者に「私たちに偉大な大祭司がいるのを見てください。その方は地上での犠牲の働きを終え、天において全能と栄光の座に就いておられます。ユダヤ教の祭司たちをその方と比べたら、どのように見えるのでしょうか？」と呼びかけているかのようです。

「御座の右」とは、最高の権力と栄光の位置を表し、「天におられる大能者」は神を敬虔に指しています。私たちの祭司は地上における限られた祭司ではなく、天において崇高で王に値する方です。この方は犠牲の働きを終えて天に昇り、もはや地上において象徴に過ぎない犠牲を繰り返すのに忙しくすることはありません。

さらに著者はキリストが「主が設けられた真実の幕屋である聖所で仕えておられる方です。」ともっと強調し、明確に述べています。「仕える」という言葉は、キリストの天における崇高な地位と鋭く対照を成しており、特に私たちの注意を引きます。このギリシャ語の言葉は、「liturgy(典礼)」という言葉と同じ語源を持ち、その言葉が登場する文脈によって、どのような奉仕が行われるかが判断できます。崇高なキリストは、天において、私たちの大祭司として仕えておられるのです。

私たちの注意を引くもう一つの言葉は、「聖所」と「幕屋」という同義語です。どちらも、イスラエルの荒野の日々に戻り、イスラエル人が特別なテント、すなわち主の臨在を象徴する幕屋を設けたことを思い出させます。荒野のそのテントは神聖なものでした。同様に後にエルサレムに建てられた栄光ある神殿も神聖でした。しかし、これらは神の真の住まいではありませんでした。罪深い人々がそれを建て、罪深い祭司たちがそこに仕えました。キリストは、主によって設けられたまことの幕屋で仕えています。その幕屋は天そのものであり、ヘブル人への手紙9章24節が説明しているように、「キリストは、本物の模型にすぎない、手で造った聖所に入られたのではなく、天そのものに入られたのです。そして、今、私たちのために神の御前に現れてく

ださるのです。」天国において、私たちの大祭司は信者を代表し、永遠に統治して仕えておられるのです。

ヘブル人への手紙 8章 3-6 節

3 すべて、大祭司は、ささげ物といけにえとをささげるために立てられます。したがって、この大祭司も何かささげる物を持っていなければなりません。

4 もしキリストが地上におられるのであったら、決して祭司とはなれないでしょう。律法に従ってささげ物をする人たちがいるからです。

5 その人たちは、天にあるものの写しと影とに仕えているのであって、それらはモーセが幕屋を建てようとしたとき、神から御告げを受けたとおりのものです。神はこう言われたのです。「よく注意しなさい。山であなたに示された型に従って、すべてのものを作りなさい。」

6 しかし今、キリストはさらにすぐれた務めを得られました。それは彼が、さらにすぐれた約束に基づいて制定された、さらにすぐれた契約の仲介者であるからです。

天の聖所だけがこの偉大な大祭司にふさわしい場所です。この方が捧げる供え物がそれを明確に示しています。レビ的な大祭司は「ささげ物といけにえ」を捧げることが役割でしたが、これは毎年繰り返されるものでした。著者は「ささげ物といけにえ」の複数形を使用し、また「捧げる」という動詞を現在形で用いています。この仕事、つまりささげ物といけにえを捧げることは決して終わりませんでした。毎年、贖罪の日には大祭司がそれを繰り返し行わなければならなかったのです。

さて、私たちの偉大な大祭司であるイエスを見てみましょう。彼もまた「何かささげる物を持っていなければなりません」が、違いがあります。ここで使用されている「捧げる」という動詞のギリシャ語の形は、先ほどのものとは異なり、繰り返し行われる現在形ではありません。むしろ、ここで使用されている動詞形は、彼が一度だけ捧げたことを示唆しています。この考えは、彼が捧げた「何か」がギリシャ語の単数形であることで分かります。これは、たった一つの犠牲を指しているのです。

読者がその意味を見逃すことはできるでしょうか？7章 27 節ではすでに、「キリストは自分自身をささげ、ただ一度でこのことを成し遂げられたからです。」と述べられており、9章ではこのことが詳述されています。今、天の聖所で、偉大な大祭司はこの一度限りの犠牲を用いて、哀れな罪人たちのために弁護し続けています。イエスがカルバリ丘の十字架で成し遂げた犠牲が、父なる神の御前で罪人たちのために祭司としてとりなしをする、イエスの働きの確かな基盤を形成し続けているのです。

このような犠牲をささげる祭司が、地上の幕屋で仕えることはないでしょう。著者がまるで神殿がまだ建っていて、レビ的祭司職がまだ機能しているかのように書いていることから、これは紀元 70 年以前の出来事であると推測されます。キリストがカルバリ丘で完璧な犠牲を捧げて神殿の幕を裂かれたことにより、旧約聖書の祭司職は廃止されたのですが、それでもローマ軍が紀元 70 年に神殿を破壊するまで続いていました。そのような神殿には、ユダの部族から来た者が特別な犠牲を捧げる余地はなく、レビの系統から来た祭司だけが繰り返しささげ物を捧げていただけでした。

私たちの大祭司には、根本的に異なる聖所が必要です。読者たちは、その天の聖所がいかにより優れているかを理解していたのでしょうか？著者は、荒野での地上の幕屋が「天にあるものの写しと影」であると指摘することでそれを伝えています。「写し」はある種の素描やスケッチプランを意味し、「影」は何かの反映やシルエットを指します。

ここでの言葉は明確です。神が出エジプト記 25 章 40 節でモーセに建てるように指示した幕屋は、彼に示されたものの影に過ぎませんでした。ユダヤ人が非常に大切にしていた地上の幕屋は、単なる写しであり、本物は天にありました。レビ的祭司職がキリストの祭司職の影に過ぎなかったように、それが仕えた聖所もまた、キリストが働く天の聖所の影に過ぎなかったのです。どちらがより優れた大祭司であるかは明確に示されています。

キリストの優越性は、彼が仲介する契約によっても示されています。7 章 22 節で、イエスは「さらにすぐれた契約の保証」と呼ばれています。ここでは、9 章 15 節や 12 章 24 節と同様に、彼が「仲介者」、つまり二者の間に立つ仲介人として描かれています。「契約」は、7 章 22 節で再び述べられているように、遺言や遺産を指します。ギリシャ語には「契約」を意味する言葉が 2 つあります。より一般的な言葉は、結婚契約のように、互いにある程度交渉できる対等の二者が関わるものです。もう一つの言葉は、ここで使用されているように、一方的なものであり、遺言書のように、「これが私が望むこと、これがこのように実行されるべきこと」という意味です。

キリストが仲介する「さらにすぐれた」契約とは何でしょうか？それは、仲介者の死によって実施されるゆるしと命のより良い約束を伴う、神による救いの遺産です。この遺言は、すでにアブラハムに約束されていましたが、イエスがカルバリ丘の十字架で神と人の間に立ったときに「制定」し、法的な効力を持つものとなりました。

これは、ユダヤ人クリスチャンたちへの注意喚起になったのでしょうか？「契約」という言葉はユダヤ教において重要であり、モーセの契約よりもさらに優れた内容を持つ契約についての話は、間違いなく彼らの注意を引いたことでしょう。

へブル人への手紙 8 章 7 - 13 節

7 もしあの初めの契約が欠けないものであったなら、後のものが必要になる余地はなかったでしょう。

8 しかし、神は、それに欠けがあると、こう言われたのです。「主が、言われる。見よ。日が来る。わたしが、イスラエルの家やユダの家と新しい契約を結ぶ日が。

9 それは、わたしが彼らの父祖たちの手を引いて、彼らをエジプトの地から導き出した日に彼らと結んだ契約のようなものではない。彼らがわたしの契約を守り通さないで、わたしも、彼らを顧みなかったと、主は言われる。

10 それらの日の後、わたしが、イスラエルの家と結ぶ契約は、これであると、主が言われる。わたしは、わたしの律法を彼らの思いの中に入れ、彼らの心に書きつける。わたしは彼らの神となり、彼らはわたしの民となる。

11 また彼らが、おのおのその町の者に、また、おのおのその兄弟に教えて、『主を知れ』と言うことは決してない。小さい者から大きい者に至るまで、彼らはみな、わたしを知るようになるからである。

12 なぜなら、わたしは彼らの不義にあわれみをかけ、もはや、彼らの罪を思い出さないからである。」

13 神が新しい契約と言われたときには、初めのものを古いとされたのです。年を経て古びたものは、すぐに消えて行きます。

モーセを通じて神が与えた契約を、ユダヤ人は非常に重んじていました。彼らにとって、それは最終的で完全な言葉であり、その中には祭司職、神殿の儀式、生贄、聖日などを規定する律法が含まれていました。迫害の圧力にさらされたヘブル人クリスチャンたちは、モーセの契約を持つユダヤ教に戻ることを考えていました。彼らは、キリスト教を受け入れたことが間違いだったのかもしれない、もしかしたら古い契約の方が良かったのかもしれないと考えたのです。著者はこう答えています。「もしあの初めの契約が欠けないものであったなら、後のものが必要になる余地はなかったでしょう。」古い契約が取り替えられたのは、それに欠陥があるからではなく、むしろそれが不十分であり、準備的なものでしかなかったからです。神がモーセを通じて与えた契約は基本的に律法であり、二つの点で不十分でした。それは罪を明らかにしましたが、取り除くことはできず、完全な従順を求めましたが、それを実行する力を与えることができなかったという点です。

確かに、モーセの契約には儀式法や行政法他に、十戒で要約される道徳律も含まれていました。この道徳律は、すべての時代にわたって有効であり、新約聖書でも繰り返し言及されています。しかし、パウロがローマ書8章3節で示唆しているように、「無力になったため、律法にはできなくなっていること」があるのです。モーセ

の契約を最終的なものとして見ることは、神がその民のために考えておられた、よりすぐれた約束に遠く及ばないことになります。

神ご自身が古い契約の問題点を示されました。それは人々に問題があったということです。出エジプト記 19 章 8 節および 24 章 7 節には、神がモーセを通じて契約を与えたとき、人々が「私たちは主が仰せられたことを、みな行います。」と応答したことが記されています。しかし、彼らはそれを実際に行いませんでした。ヘブル書の著者は 3 章で、すでに彼らの不従順を示しています。

古い契約は、それ自体は善良で聖なるものであったにもかかわらず、従順さや命を与える力がありませんでした。したがって、神ご自身がそれをより良い契約に置き換えました。紀元前 600 年頃、神は預言者エレミヤを通じて、「イスラエルの家やユダの家と新しい契約を結ぶ日」が来ることを宣言されました。「新しい」とは単に時期が新しいという意味だけでなく、質的に新しいことを意味します。「結ぶ」という言葉は、完成に導くことを意味します。永遠の大祭司は、カルバリ丘の十字架で「完了した」と言われた時、最後の審判の日まで有効な契約を完成させたのです。

誰がこの契約を語り、誰がこの契約を結ぶのか、よく注意してください。それは「主」であり、約束を守る恵み深い神です。このエレミヤ 31 章の引用で、「主は言われる」という言葉が 4 回登場します。ここで神は繰り返し次のように「私は～する/なる」と宣言されます。「わたしが契約を・・・結ぶ」、「わたしは・・・わたしの律法を・・・心に書き付ける」、「わたしが・・・彼らの神・・・となる」、「わたしは・・・あわれみをかける」。

「イスラエルの家」と「ユダの家」は、新約時代のイスラエルを指しています。エレミヤの時代には、イスラエルの国はすでに消え、アッシリア人によって捕囚されていました。紀元前 588 年には、ユダの国もバビロン捕囚によって消え去ることになります。ユダは、キリストが約束された通りに誕生するために一時的に再興されましたが、紀元 70 年には散り散りになりました。エレミヤの時代ですでに、神は異なるイスラエルとユダ、すなわちアブラハムの霊的な子孫、すべての国民、部族、民、言語で構成される信者たちについて言及しています。これは黙示録 7 章 9 節に記されているとおりです。

神は、質的に新しい契約として、この置き換えられた契約について語られました。それは、シナイ山でモーセを通じて与えられたもののように条件付きではありません。神の愛と憐れみはその時も明らかでした。愛情深い父親のように、神はイスラエルの手を引いて導き、優しい思いやりをもって支えました。しかし、イスラエルは最終的に契約を捨てました。そして神は「背を向け」、彼らへの配慮を止められました。神は契約を無視し、その規定に従わない者たちに祝福を与えることはできなかつたのです。古い契約は、求められる従順さを生み出すことができなかつたために失敗

しましたが、新しい契約は純粋な福音と無条件の恵みのみであるため、失敗することはありません。

著者は、この置き換えられた契約が「さらにすぐれた約束」を持っていると述べています。ここでその説明がなされます。最初の約束は、エレミヤ書 31 章 33 節から引用されています。「わたしは、わたしの律法を彼らの思いの中に入れ、彼らの心に書きつける。」もはや二つの石の板は必要なくなり、恐れから神に従おうとする必要もありません。新しい恵みの契約の下では、神の民はその律法を心に書かれます。律法は彼らの内なる存在の一部となり、彼らは知力によって神のご意志を知り、心で神を愛するようになります。外部から強制されるのではなく、信仰心が内側から湧き上がり自発的な従順へと導かれます。それは詩篇 119 篇 32 節にあるように「私はあなたの仰せの道を走ります。あなたが、私の心を広くしてくださるからです。」という応答です。これは再生です。新しい契約は、神の道を歩む力と知識を持つ信仰心を生み出すのです。

第二の約束もエレミヤ書 31 章 33 節からの引用です。「わたしは彼らの神となり、彼らはわたしの民となる。」カルバリ丘での救いのみわざを信じた者たちは、特別な意味で神の民です。自由、安全、永遠が与えられ、それは「私はあなたのものであり、あなたは私のものである」という神の約束に基づき、確かにされます。彼らはエペソ人への手紙 1 章 14 節にあるように「神の所有物」であり、血によって買い取られた絆で神に結ばれています。信者たちは、エペソ人への手紙 2 章 19 節が輝かしく描いているように、「あなたがたは、もはや他国人でも寄留者でもなく、今は聖徒たちと同じ国民であり、神の家族なのです。」

第三の約束はエレミヤ 31 章 34 節の言葉を繰り返しています。古い契約の下では、知識が常に必要でした。預言者たちは神の意志をますます明らかにするために次々と現れました。イスラエルは、広い社会においても、狭い家族の中においても、「隣人」と「兄弟」に神について教えなければなりませんでした。人間の知識と神の啓示は不完全でした。しかし新しい恵みの契約の下では、すべての信者が神を知ることができます。子なる神は父なる神を明らかにし、聖霊は記録し、信者たちは救いの神を親密に知ることができるのです。これは、何よりも素晴らしいことです！アブラハムには神が直々に秘密を打ち明けました。モーセは神と顔と顔を合わせて神と話しました。復活の日、イエスはマリヤの涙を直接ぬぐいました。ヨハネは栄光の啓示を直接受けることで神を深く知ることができました。これらの素晴らしい特権について考えてみてください。新しい契約の下では、すべての信者が「身分の低い者から高い者まで」このような祝福を持つこととなります。

第四の約束はエレミヤ書 31 章 34 節からの引用で続きます。ここには「わたしは彼らの咎を赦し、彼らの罪を二度と思い出さないからだ。」とあります。神は彼らの咎とそれに伴う罪悪感をゆるします。それは神が罪を無視したり見過ごしたりするとい

うことではありません。神がゆるすのは、御子の贖いの犠牲を通じて、彼らの罪をすでに処理したからです。また、神は過去の罪を時折引き出して記録することもあります。神はそれらを御子の血によって完全に記憶から消し去ります。彼らは、全能の恵み深い神によってゆるされ、罪が忘れ去られるのです。神は私たちの背きを「東が西から遠く離れているように」取り去り（詩篇 103:12）、すべての咎を「海の深みに投げ入れ」と言われます（ミカ 7:19）。神が「私はゆるす。」「もう思い出さない。」と言われるとき、神を信じる罪人はその言葉に確信を持つことができます。「こういうわけで、今は、キリスト・イエスにある者が罪に定められることは決してありません。」（ローマ 8:1）。

これはすぐれた約束でしょうか？まさしく、そうです！ 質的にも、よりすぐれた新しい契約でしょうか？疑いなくそうだと言えます！ エレミヤは紀元前 600 年頃にすでにそれを預言していましたし、イエスは紀元 33 年頃にそれを実行に移しました。ほどなくして、まるで弱り果てた老人のように衰えていた古い契約は、完全に消え去りました。紀元 70 年にティトゥス皇帝の率いるローマ軍がエルサレムを征服した際に、神殿は壊され、聖所や祭司職も、聖所での犠牲もなくなりました。しかし、恵み深い神によって設立された、よりすぐれた救いの約束の上に立つ新しい契約は今もなお続いています。その契約に基づき、神は私たちをご自身の子どもとして受け入れ、私たちが、もう二度と罪の雲が空を暗くすることのない天のエルサレムに入るまで、私たちが関わってくださいます。こうして天国に入った私たちは、全ての恵みの源である神について、神が私たちを知っておられるように、完全に知ることができるようになるのです。

犠牲において優れた祭司

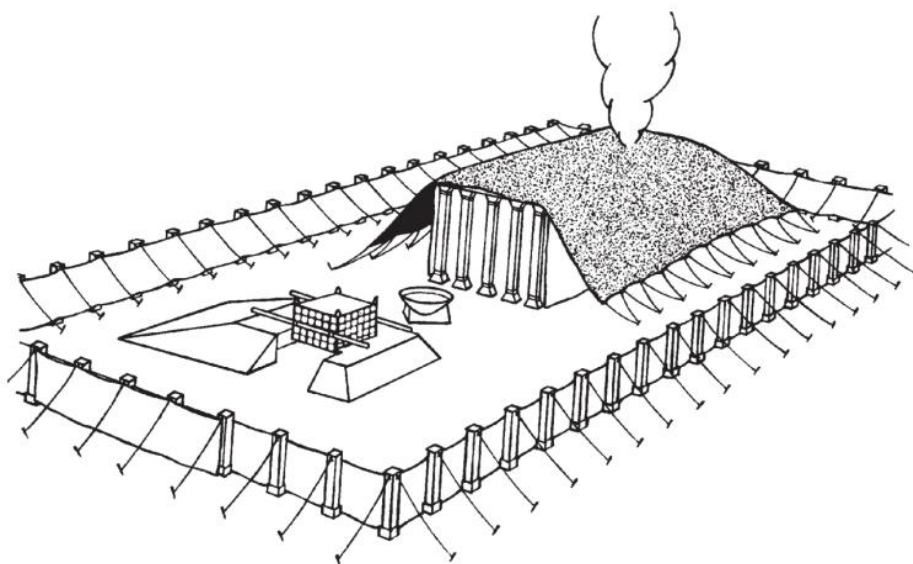
へブル人への手紙 9 章 1-5 節

- 1 初めの契約にも礼拝の規定と地上の聖所とがありました。
- 2 幕屋が設けられ、その前部の所には、燭台と机と供えのパンがありました。聖所と呼ばれる所です。
- 3 また、第二の垂れ幕のうしろには、至聖所と呼ばれる幕屋が設けられ、
- 4 そこには金の香壇と、全面を金でおおわれた契約の箱があり、箱の中には、マナの入った金のつぼ、芽を出したアロンの杖、契約の二つの板がありました。
- 5 また、箱の上には、贖罪蓋を翼でおおっている栄光のケルビムがありました。しかしこれらについては、今いちいち述べるできません。

キリストの優れた祭司職が依然として議論の主題となっています。その優位性を最も強調するのは、著者が示しているように、その犠牲に関することです。犠牲には場所も必要であったため、著者は読者の意識を幕屋にさかのぼらせています。この聖なる天幕は、荒野でユダヤ人に仕えたものであり、後にエルサレムに建てられた神殿のモデルとなりました。神ご自身が幕屋の型を与え（8:5）、その中で行われる礼拝を規定する規則も与えました。幕屋はその時代において重要なものであり、著者はそれについて敬意を持って記していますが、それは単に「地上的な」ものでした。人間によって建てられた、この世のものに過ぎなかったのです。

読者は旧約聖書の出エジプト記の25章から40章を参照し、幕屋に関する背景情報を確認するとよいでしょう。この天幕は、長さ30キュビット、幅10キュビット、高さ10キュビットでした。キュビットが約18インチ（約45cm）、つまり肘から中指の先までの長さであるため、これは長さ45フィート（約13.7m）、幅15フィート（約4.5m）、高さ15フィート（約4.5m）に相当します。

幕屋は2つの部分に分かれていました。最初の部屋は「聖所」と呼ばれ、長さ30フィートで、その入口はカーテンで仕切られていました。その後ろには「至聖所」と呼ばれる15フィートの長さの部屋がありました。こちらもカーテンで閉ざされており、そのカーテンは青、紫、赤の羊毛と細かくよった亜麻糸で織られ、ケルビムの図柄で飾られていました。



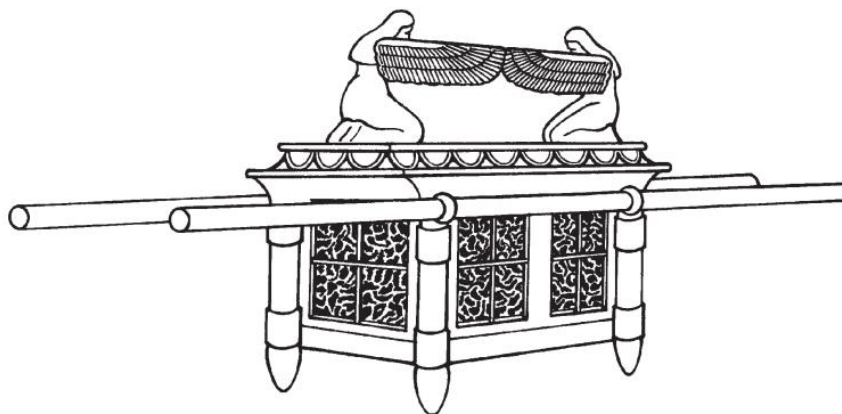
幕屋（イメージ）

最初の部屋には燭台があり、窓のない天幕の中で光を提供する7つの油ランプを備えた純金の燭台がありました。また、最初の部屋には木で作られ純金で覆われたテーブルがあり、その上には聖なるパンが置かれていました。レビ記24章5-9節による

と、12のパンがあり、それぞれイスラエルの12部族を代表していました。これらのパンは、細かくひいた酵母なしの小麦粉で焼かれ、毎週安息日に取り替えられ、古いパンは祭司だけが食べることができました。これらのパンは神の前に置かれていたため「供えのパン」とも呼ばれました。

聖所には金の香壇もありました。出エジプト記30章6節では、この香壇が「あかしの箱をおおう垂れ幕の手前」に置かれていたと説明されています。レビ記16章12-13節では、贖罪の日に大祭司がこの香壇から燃えた香をカーテンの向こう側にある至聖所に持ち込み、その煙が贖いの座を覆い、自分が死なないようにすると説明されています。これらの事実のため、著者は金の香壇の祭壇を至聖所と関連付けています。

契約の箱の中には、出エジプト記16章32-34節で述べられているマナの壺がありましたが、ここで著者は、神からのインスピレーションを受けて、金の壺であったと詳細を付け加えています。また、そこにはアロンの杖もありました。神が民数記17章1-11節で記録したように、その杖からは芽が出て、アーモンドを実らせたことで、反逆したイスラエルの前でのモーセの指導力が証明されました。また、その中には契約の石の板もありました。これは出エジプト記25章16節で、神がモーセに、この最も神聖な場所に納めるよう命じたものでした。



契約の箱（イメージ）

ソロモンの時代までに、金の壺とアロンの杖は箱からなくなっていました（1列王記8:9）。おそらく、ペリシテ人がそれを奪った時に失われたのでしょう（1サムエル記4:10,11）。後に、石板と契約の箱そのものも姿を消しました。おそらく、ネブカドネザル王が神殿に火を放った時に失われたのでしょう（2列王記25:8,9）。

聖なる天幕と特別な物品については、もっと多くのことが言えたでしょうが、この簡単な言及で十分でした。著者はこれらの地上的な型ではなく、よりすぐれた大祭司と、地上的な天幕と物品によって指し示された、特別な犠牲を強調したからです。

ヘブル人への手紙 9 章 6-10 節

6 さて、これらの物が以上のように整えられた上で、前の幕屋には、祭司たちがいつも入って礼拝を行うのですが、

7 第二の幕屋には、大祭司だけが年に一度だけ入ります。そのとき、血を携えずに入るようなことはありません。その血は、自分のために、また、民が知らずに犯した罪のためにささげるものです。

8 これによって聖霊は次のことを示しておられます。すなわち、前の幕屋が存続しているかぎり、まことの聖所への道は、まだ明らかにされていないということです。

9 この幕屋はその当時のための比喻です。それに従って、ささげ物といけにえとがささげられますが、それらは礼拝する者の良心を完全にすることはできません。

10 それらは、ただ食物と飲み物と種々の洗いに關するもので、新しい秩序の立てられる時まで課せられた、からだに關する規定にすぎないからです。

キリストのすぐれた犠牲を念頭に置いて、著者は幕屋で行われた儀式について詳述しています。最初の部屋には、一般の祭司たちが定期的に入っていました。彼らは毎日2回、朝と夕方に金の香壇で香を捧げるために入り、同時に油のランプの手入れをしていました。また、彼らの務めには、安息日ごとに聖なるパンを取り替えることも含まれていました（レビ記 24:5-8）。ここでも、すでに制限が見られます。民衆ではなく、祭司だけが外のカーテンを通して幕屋の最初の部屋に入ることができました。

著者は続いて、特別な部屋である至聖所での儀式に關連して、さらに厳しい制限があることを明らかにします。その部屋には、年に一度だけ、しかも大祭司だけが必ず血を持って入ることが許されました。著者は、イスラエルの宗教暦の中で最も重要な日である贖罪の日に言及しています。その日には、最も重要な犠牲が捧げられました。もし著者が、キリストの犠牲がその日の大祭司の犠牲よりも優れていることを示せるなら、その主張は強固なものになります。

ヘブル人への手紙 5 章 2-3 節では、大祭司がまず自分の罪のために犠牲の血を持って至聖所に入り、その後で民が知らずに犯した罪のために血を持って再び入る様子が描かれています。この神聖な場所に血なしで入ることは、大祭司にとっても死を意味していました。

これらすべての制限、すべての血、そして幕屋そのものの構造には、深い宗教的な真理が含まれていました。聖霊すなわち神の真理の啓示者は、罪のために人間が神聖な神に近づくことができないこと、そして神に近づくには仲介者が必要であり、その仲介者は犠牲の血を持ってのみ神に近づくことができることを示していました。この幕屋の存在自体が、罪深い人間にとって、本来、天国における神の至聖所へ入ることが不可能であることを象徴していました。この背景を考えると、キリストが十字架にかかった際に神殿の幕が裂けたことがどれほど重要であるかが分かります。

幕屋の入り口の制限や終わりのない儀式は、他のことも示していました。「その当時」、つまり旧約時代において、幕屋の儀式は外面的な清めしか行えませんでした。「その当時」には、著者やその読者が生きていた移行期（紀元 70 年の神殿の破壊まで）も含まれているかもしれません。その頃、儀式的な法律は自主的に守られていましたが、繰り返される「ささげ物といけにえ」（8:3）は、礼拝者の本当の必要を満たすことはできませんでした。それらは外面的に儀式的に清めることはできましたが、礼拝者の良心までも清めることはできませんでした。

どの食べ物や飲み物が使えるか、どの儀式的な洗浄が必要かについての厳しい規則のすべては、「からだに関する」外面的なもの、つまり肉体的なものに過ぎませんでした。それらは悩める罪人の身体にしか適用されないもので、良心には適用されず、「新しい秩序の時」が来るまでのものでした。それらの規則は、霊的な真理をあらかじめ示しており、その意味においては価値がありました。それらは優れたささげ物によって罪人の心を完全に清める、偉大な大祭司の来臨を示す影として役立ちました。しかし、今や「新しい秩序の立てられる時」が到来したのです。キリストがその降誕と十字架によって栄光に満ちた新約時代を切り拓いた今、象徴的な幕屋や外面的な規則が何の役に立つのでしょうか？

へブル人への手紙 9 章 11-14 節

11 しかしキリストは、すでに成就したすばらしい事がらの大祭司として来られ、手で造った物でない、言い替えば、この造られた物とは違った、さらに偉大な、さらに完全な幕屋を通り、

12 また、やぎと子牛との血によってではなく、ご自分の血によって、ただ一度、まことの聖所に入り、永遠の贖いを成し遂げられたのです。

13 もし、やぎと雄牛の血、また雌牛の灰を汚れた人々に注ぎかけると、それが聖めの働きをして肉体をきよいものにするのであれば、

14 まして、キリストが傷のないご自身を、とこしえの御霊によって神におささげになったその血は、どんなにか私たちの良心をきよめて死んだ行いから離れさせ、生ける神に仕える者とするでしょう。

ここで対比が登場します。しかもその対比は鮮明です。まず、著者はキリストが大祭司として仕える幕屋の優位性を示します。それは人間の「手で造った物でない」と言われます。つまり地上の材料で構築されたユダヤの幕屋とは異なり、「造られた物とは違った」ものであり、天と地のように神の創造の手から生まれたものではありません。それは永遠の天国であり、永遠の神が住んでおられる場所です。著者がこれを「さらに偉大な、さらに完全な幕屋」と表現しているのも当然です。

キリストは「すでに成就したすばらしい事からの大祭司」として、永遠の神の臨在の中に住んでおられます。彼の称号である「キリスト」つまり油注がれた者という意味の呼び名は、彼の職務を思い出させるために使用されています。キリストは大祭司としての役割を果たし、私たちのために「良いもの」を確保するために地上に来られました。十字架上で彼の犠牲的な働きのおかげで、救いとそれに付随するすべての良い祝福がすでに私たちに与えられているのです。何という対比でしょう。私たちの大祭司は天の幕屋で仕えておられるのです。

次の対比もまた鮮明です。彼が捧げたささげ物を見てください。確かに、それはイスラエルの大祭司のように「血」でありました。レビ記 17 章 11 節が示すように、血は神が罪に対して死を要求することを鮮明に思い起こさせるものでした。しかし、キリストはヤギや子牛の血ではなく、ご自身の血を捧げました。それは、まことの神でありまことの人である尊いイエスの血であり、聖なるものでした。したがって、彼は、大祭司のように毎年その血を持って来る必要はありませんでした。イエスは「ただ一度」のささげ物を捧げ、それによって「永遠の贖い」を達成しました。贖い（あがない）とは、代価を支払って解放することを意味します。キリストは天国でご自身の血による贖いを永遠に指し示すことによって、私たちをすべての罪と罪悪感から解放してくださいました。

ささげ物の対比は、その効果を指摘することによってさらに際立ちます。ヤギや雄牛の血は、儀式的に汚れた人々に対する外面的な清めを提供しました。ここで言及されている「雌牛の灰を汚れた人々に注ぎかける」行為は、その限界を特に示しています。民数記 19 章では、死体や人骨、墓との接触によって汚れた人々を清める行為として、神は雌牛の灰を水に混ぜて振りかけるように規定しています。ここでは外面的な汚れが関わっていたため、外面的な清めが提供されました。しかし、その効果はそれだけに過ぎなかったのです！こうした生き物の犠牲を伴う儀式は、人間にとってさらに深刻な、魂の罪の汚れを取り除くことはできませんでした。

ここで著者は、キリストのささげ物をもっと詳しく見るように促します。祭司たちが捧げた動物たちは、ものを言うことができず、何が起きているのかさえ知りませんでした。一方、キリストはすべてを承知の上でご自身を喜んで捧げました。イエスの側には「永遠の霊」がついていて、この恐ろしい任務の間、イエスを導き、励ましていました。それは神が預言していた通りでした。イザヤ書 42 章 1 節で、神はご自身に喜んで従うしもべについて「わたしは彼の上にわたしの霊を授ける」と言われました。

キリストの犠牲は自発的であるだけでなく、「傷のない」ものでした。旧約の犠牲の動物がすべての身体的欠陥がないことを神が要求したのは、神の完全無欠で罪のない御子が、十字架の祭壇にご自身を捧げることを指し示していたからです。

そして、この完全な犠牲の結果はどうだったのでしょうか？キリストの血は外面的な清め以上の内面的な変化をもたらしました。それはつまり「私たちの良心をきよめて死んだ行いから離れさせ、生ける神に仕える者とする」のです。自然の人間のすべての行いは、霊的な死の中で行われ、永遠の死へと導くことしかできません。そこに良心の平安はなく、まるで心は無価値な行いでできた金属たわしで、狂ったように繰り返しこすっているようなものです。しかし私たちが、聖霊に導かれて天の犠牲に目を向け、「彼への懲らしめが私たちに平安をもたらした」（イザヤ 53:5）と信じるとき、心が洗い流されるような平安がもたらされます。その後、日常生活の中で、生ける神への愛に満ちた奉仕が自然と続くのです。

へブル人への手紙 9 章 15–22 節

15 こういうわけで、キリストは新しい契約の仲介者です。それは、初めの契約のときの違反を贖うための死が実現したので、召された者たちが永遠の資産の約束を受けられることができるためなのです。

16 遺言には、遺言者の死亡証明が必要です。

17 遺言は、人が死んだとき初めて有効になるのであって、遺言者が生きている間は、決して効力はありません。

18 したがって、初めの契約も血なしに成立したわけではありません。

19 モーセは、律法に従ってすべての戒めを民全体に語って後、水と赤い色の羊の毛とヒソプとのほかに、子牛とやぎの血を取って、契約の書自体にも民の全体にも注ぎかけ、

20 「これは神があなたがたに対して立てられた契約の血である」と言いました。

21 また彼は、幕屋と礼拝のすべての器具にも同様に血を注ぎかけました。

22 それで、律法によれば、すべてのものは血によってきよめられる、と言ってよいでしょう。また、血を注ぎ出すことがなければ、罪の赦しはないのです。

これでキリストの犠牲がどれほど絶対的に必要であったかが分かります。もしそれがなければ、新しい契約は成立せず、誰も永遠の相続を受けることができませんでした。それが、著者が次に述べている考えです。「こういうわけで、キリストは新しい契約の仲介者です。」と彼は書いています。「それは、初めの契約のときの違反を贖うための死が実現したので、召された者たちが永遠の資産の約束を受けることができるためなのです。」著者は、キリストの贖いの効果をモーセの契約の下で生き、その契約に違反した者たちに限定しているわけではありません。キリストの死は、過去、現在、未来のすべての罪人の罪を赦し、救いをもたらしています。

しかし著者は、キリストが、旧約の律法の契約にはできなかったことを成し遂げた点を指摘しています。その犠牲的な死によって、キリストは新しい恵みの契約を仲介したのです。つまりキリストは罪のない神と罪深い人間の中に立ち、神の救いの契約を有効にしました。今や、神の福音の恵みによって「召された者たち」は「永遠の資産の約束を受けることができる」のです。人々がカルバリ丘での出来事の前に生きていたか、後に生きていたかは問題ではありません。神の遺言に名を連ねた相続人として、彼らはキリストの完全な犠牲によって確実にされた、永遠の相続を受けるのです。

地上の遺言と相続では、常に死が必要です。一般的な原則として、人が生きている限り、その遺言書の内容は有効になりません。遺言を作成し、それを何年も安全に保管していても、当人が死ぬまでそれは有効にはなりません。そして、遺言者の死の証拠が提示されたときに、相続人はその相続を受けます。

著者の主張は明確です。キリストは、新しい救いの契約の遺言の作成者であり仲介者でもあります。「万物の相続者」(1:2)であるキリストは、永遠の相続を手にし、それを私たちに遺贈しています。仲介者として、キリストは十字架に立ち、その死によってこの祝福された遺言を有効にしました。十字架が誰かにとって恐怖の対象であるべきでしょうか？血の神学が私たちに不快にさせるべきでしょうか？そもそも、キリストの十字架とその血がなければ、私たちは何も相続するものがないのです。

著者が手紙を書いているユダヤ人キリスト者たちは、キリストの死の必要性について疑問を抱いていたようです。著者はすでに、遺言と相続には死が伴うことを彼らに思い出させることで答えています。ここで著者は、彼らに旧約の契約を振り返るよう促しています。彼らはモーセの契約がどれほど多くの血を必要としていたかを思い出せなかったのでしょうか？彼らは「初めの契約も血なしに成立したではありません」という事実を忘れてしまったのでしょうか？モーセの契約は、初めから犠牲の血とともに成り立っていたのです。

これを示すために、著者は出エジプト記 24 章 1-8 節に遡り、聖霊の導きによっていくつかの詳細を追加しています。神がシナイ山で古い契約を与えたとき、モーセはまずそのすべての要求を人々に宣言し、全員が理解できるようにしました。そして彼は犠牲の血を水で延ばし、ヒソプという植物に赤い羊毛を巻きつけたスポンジを使って、それを「契約の書自体にも民の全体にも」振りかけました。「これは神があなたがたに対して立てられた契約の血である」とモーセは彼らに告げました。血が巻物に振りかかることで、モーセの契約は有効になりました。そしてその血が人々に振りかかることで、彼らには契約の規則を守る義務が生まれ、その従順に対する祝福が約束されました。

後に幕屋が建てられたとき、再び血が使われました。モーセは幕屋と宗教儀式に用いる神聖な器具の両方に血を振りかけました。出エジプト記 40 章 9 節は、そそぎの油が振りかけられたことが記されていますが、神の靈感を受けたヘブル書の著者は、さらに血も使われたという詳細を補足しています。この象徴は重要です。清めには血が必要だったのです。「律法によれば、すべてのものは血によってきよめられる、と言ってよいでしょう。」このことは、ユダヤ人読者が旧約聖書からよく知っていたはずですが。モーセの律法は、罪の捧げ物として血なまぐさい犠牲を要求していました。レビ記 5 章 11 節に記されているように、非常に貧しい人だけが血の代わりに、4 ピント（約 2 リットル）の小麦粉を持ってくることができました。

強調するために、著者はこの考えを繰り返します。「血を注ぎ出すことがなければ、罪の赦しはないのです。」モーセの契約に関わるすべての動物の血は、イスラエルが罪深く、その触れるすべてのものが清めを必要としていたことを思い出させました。しかし、それ以上に重要なのは、すべての血が最大の犠牲、つまり神の御子の血が流されることを指し示していたということです。これだけが、罪の汚れを取り除くことができるのです。クリスチャンがこの血について歌うことを、どれほど愛していることでしょうか！

ヘブル人への手紙 9 章 23—28 節

23 ですから、天にあるものにかたどったものは、これらのものによってきよめられる必要がありました。しかし天にあるもの自体は、これよりもさらにすぐれたいけにえで、きよめられなければなりません。

24 キリストは、本物の模型にすぎない、手で造った聖所に入られたのではなく、天そのものに入られたのです。そして、今、私たちのために神の御前に現れてくださるのです。

25 それも、年ごとに自分の血でない血を携えて聖所に入る大祭司とは違って、キリストは、ご自分を幾度もささげることにはなさいません。

26 もしそうでなかったら、世の初めから幾度も苦難を受けなければならなかったでしょう。しかしキリストは、ただ一度、今の世の終わりに、ご自身をいけにえとして罪を取り除くために、来られたのです。

27 そして、人間には、一度死ぬことと死後にさばきを受けることが定まっているように、

28 キリストも、多くの人の罪を負うために一度、ご自身をささげられましたが、二度目は、罪を負うためではなく、彼を待ち望んでいる人々の救いのために来られるのです。

再び対比が登場します。その対比がいかにか鮮明であるかに注目してください。地上のもの、例えば幕屋や器具が犠牲によって清めを必要としたならば、これらが模倣していた天上のものはどうでしょうか？動物の血よりも「これよりもさらにすぐれたいけにえ」を必要としないでしょうか？この節は多くの注釈者にとって悩みの種となってきました。「すぐれたいけにえ」に複数形（訳注：better sacrifices）が使われていることが、一部の人々にとって問題になったのです。なぜなら、これが明らかにキリストの一度きりの犠牲を指しているはずだからです。しかし、単純な説明としては、この複数形は、多数の犠牲と一つの犠牲を対比しているのではなく、劣った犠牲と優れた犠牲を一般的な形式で対比していると言えます。

さらに問題となるのは、「天にあるもの」の清めに関する疑問です。これらの天にあるものとは何であり、どのような清めが意味されているのでしょうか？神が住む天国は、神のように完全であり、清めを必要としません。しかし、罪深い人間が天国に入る際には、清めが必要です。

キリストの清めの血は、罪人が「天にあるもの」に入り、それを享受できるように整えつつ、汚すことがないようにします。キリストの血は、罪人が天国に導かれた後も、彼らの罪とその結果から天国を守り続けます。信者が、神の天上の臨在に入るとは、地上で信仰に導かれた瞬間からすでに始まっています。キリストの十字架は、天国の入り口に不変の印を押しています。罪人が、神との祝福された交わりを許可されるのは、ただキリストの犠牲によってのみです。罪が依然としてまわりつき、信者が罪に苦しむときにも、神との交わりを守るのは、やはりキリストの犠牲だけです。

天国でキリストは「私たちのために神の御前に現れてくださるのです」。キリストは、金で覆われた箱の前で、人間が作った聖所の香煙に包まれながら立つ地上の祭司ではありません。私たちの大祭司は、神の御前に立って神を見上げるのではなく、人間の罪のために受け入れられたささげ物として、神に見上げられます。そこで彼は

「私たちのために」嘆願し、その願いはいつも許可されます。地上で流されたキリストの血は、すでに私たちの罰の代価を支払い、神の無罪判決を勝ち取りました。この完璧な犠牲を繰り返す必要がどこにあるのでしょうか？

ユダヤ教の大祭司たちは、一度だけ犠牲を捧げることに満足していたかもしれませんが、彼らの犠牲は繰り返される必要がありました。キリストという大祭司の犠牲は「一度きりで」アダムとエバから始まる罪をすべて取り除きました。彼が「今の世の終わり」に現れたとき、すべての歴史が一点に収束しました。キリストの犠牲を伴う十字架に、すべての過去の時代が向かい、十字架によって現在と未来のすべてが導かれます。

ヘブル人キリスト者たちは、この栄光に満ちた新約時代に生きていました。彼らは、キリストが罪を取り除き、その罪悪感を消し去り、罪の支配を打ち破ったことを知っていました。そんな救い主から離れることを、考えることさえできるでしょうか？キリストが成し遂げたことを信じることは、一日中喜ぶことを意味しませんか？

著者は、もう一度別の視点からキリストの完璧な犠牲を提示します。「人間には、一度死ぬこと」が定められています。これは人がコントロールできない人生の状況であり、忘れようとしても忘れることはできません。そして死は重大です。なぜなら、その後に裁きがあるからです。死の瞬間に神の判決が下され、魂は天国か地獄のどちらかに行きます。そして最後の日には、その魂に体が伴います。ここで私たちの偉大な大祭司を考えてみてください。彼はただ死んだのではなく、犠牲にされたのです。しかしそれは一度だけであり、それで神の裁きを十分に満たしました。その犠牲によって、著者が「多くの」と表現するすべての人々の罪が取り消されました。

しかし、カルバリ丘でのキリストの十字架の死は、救いの物語の終わりではありません。また昇天した大祭司がその民を代表して立つ天の至聖所の光景で終わりでもありません。最後の章はまだ書かれていません。

キリストが地上に戻るとき、もはや私たちが罪について心配することはありません。キリストは不信者たちの罪について何か言うかもしれませんが、私たちはその立場に立つことを決して望まないでしょう。しかし、「彼を待ち望んでいる人々」、つまりその偉大な終わりの日を熱心に待ち望んでいる者たちにとって、キリストの帰還は救いの完全な享受をもたらします。1ヨハネ3章2節の使徒ヨハネの言葉が、この考えを反映しています。「愛する者たち。私たちは、今すでに神の子どもです。後の状態はまだ明らかにされていません。しかし、キリストが現れたなら、私たちはキリストに似た者となることがわかっています。なぜならそのとき、私たちはキリストのありのままの姿を見るからです。」私たちはキリストの再臨をどれほど強く待ち望んでいることでしょうか！

ヘブル人への手紙 10 章 1-4 節

- 1 律法には、後に来るすばらしいものの影はあっても、その実物はないのですから、律法は、年ごとに絶えずささげられる同じいけにえによって神に近づいて来る人々を、完全にすることができないのです。
- 2 もしそれができたのであったら、礼拝する人々は、一度きよめられた者として、もはや罪を意識しなかったはずであり、したがって、ささげ物をするのは、やんだはずです。
- 3 ところがかえって、これらのささげ物によって、罪が年ごとに思い出されるのです。
- 4 雄牛とやぎの血は、罪を除くことができません。

ここで内容が少し繰り返しになっていると感じるかもしれませんが、それは著者の意図です！この手紙の前半全体を通して、テーマは「私たちの信じるキリストがいかにか素晴らしい宝であるか」というものでした。これ以上に栄光に満ちたテーマはなく、読者がこの真理を完全に理解することが著者の目的でした。そのため、著者がこの教義的な部分を締めくくる際に、再びキリストの優越性とその完全な犠牲について繰り返し強調しています。著者が前半部分の短い各セクションを終える際に、その犠牲に言及していることに注目してください。

著者は話を旧約の律法に戻し、その中の犠牲制度に関する命令を再び取り上げ、読者にその不十分さを思い出させます。彼はその律法が「後に来るすばらしいものの影」に過ぎないと退けています。影は「実物」ではなく、ただ漠然とした予告にすぎません。動物の犠牲は、キリストの本当の犠牲がもたらす救いの「すばらしいもの」を暗示するにすぎませんでした。今ここでキリストから影に戻ることは、本物の人物よりも写真を好むようなものです。それはなんとという侮辱でしょうか！

それらの犠牲はただの影だったため、「年ごとに絶えずささげられる」必要がありました。何世紀にもわたり、贖罪の日の儀式は毎年同じでした。それにもかかわらず、これらの繰り返しは罪の赦しを完全にもたらしうことはできませんでした。動物の犠牲は誰も「完全」にすることができず、罪の赦しと神との交わりという目標に到達させることはできなかったのです。もしそれらの犠牲が本当に効果的であったなら、なぜ絶え間なく繰り返す必要があったのでしょうか？例えば手術であれば、成功すれば何度も繰り返す必要はありません。同様に、罪悪感に対する清めが達成されるなら、繰り返しの清めは不要のはずです。

繰り返される犠牲は、罪人の良心を和らげるところか、毎年それを鋭く刺激していました。罪人の罪悪感を消し去るのではなく、毎年犠牲がそれを強調したのです。結論は明白です。「雄牛とやぎの血は、罪を除くことができません。」というこ

す。「除く」とは、何かを完全に取り去り、それがもう存在しないようにすることを意味します。それこそが、罪に対して人間が必要としていたことであり、動物の血では達成できなかったことです。動物の血で罪を取り除こうとするのは、まるでスプーン一杯の砂で月まで届く山を造ろうとするような無駄な試みです。著者の強い主張を見過ごすことができるでしょうか？「旧約の犠牲を振り返らないでください」と彼は言っているのです。「それらは、罪のほんの一片の罪悪感さえも取り除くことができず、ただキリストを指し示していました。キリストの完全な犠牲がそれをすべて取り除くのです。だから、キリストを見なさい!」と。

ヘブル人への手紙 10 章 5-10 節

5 ですから、キリストは、この世界に来て、こう言われるのです。「あなたは、いけにえやささげ物を望まないで、わたしのために、からだを造ってくださいました。

6 あなたは全焼のいけにえと罪のためのいけにえとで満足されませんでした。

7 そこでわたしは言いました。『さあ、わたしは来ました。聖書のある巻に、わたしについてしるされているとおり、神よ、あなたのみこころを行うために。』」

8 すなわち、初めには、「あなたは、いけにえとやささげ物、全焼のいけにえと罪のためのいけにえ(すなわち、律法に従ってささげられる、いろいろの物)を望まず、またそれらで満足されませんでした」と言い、

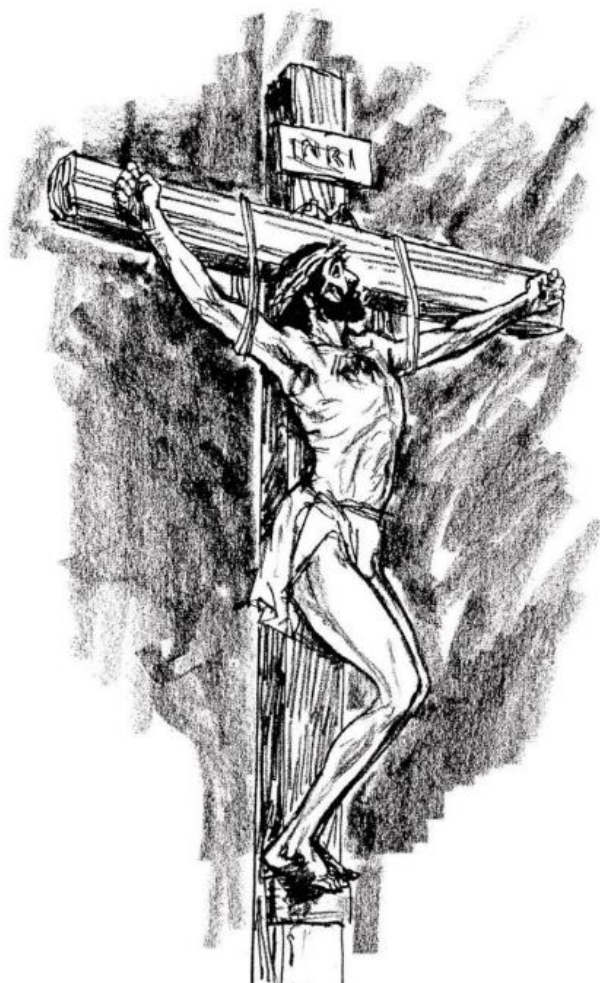
9 また、「さあ、わたしはあなたのみこころを行うために来ました」と言われたのです。後者が立てられるために、前者が廃止されるのです。

10 このみこころに従って、イエス・キリストのからだは、ただ一度だけささげられたことにより、私たちは聖なるものとされているのです。

再び、著者が旧約聖書を使って自らの主張を証明しているのがわかります。そして、再び、著者が聖霊の導きによって旧約聖書の中にキリストを見出していることに驚かされます。今回は、詩篇 40 章 6-8 節を引用しています。この箇所は、新約聖書ではここでのみ引用されています。著者はダビデの言葉の中に、メシアであり、偉大なダビデよりさらに偉大な御子である方が語っているのを聞きました。これは、御子が父なる神と交わした美しい対話です。

「キリストは、この世界に来て」とは、彼の受肉全体を指しており、その期間中のキリストの御父に対する常に変わらない態度を描写しています。強調のために繰り返して、メシアは御父が何を望まなかったかを明確に指摘しています。動物の犠牲や肉と飲み物の供え物、人々が感謝のために幕屋でささげた自発的な「焼き尽くすささげ物」や、義務として定められた「罪のささげ物」、そのどれもが御父が望んだもので

はありませんでした。律法で命じられた動物の流血や動物の死体の山は、神が本当に望んだものではなかったのです。また、神は、もしそれらのささげ物が、心からの従順を伴っていない場合、つまりただ外面的に繰り返されるだけのささげ物であることにも満足できませんでした。神が望んだのは、それらすべての旧約の犠牲が指し示していたもの、すなわち神の御子の自発的な犠牲でした。



完了した

「あなたは…わたしのために、からだを造ってくださいました。」という言葉は、このキリストの自発的な犠牲を指しています。NIV 聖書の脚注では、著者が詩篇 40 章 6 節の七十人訳（訳注：七十人訳聖書は紀元前 3～1 世紀にヘブル語旧約聖書をギリシャ語に翻訳したもの。当時広く使われていたギリシャ語を用いて旧約聖書を理解するための重要な資料となった。）を好んで引用していることが示されています。ヘブル語では「あなたは私の耳を開いた」と書かれており、これは神の御心に従う耳が開かれたことを指しているのですが、七十人訳では神の御心に従う体が備えられたとい

う意味に意識されています。しかし、どのように翻訳しても、考えは同じです。メシアは父の御心に愛情深く、従順に、完璧に従い、「さあ、わたしは来ました。聖書のある巻に、わたしについてしるされているとおり、神よ、あなたのみこころを行うために。」と言います。旧約聖書の巻物のどこを開いても、御子が父の御心を全うすることを喜んで行うという言及が見つかります。神の御心は、御子が罪のために完全かつ最終的な犠牲を捧げることであり、御子の御心もそれに完全に一致していました。私たちの受難節の賛美歌の一つには、この天上的な対話が美しく表現されています。

「行きなさい わが子よ。」
と父なる神は言った。
「罪の恐れと罪定めから
わたしの子どもたちを解き放て。
怒りとむちは耐え難いが
その苦しみによって
彼らを救いへと導くのだ。」
み子は言った。「はい、父よ、喜んで。
あなたの命じることを受け入れます。
わたしの意志を、あなたのみ旨に合わせ、
あなたの望むことを成し遂げます。」
ああ 驚くべき愛よ。
父なる神が御子をささげられた。
わたしたちの救いのために
ああ 救いの強き愛よ。

(*A Lamb Goes Uncomplaining Forth* CW 100 番 2,3 節)

これらのユダヤ人キリスト者たちが、この重要なポイントを見逃すことがあり得たでしょうか？ダビデの詩篇からのこの引用と、その中に記された天上の対話は、キリストが「後者が立てられるために、前者が廃止されるのです。」という事実を強調しています。レビ的な犠牲は廃止されました。父の御心によって、御子が同意したキリストの犠牲が、それに取って代わったのです。廃止されたものに戻ることや、それを同等に扱うことは、永遠に愚かなことです。罪のためのキリストの犠牲を受け入れなければ、他に救いの道はありません。

著者は再びキリストの犠牲とその効果に言及しながら、この段落を締めくくります。再度キリストが行うために来た神の「みこころ」に言及し、「イエス・キリストのからだは、ただ一度だけささげられた」と描写しています。以前、著者はキリストの犠牲を「ご自身」と「その血」と表現していましたが、ここでは「イエス・キリストのからだ」と言っています。なぜなら、同じ「からだ」という言葉が5節で使われており、また流血が犠牲において体に関わっていたからです。

へブル書の7章27節にもあるように、彼はこの自発的な犠牲を「ただ一度だけ」と説明しています。これはすべての時代に有効です。もう繰り返す必要はなく、むしろ繰り返すことはできません。その祝福された結果はどのようなものでしょうか？キリストが「ただ一度だけささげられたことにより、私たちは聖なるものとされているのです。」と彼は言います。神が信仰に導く者たちは、神の目には汚れがありません。彼らには罪の痕跡もなく、非難の重荷も全くありません。彼らは新約聖書が語る「聖なるもの」つまり聖徒たちです。しかし、著者は読者に「そのような高い地位は、キリストの犠牲によってのみ得られる」ということを思い出させます。そして「キリストを見なさい！」と強調しています。

へブル人への手紙 10章 11-14節

11 また、すべて祭司は毎日立って礼拝の務めをなし、同じいけにえをくり返しささげますが、それらは決して罪を除き去ることができません。

12 しかし、キリストは、罪のために一つの永遠のいけにえをささげて後、神の右の座に着き、

13 それからは、その敵がご自分の足台となるのを待っておられるのです。

14 キリストは聖なるものとされる人々を、一つのささげ物によって、永遠に全うされたのです。

著者は再び、キリストの完璧な罪のための犠牲の最終性を強調しています。旧約時代の契約には、罪を解決できず、良心を癒すことのできない終わりのない犠牲の連鎖がありました。大祭司が毎年贖罪の日と同じ捧げ物を捧げなければならなかったのと同様に、一般の祭司たちも日々同じことを繰り返していました。民数記28章3-8節が示すように、毎朝と毎夕、その日に割り当てられた一般の祭司は、一歳の傷のない雄羊を1/10エパの細かい小麦粉と1/4ヒンのオリーブ油を混ぜた穀物の供え物と、1/4ヒンのぶどう酒を加えた飲み物の供え物と共に捧げなければなりません。毎日、祭司は同じ供え物を捧げ続けました。これほどまでに、これらの犠牲が「決して罪を除き去ることができません」という事実を明確に示すものはないでしょう。動物の血と穀物の供え物は、罪人を包み込んでいた罪の罪悪感を取り去ることはできなかったのです。

イスラエルの祭司たちは、同じ犠牲を繰り返し捧げながら、罪を取り除くことができず、常に働いていました。それに対して、私たちの大祭司は「罪のために一つの永遠のいけにえをささげて後」、その完璧な犠牲によって「神の右の座に着き」しました。著者はこれで一巡しました。1章3節で彼はすでに、「(御子は) 罪のきよめを

成し遂げて、すぐれて高い所の大能者の右の座に着かれました。」と書いています。彼は、この栄光の情景を繰り返し述べているのです。

私たちの大祭司は、天国で全ての栄光と栄誉をたずさえて、十字架の祭壇に捧げられた完璧な犠牲を指し示しています。そして、私たちが罪を犯したときにその犠牲を根拠に弁護してください。ローマ 8 章 34 節では、この順序が示されています。

「罪に定めようとするのはだれですか。死んでくださった方、いや、よみがえられた方であるキリスト・イエスが、神の右の座に着き、私たちのためにとりなして下さるのです。」天に昇られた救い主が私たちの弁護士である限り、天国の法廷における信者の立場は永遠に安泰です。

しかし、主イエス・キリストの敵には警告が必要です。主は、ご自身に反対する者すべてが「ご自分の足台となる」時を待っておられます。その最後の日には、ピリピ人への手紙 2 章 10-11 節に記されているように、すべての膝が主の前にひれ伏し、すべての舌がイエスを主と告白するでしょう。イエスが敵の群衆の中に立っておられる時に、その栄光に圧倒され、唯一の救い主を拒絶したという恐ろしい自覚に震え上がることを誰が望むでしょうか？

再び著者は、「キリストは聖なるものとされる人々を、一つのささげ物によって、永遠に全うされたのです。」と強調しています。「全うされた」つまり、完全にした、という言葉は彼は今回も使っていますが、これは著者のお気に入りの言葉の一つです。2 章 10 節、5 章 9 節、10 章 14 節、11 章 40 節、12 章 23 節では動詞が使われています。6 章 1 節、7 章 11 節、12 章 2 節では、成熟、完成、という言葉を含んだ名詞が使われ、9 章 11 節では形容詞が使われていますが、これらはすべて、完結の概念に関連しています。この節には、人間が神の思いに沿った完全性に到達する、という考えが込められています。平和とゆるし、調和と天の御国が、人間に対する神の目的でした。信者、あるいは著者が「聖なるものとされる」と呼ぶ人々は、この祝福された目標に到達しました。「聖なるものとされる」という現在形は、聖霊が福音を通じて、次々に人々を罪から解放し、神に仕えるよう導いておられる様子を表しています。「しかし」と、著者は再び読者に注意を促します。「聖なるものとされる目標は、キリストの犠牲によってのみ達成されるのです。イエスを見なさい！」と。

へブル人への手紙 10 章 15-18 節

15 聖霊も私たちに次のように言って、あかしされます。

16 「それらの日の後、わたしが、彼らと結ぼうとしている契約は、これであると、主は言われる。わたしは、わたしの律法を彼らの心に置き、彼らの思いに書きつける。」またこう言われます。

17 「わたしは、もはや決して彼らの罪と不法とを思い出すことはしない。」

18 これらのことが赦されるところでは、罪のためのささげ物はもはや無用です。

キリストの完璧な犠牲の最終性を証言する別の証人は、聖霊です。著者は「聖霊も私たちに次のように言って、あかしされます。」と書いています。「あかしされます」という現在形に注目してください。これは、聖霊が過去に書かれたものの著者であるだけでなく、聖書を通じて現在も証言し続けていることを思い出させます。エレミヤ書 31 章からの引用も同様です。著者は 8 章で、聖霊の導きのもと、エレミヤ書 31 章 31 節から 34 節を引用して、神が古い契約を新しいものに置き換えることを述べました。ここでは、33 節と 34 節だけが、短縮されて修正された形で引用されており、新しい契約における主要なテーマが、罪の完全なゆるしであることを示しています。新しい契約には、人間の内面的な変化が含まれています。人の心は再生され、神の律法を知って、それに自発的に従うようになるのです。

しかし何よりも、この新しい契約では、人間の神に対する罪と律法違反が完全に取り除かれます。「わたしは、もはや決して彼らの罪と不法とを思い出すことはしない。」と神は約束されました。神の聖なる正義は、ある罪を覚えていたり、別の罪を忘れていたりすることはありません。神の正義はすべての罪を見ており、そのすべてが罰せられることを要求します。そしてそれこそが、キリストを通して、神の愛と慈しみによって行われたことなのです。キリストの体が痛めつけられ、キリストの血が十字架で流されたことで、すべての人間の罪の代価は支払われました。これこそが、神が私たちの罪を忘れてくださる理由です。聖霊は、旧約聖書でそれをすでに証言しており、新約聖書でも絶えず証言し続けています。

再び、キリストの完璧な犠牲に対する結論的な言及があります。「これらのことが赦されるところでは、罪のためのささげ物はもはや無用です。」神が私たちの罪を完全に取り去り、キリストの完全な犠牲のゆえにそれがゆるされ、忘れ去られたとき、罪のためのさらなる犠牲について話す必要があるのでしょうか？むしろ、私たちが話すべきことは、完全な犠牲への感謝の心や、神への感謝と賛美を表す生活、そしてその喜びを他の人々と分かち合う努力です。私たちは、著者や彼の最初の読者たちと同様に、次の標語を心に刻むべきです。「私たちの救いのためには、他に何も必要ない。キリストこそが私たちの完璧な救い主。イエスを見つめよう。」

もし私たちが罪を自覚していないならば、ヘブル人への手紙のこの教義的な部分は、私たちにとってあまり意味を成さないでしょう。肩に重荷を感じない者は、救いを求めませんし、健康だと感じる者は医者を探しません。しかし、もし罪が私たちにとって現実であり、過去の罪の影が良心の中に残っているならば、夜、枕に頭を置いたとき、その日の出来事が最善を尽くしたにもかかわらず暗く思い出されるならば、もし自分の内面を見つめ、その罪に直面して恐れを感じるならば、ヘブル人への手紙

1章1節から10章18節までを深く学び進めることは、私たちにとって祝福された経験となるでしょう。まさにその時、「私たちには、キリストという至高の宝がある！」と実感することでしょう。

第二部

この至高の宝をどう扱うか (10:19-13:25)

確信をもって神に近づこう

ヘブル人への手紙 10章 19-21節

19 こういうわけですから、兄弟たち。私たちは、イエスの血によって、大胆にまことの聖所に入ることができるのです。

20 イエスはご自分の肉体という垂れ幕を通して、私たちのためにこの新しい生ける道を設けてくださったのです。

21 また、私たちには、神の家をつかさどる、この偉大な祭司があります。

ヘブル人への手紙の第一部で、著者は新約聖書における最も思慮深い神学者の一人であることを示しています。そして、続く第二部では、彼が人々に心を配る、有能な牧師であることをも示しています。第一部が豊かで深い教えに満ちていたのと同様に、ここから続く部分も活気にあふれ、力強い勧告を含んでいます。著者は読者に、霊的な富は所有するだけでなく、実際に活用すべきものであることを示そうとしています。キリストの優れた祭司職と彼の犠牲の完全性という偉大な真理は、単なる理論的なものではなく、日常生活の中で実際に行動に移す動機となります。

著者は豊かな勧告の基礎として、私たちがキリストにあって受けている祝福を簡潔に要約しています。彼は読者を「兄弟たち」と呼び、自分も彼らと同じ立場であることを強調して、訴えかけを強めています。彼は信者たちに向かって「私たちは、イエスの血によって、大胆にまことの聖所に入ることができるのです。」と言います。信者たちは、神の御前に自信を持って近づくことができます。

旧約の契約の下では、罪人は神の臨在を象徴する至聖所に近づくことは、とてもできませんでした。大祭司だけが、年に一度、恐れながらそこに入ることが許されていました。しかし、今では私たちはいつでも、恐れも震えもなく、天の御父に近づくこ

とができます。著者は「イエスの血によって」と私たちに思い出させます。それ以外の道はありません。イエスの血が私たちの罪のために支払われたことによって、天国への道が開かれ、その道は決して遮られることなく、誰でも自由に通ることができるのです。

もう一度その天国への道を見てください。それはイエスが十字架での死によって「設けてくださった」道です。そしてそれは「新しい生ける」道です。「新しい」という言葉は元々「新たに^{ほふ}屠られた」という意味を持ち、キリストの犠牲を表すのに非常に適しています。さらに、この言葉は「最近」という意味にもなり、ルターが「まるで昨日イエスが十字架で死んだかのように思える」と言ったように、これもまた適切です。この道は生きており、それを歩む者を命へと導きます。この道はイエスご自身であり、イエスが「わたしが道であり、真理であり、いのちなのです。わたしを通してでなければ、だれひとり父のみもとに来ることはありません。」とヨハネ 14 章 6 節で言われた通りです。

再び著者は、読者たちが戻りたくなる誘惑を感じていた旧約の契約と、彼らに大きな祝福をもたらした新しい契約との対比を示しています。読者たちは本当に、神の子としての生ける天国への道を放棄し、無力で効果のない動物の犠牲に戻りたいのでしょうか？本当に、神のご臨在から隔てられていた旧約の幕屋に戻りたいのでしょうか？一方、新しい契約では、キリストの身体という「幕」が、父なる神の聖なる御座に自由にアクセスできる道を開いているのです。

ここで著者は、キリストの身体を「幕」として描写しています。この「幕」というのは、かつて神と人間を隔てていたものを象徴しています。旧約では、大祭司が装飾された幕を通して至聖所に入ったように、私たちも、キリストが私たちの罪のために捧げた身体を通して、天国に入ることができるのです。

さらに、私たちはただ天国に入るだけでなく、そこには「偉大な祭司」がいます。この偉大な祭司とはキリストのことです。彼は「神の家」である信者の共同体におられます（3 章 6 節で見たように、「神の家」は信者の共同体を指します）。私たちの偉大な祭司であるキリストには、天国で「引退して座る椅子」はありません。彼は今も活動を続けておられます。つまり、キリストは私たちが誘惑と戦うときに力を与え、私たちが罪を犯すときに執り成し、神に近づこうとするときには、私たちを兄弟として紹介して下さるのです。

これらの三つの節で著者は、キリストにあって私たちが受けている比類のない祝福を簡潔に、美しくまとめています。そして、それらの祝福を最大限に活用するよう、私たちに強く勧めています。

へブル人への手紙 10 章 22-25 節

22 そのようなわけで、私たちは、心に血の注ぎを受けて邪悪な良心をきよめられ、からだをきよい水で洗われたのですから、全き信仰をもって、真心から神に近づこうではありませんか。

23 約束された方は真実な方ですから、私たちは動揺しないで、しっかりと希望を告白しようではありませんか。

24 また、互いに勧め合って、愛と善行を促すように注意し合おうではありませんか。

25 ある人々のように、いっしょに集まることをやめたりしないで、かえって励まし合い、かの日が近づいているのを見て、ますますそうしようではありませんか。

続いて3つの力強い勧告がなされます。最初のものは、信者と神に関するものです。「神に近づこうではありませんか。」と著者は促します。ギリシャ語の原文では、現在形を使っており、この「近づく」という行為が絶えず続けられるべきものであることを示しています。信者たちは、聖なる神に近づく特権を持っています。この特権は、キリストの血によって買い取られたものです。この特権をどう使うかは、信者がその信仰にどれだけの価値を置いているかを示します。人々が神に近づくとき、最も重要なのは「真心」です。神は私たちの肩書や外見ではなく、心の中身を見ておられます。

マタイの福音書15章8節で、キリストがパリサイ人に対して言った不満が私たちに当てはまらないようにしましょう。「この民は、口先ではわたしを敬うが、その心は、わたしから遠く離れている。」むしろ、マタイの福音書5章8節の言葉を思い出しましょう。「心のきよい者は幸いです。その人たちは神を見るから。」そのような心は「全き信仰をもって」神に近づきます。揺れ動き、疑う信仰、簡単に心乱される信仰には、完全な確信や確実性はありません。ヤコブの手紙1章6節では、そんな信仰について「疑う人は、風に吹かれて揺れ動く、海の大波のようです。」と語っています。

なぜ私たちは、真心と確信に満ちた信仰を持って神に近づくことができるのでしょうか？それは、キリストによって私たちが受けた祝福を知っているからです。「私たちの心は、罪悪感から清められるために振りかけられ」、そして「からだをきよい水で洗われた」のです。ここでも、著者は旧約と新約の対比をほのめかしています。旧約において、大祭司は贖罪の日に神に近づく前に儀式的に洗われ、さらに契約の箱に動物の血を振りかける必要がありました（レビ記16:4,14）。これらの儀式は、神に近づく前に清めが必要であることを象徴していました。罪の重荷を抱えたままでは、だれも聖なる神に近づくことはできなかったのです。

では、信者が受けた素晴らしい清めを見てみましょう。それは象徴的なものではなく、実際のものであり、内面の心と外側の体の両方に及びます。そして、この清めは

繰り返す必要のないものです。「振りかけられた」や「洗われた」というギリシャ語の動詞形は、持続的な効果を示しており、いずれも受動形で表現され、これらの清めが私たちによってではなく、私たちに対して行われるものであることを示しています。また、この清めには「血」と「水」が含まれています。

著者は明らかに聖なる洗礼を念頭に置いていたと言えます。外面的に体に適用される水は「きよい」と呼ばれ、洗礼が心をイエスの血によって内面的にきよめることを象徴しています。パウロはガラテヤ人への手紙3章26,27節でこう言っています。

「あなたがたはみな、キリスト・イエスに対する信仰によって、神の子どもです。バプテスマを受けてキリストにつく者とされたあなたがたはみな、キリストをその身に着たのです。」イエスの血によってすべての罪から清められた神の子どもたちは、いつでも天国の門を叩き、待っておられる愛の父の膝の上で安心して座ることができるのです。もはや神に「近づこう」と勧められる必要があるでしょうか？

2番目の勧告は、信者と世に関するものです。清められた心は、口を開き、生き生きとした告白をもたらします。著者は「私たちは動揺しないで、しっかりと希望を告白しようではありませんか。」と促しています。再び現在形を使い、希望を持ち続けることが常に続くべきものであることを思い起こさせます。ここで「信仰」という言葉が使われることを期待するかもしれませんが、著者は「希望」という言葉を使うことによって、私たちの目を未来に向けています。キリストは現在の罪の赦しだけでなく、将来に対する栄光ある希望ももたらしてください。天国は私たちの確かな故郷です。「約束された方は真実な方」だからです。

天国に対する私たちの希望を強めるものは、神の真実さという事実です。永遠なるお方が嘘をついたり、約束を変えたりすることがあるでしょうか？神は永遠の栄光の冠を約束され、その冠を私たちの頭に置いてくださるのです。このような希望を、私たちは「動揺しないで」持ち続けなければなりません。それを、垂れ下がり、地面に触れるような旗のようではなく、全ての人に見えるように高く掲げ続けるのです。

「しっかりと希望を告白しようではありませんか。」とも著者は述べています。希望は隠すためではなく、伝えるためのものだとして私たちに教えているのです。しばしば告白は困難や傷をもたらします。ヘブル人の信者たちもすでにそのことを経験しており、再びその苦しみを感じていました。しかし、この世の反対は、私たちの希望そのものを傷つけることはできません。私たちが希望を告白したり、信仰を保ち続ける中で、傷つくことはあっても、希望そのものが損なわれることはありません。

現代社会でも、この栄光ある希望を告白する者たちは、反対に直面することがよくあります。それでも、この世は私たちの希望の告白を必要としており、神がその希望を成就させてくださるという真実は変わりません。「私たちは動揺しないで」という言葉は、現代に生きる私たちへの力強い励ましです。

3番目の勧告は、信者と教会に関するものです。キリスト者は孤立して生きるものでも、自分だけのために生きるものでもありません。私たちの態度や行動は他者に影響を与えます。著者は「愛と善行を促すように注意し合おうではありませんか。」と促しています。ここでも現在形を使い、継続的な行動であることを強調しています。「注意し合おう」という言葉は、他者のことに思いを巡らせ、その相手が必要としていることに気づくことを意味します。キリストにあって一つの体である私たちは、「愛と善行」に向かって互いに促し合う必要があるのです。

ギリシャ語で使われている「愛」という言葉は「アガペー」で、これは最も高次の愛、すなわち価値のない者や愛されるに値しない者を愛し、行動に移す愛です。ヨハネはその完璧な愛の例を指摘しています。「私たちが神を愛したのではなく、神が私たちを愛し、私たちの罪のために、なだめの供え物としての御子を遣わされました。ここに愛があるのです。」(1ヨハネ 4:10)。このような神の愛からしか、私たちの愛は生まれません。私たちは個々人として信仰と希望を持つことはできますが、愛の実践は常に他者との関わりを必要とします。また「善行」をも含みます。愛があるところには、他者に対する善行が行われ、これらの行いが神に喜ばれるためには、愛が存在しなければなりません。このことは、私たちの時代に対する重要な教訓です。私たちクリスチャンでさえ、「私」や「自分のこと」だけを考え、「自分のもの」だけに関心を持ってしまう誘惑が常に潜んでいます。

互いに愛と善行を促す方法は、まず否定的な側面から、次に肯定的な側面から説明されています。「ある人々のように、いっしょに集まることをやめたりしないで」というのが否定的な側面です。信者は、強められるため、また他者に力を与えるために集まる必要があります。信者は、礼拝や交わりの集まりに参加することで、自分自身のためだけでなく、他者に与えるためにも集まるのです。日曜日の朝、ラジオやテレビを通して一人で過ごすだけで十分だという誤解は、この強い勧告によって正されるべきです。芝が共に成長するように、また炭火が一緒に燃えるように、私たちは互いを必要としています。一部のヘブル人信者たちは、すでに集まりを離れていました。それは、おそらく迫害を恐れてのことだったのでしょう。このことがどれほど危険なことになるかは、26節から31節に書かれています。

一方で、ポジティブな側面は「互いに励まし合おう」ということです。励ますとは、説教したり批判したりすることではありません。「励ます」という言葉は、ヨハネ 16章7節で聖霊を「助け主」と呼ぶ時に使われる動詞から派生しています。必要な時にそばに立ち、助け合うことは、集まりをやめるよりもはるかに優れたことです。誘惑に陥る時に力を与えたり、揺れ動く時に励ましたり、悲しむ時に慰めたりすることが、御言葉を中心に集まる中で得られる恩恵です。もしヘブル人の信者たちが、終わりの日が近づくのを感じながら、このように励まされる必要があったのなら、私たちはどうでしょうか？その日から約1900年も近づいている私たちこそ、同じような

励ましを必要としているのではないのでしょうか。「また、互いに勧め合って、愛と善行を促すように注意し合おうではありませんか。」と、著者は私たちのためにも書いているのです。

ヘブル人への手紙 10 章 26-31 節

26 もし私たちが、真理の知識を受けて後、ことさらに罪を犯し続けるならば、罪のためのいけにえは、もはや残されていません。

27 ただ、さばきと、逆らう人たちを焼き尽くす激しい火とを、恐れながら待つよりほかはないのです。

28 だれでもモーセの律法を無視する者は、二、三の証人のことばに基づいて、あわれみを受けることなく死刑に処せられます。

29 まして、神の御子を踏みつけ、自分を聖なるものとした契約の血を汚れたものとみなし、恵みの御霊を侮る者は、どんなに重い処罰に値するか、考えてみなさい。

30 私たちは、「復讐はわたしのすることである。わたしが報いをする」、また、「主がその民をさばかれる」と言われる方を知っています。

31 生ける神の手の中に陥ることは恐ろしいことです。

強烈な勧告が、今や厳粛な警告に変わります。集会をやめることは、信仰から離れることにつながる可能性があるため、著者は聖霊に対する罪について警告しています。彼は 6 章 4-8 節で、同じ罪に対する警告を発し、偉大な大祭司について語ることに注意を払うよう読者に促しました。ここで、著者はその警告を繰り返し、この致命的な罪に屈する者たちに対する恐ろしい結果について、特に示しています。

「もし私たちが、真理の知識を受けて後、ことさらに罪を犯し続けるならば、」と彼はこの罪を説明しています。これは、信者が偶然に陥る突然の罪や、霊に歩み始めたばかりの者の弱い過ちではありません。これは、救いの真理を知っている者が故意に、意図的に、継続的に罪を犯す行為です。27 節では、そのような者を「逆らう人たち」つまり、神の敵とさえ呼んでいます。

これらのユダヤ人キリスト教徒は、自分たちが考えていた罪の深刻さを理解していたのでしょうか？確かに迫害の圧力が彼らを苦しめ、彼らはユダヤ教の安全を求めてキリストを捨てる誘惑に直面していました。そして、それに屈することは、彼らにとって致命的な結末を生む可能性がありました。自分が真実だと知っているものを故意に拒む者に「罪のためのいけにえは、もはや残されていません。」カルバリの十字架は最終的なものであり、この罪さえも覆います。しかし、あの十字架のもとにひざまずいた者が、それを故意に捨て去るならば、彼は自ら救いを奪い去ります。彼に残さ

れるのは、「ただ、さばきと、逆らう人たちを焼き尽くす激しい火とを、恐れながら待つよりほかはないのです。」だけです。

このような故意の罪人に対する強い言葉に注目してください。彼らは「逆らう人たち」です。中立の立場や軽い中間点はなく、神とその恵みの救いの計画に対する直接的な反対だけが存在します。そのような者にとって、未来は恐ろしく、神の義なる裁きと地獄の燃え盛る火を待つだけです。カルバリの十字架で神の憐れみが満たされましたが、それは神の正義を消し去るものではありませんでした。それは依然として存在し、神の憐れみによって備えられたものを拒む者は、永遠にその恐ろしさを知ることになるでしょう。

この聖霊に対する罪の深刻さを示すために、著者は一つの例を挙げます。神から与えられたモーセの律法は、ユダヤ人にとって非常に尊重されていました。その指示を故意に拒むことは、厳しい罰を招きました。偶像崇拜などの罪は、2人または3人の証人によって証明されると、死刑に処せられました（申命記 17:2-7）。そのような罪人には憐れみはなく、石打ちによる死刑が科せられました。では、モーセよりもはるかに偉大なイエスと、その恵みの新しい契約を拒む者には、どのような罰が科せられるのでしょうか？

著者は、この罪の恐ろしさと故意性を三つの表現で詳細に説明しています。この罪人は「神の御子を踏みつけ」ました。故意に最高で最良の存在を、汚れた足で踏みにじったのです。「自分を聖なるものとした契約の血を汚れたものとみなし」、信じがたい傲慢さから、かつては自分をきよめたと考えていた血を今では他の誰かの血と変わらないとみなします。彼は「恵みの御霊を侮る」者です。ここから、「聖霊に対する罪」という表現が生まれました。この罪人は、神の恵みをもたらす霊そのものを冒涇しています。このような恐ろしい罪をどのように犯すことができるのか、私たちは説明することさえ困難です。しかし、それは起こります。著者は彼の読者と私たちに對して警告を発しているのです。

この警告は空虚な脅しではありません。著者もその読者も旧約聖書の歴史から知っている通りです。申命記 32 章では、モーセがイスラエルに別れの歌を歌い、心を頑なに神から離れた時に何が起こったかを思い出させました。著者は申命記 32 章 35 節から「復讐はわたしのすることである。わたしが報いをする」と、主の語られた言葉を引用しています。ローマ人への手紙 12 章 19 節のパウロと同様に、著者はこの旧約聖書の聖句をそのまま引用せず、その意味に沿って言い換えています。ここでは神の復讐の確実性が強調されています。人は神に対して、罰を免れて罪を犯すことはできません。罪人が犯した罪の報いを、その人は受けるのです。

申命記 32 章 36 節からの 2 つ目の引用は、「主がその民をさばかれる」という主張を強調しています。かつてのイスラエルは神の民でしたが、それでも彼の正義の裁きを逃れることはありませんでした。外面的には神の民という正しい名称を持っていて

も、心が空虚であれば、裁きは避けられません。そして、その裁きは非常に恐ろしいものです。

「生ける神の手の中に陥る」ことは、御助けを必要としている時に神の慈しみ深い腕に抱かれるなら素晴らしいことです。しかし、心が不信仰と罪で満ちている時に、その手の中に落ちることは、恐ろしいことです。生ける神は、片目を軽くつぶって「それで大丈夫さ」と肩を叩いてくるような、軽々しい方ではありません。神はマルコの福音書 16 章 16 節で「信じない者は罪に定められる」と真剣に語っておられます。20 世紀に説教を行う者も、1 世紀のヘブル書の著者と同様に、この警告を明確に鳴り響かせるべきです。そして、あらゆる時代の罪人たちは、この警告を慎重に聞かなければなりません。

ヘブル人への手紙 10 章 32-34 節

32 あなたがたは、光に照らされて後、苦難に会いながら激しい戦いに耐えた初めのころを、思い起こしなさい。

33 人々の目の前で、そしりと苦しみとを受けた者もあれば、このようなめにあった人々の仲間になった者もありました。

34 あなたがたは、捕らえられている人々を思いやり、また、もっとすぐれた、いつまでも残る財産を持っていることを知っていたので、自分の財産が奪われても、喜んで忍びました。

賢明で愛情深い牧師として、著者は必要以上に否定的な話題にとどまることはありません。彼は警告から励ましへと素早く移行し、読者を信仰における「初めのころ」に引き戻します。「光に照らされて後、苦難に会いながら激しい戦いに耐えた初めのころを、思い起こし〔続け〕なさい。」と著者は促します。聖霊が最初に彼らの心を信仰の光で照らした時、友人たちは彼らを見捨て、敵は彼らを追い詰めました。その時期は決して楽ではなく、「苦難に直面した大きな戦い」でした。「戦い」という言葉のギリシャ語〔訳注：ἀγών (agon)〕は、現代の「アスレチックス」（運動競技）という言葉と語源的なつながりをもっており、共にその苦しみの厳しさを示しています。

彼らの苦しみは激しかったのですが、彼らは「耐え」続けました。信仰を初めて持った時の高揚期に、彼らは使徒の働き 5 章 41 節に出てくるエルサレムの初期のクリスチャンたちのように信仰に堅く立ち、「御名のためにはずかしめられるに値する者とされたことを喜びながら」生きていました。

この「激しい戦い」の詳細が続きます。信者たちはしばしば「人々の目の前で、そしりと苦しみとを受け」ました。ここで使われている「人々の目の前で」という言葉〔訳注：θεατροίζω (theatrízō)〕は、新約聖書ではここだけに登場し、現代の「シアター」（劇場）という言葉の語源となっています。何らかの方法で、これらのヘブル人キリスト教徒は公にさらされ、信仰の敵に辱められました。侮辱や迫害は常に苦しいものですが、公然と行われるとその苦しみはさらに増します。

また、信者たちは迫害を受けている者と「仲間」になることによって、トラブルに巻き込まれました。沈黙すれば安全であったかもしれませんが、彼らはむしろ勇敢に「捕らえられている人々を思いやり」ました。当時、囚人はしばしば家族や友人に日常の供給を依存していました。これが、マタイの福音書 25 章 36 節でキリストが「わたしが牢にいたとき、わたしをたずねてくれた」と言った理由の一つです。囚人のキリスト教徒を訪問することは、彼らと同一視され、その運命を共有するリスクを負うことを意味しました。それでも、この同情的なクリスチャンはこうしたリスクを勇敢に受け入れました。彼らがクリスチャンであると特定されると、彼らは個人的な苦しみに直面し、家に押し入れられ、持ち物が略奪されました。

読者たちはこれらの初期の時代を覚えているでしょうか？それならば、その時代から良いものしか生まれなかったことも覚えていなければなりません。迫害は信者たちの絆を強め、彼らは仲間と肩を並べて逆境に立ち向かいました。迫害は信仰に伴う回復力（訳注：迫害や試練に遭っても信仰を失わず、むしろそれを通じて強くなる能力）を育みました。彼らは財産の喪失を「喜んで」受け入れることができました。迫害は彼らの優先順位を明確にし、天国の「もっとすぐれた、いつまでも残る財産」を最も高く評価することができました。

他の人々は困難に耐えることはできるかもしれませんが、それを喜んで受け入れられるのは信者だけです。クリスチャンは救い主がマタイの福音書 5 章 11-12 節で約束した言葉を知っています。「わたしのために人々があなたがたをののしり、迫害し、ありもしないことで悪口を浴びせるとき、あなたがたは幸いです。喜びなさい。喜びおどりなさい。天ではあなたがたの報いは大きいから。あなたがたより前にいた預言者たちを、人々はそのように迫害したのです。」現代のクリスチャンにとって迫害がないことや、以前よりもはるかに豊かになっていることが、キリストの宝物の価値を低くさせ、教会の使命の緊急性を薄めてはいないでしょうか？どうか考えてみてください！

ヘブル人への手紙 10 章 35-39 節

35 ですから、あなたがたの確信を投げ捨ててはなりません。それは大きな報いをもたらすものなのです。

36 あなたがたが神のみこころを行って、約束のものを手に入れるために必要なのは忍耐です。

37 「もうしばらくすれば、来るべき方が来られる。おそくなることはない。

38 わたしの義人は信仰によって生きる。もし、恐れ退くなら、わたしのころは彼を喜ばない。」

39 私たちは、恐れ退いて滅びる者ではなく、信じていのちを保つ者です。

過去の日々における神の助けを思い起こすことで、著者の勧告が展開されます。

「ですから、あなたがたの確信を投げ捨ててはなりません。」と著者は促します。現在の迫害による重圧の中で、彼らは、以前は価値があると認識していたものを、無謀にも拒んではなりませんでした。何が起ころうとも、彼らはキリストに対する信頼をしっかりと持ち続けるべきでした。「それは大きな報いをもたらすものなのです。」と著者は約束します。誠実な神が約束した天国は現実のものであり、測り知れないほど豊かなものです。

今は、自信を失って疲れ果てた運動選手や戦い疲れた兵士のように脱落する時ではありませんでした。代わりに、彼らは「忍耐し」続ける必要がありました。「忍耐する」とは、重い荷物の下で辛抱強く耐え忍ぶという、意味深く豊かな言葉です。彼らに待っているものは、失うにはあまりにも価値があるものでした。神の御心を行う者は、天国で完全な救いを受けるでしょう。神の御心を行うことが、私たちの功績や自らの働きが、天国を獲得することにくらかでも貢献すると考えないように、ヨハネの福音書6章40節のイエスの言葉を引用します。「事実、わたしの父のみこころは、子を見て信じる者がみな永遠のいのちを持つことです。わたしはその人たちをひとりひとり終わりの日によみがえらせます。」という言葉です。ヨハネの黙示録2章10節の「死に至るまで忠実でありなさい。そうすれば、わたしはあなたにいのちの冠を与えよう。」という言葉も、この節の良い解説となります。

著者が聖書に生きていたことは既に見てきたので、彼が旧約聖書の引用で勧告を強化しているのを見ても驚きません。今回は、彼はハバクク書2章3-4節に目を向けています。理解力のある読者は、著者が自由に引用しているものの意味を変えていないことに気づくでしょう。聖霊は、ヘブル書の著者の筆を用いてハバククの言葉のより深い意味を伝えています。これらは神のみことばであり、聖霊によってハバククに与えられ、今やヘブル書の著者によって解釈されています。

「来るべき方」とは、ベツレヘムに来られ、終わりの日に再び来られるキリストを指しています。著者は読者に前向きに「来るべき方が来られる。」と思い起こさせ、さらに「おそくなることはない。」と否定的に強調します。クリスチャンに降りかか

る迫害は劇的かもしれませんが、キリストの再臨は遠く感じるかもしれませんが、それは永遠と比べれば「もうしばらくすれば」という短い間なのです。長い年月、苦しみにあえいでいた神の民は、いずれ来られるキリストのメッセージに励まされてきました。この「もうしばらく」の間での、忠実さが非常に重要です。

キリストを信じることで「義人」となった人は「信仰によって生きる」のです。この人たちは神の約束に頼り、見えないものを見ることを学び、永遠を見据えて生きています。対照的に、臆病な裏切り者のように縮み上がり、主が「わたしのこころは彼を喜ばない。」と言う時の永遠の災いを経験することになります。

ためらっているヘブル人クリスチャンは、どちらの道を選ぶのでしょうか？著者は強く警告しており、まだ彼らを見捨てる気はありません。著者は自分を彼らと同一視し、自信を持って言います。「私たちは、恐れ退いて滅びる者ではなく、信じていのちを保つ者です。」と。

本書を読んでいる人の中で、疲れたクリスチャンはいますか？キリストのために声を上げようとする人を迫害する方法を、この世がまだ知っていることに気づいた、疲れ果てた戦士はいますか？間違っていることに立ち向かい、正しいことのために立ち上がり続けた結果、目に見えない傷をなめている人はいませんか？あるいは、安易な幸せを求めて、救い主の旗を下げ、聖書の告白を後回しにしようとしている人はいませんか？それなら、ヘブル人への手紙のこれらの節を再読する時です！

1517年、九十五ヶ条の論題を掲げた困難な年に、マルティン・ルターは学生たちに対してこのヘブル書の部分を解説し、「信仰によってキリストに頼る者は、キリストの肩に担がれる」と述べました。信仰のある者は、愛に満ちた救い主の肩に担がれるのです。キリストは彼らを安全に天国の住まいへと導きます。私たちはキリストに近づくのであり、恐怖で縮み上がるものではありません。そして、それはキリストの言葉を通してのみ成し遂げられるのです。

信仰の英雄たちを思い起こそう

ヘブル人への手紙 11章 1-2節

- 1 信仰は望んでいる事がらを保証し、目に見えないものを確信させるものです。
- 2 昔の人々はこの信仰によって称賛されました。

前の章を信仰の必要性に言及して締めくくった後、著者がその思考を引き継ぐのは自然なことでした。続くのは、聖書における信仰についての最も壮大な章です。著者は信仰についてすべてを語ろうとしているわけではありません。彼が提示するのは、

定義というよりも、信仰の描写です。これを彼は非常に具体的に、旧約聖書における信仰の例を示すことによって行っています。私たちの前に提示されるのは、信仰の英雄たちは信仰の視力が2.0の人々、つまり肉眼では見ることができない神の約束を信頼し、自らの力ではとても耐えられなかったであろう迫害を耐え抜いた人々です。

著者は「信仰」という言葉で何を意味しているのでしょうか？それは、ただの直感的な推測や、盲目的に暗闇に飛び込むことではありません。また、事実を無視して楽観的にすべてがうまくいくと願うことでもありません。著者は「信仰は望んでいる事がらを保証し、」と述べています。「保証する」とは、揺るぎない自信を持つことです。信仰は、未来を現在に引き寄せるものであり、それがすでに自分のものになっているかのように現実を感じさせます。キリストが栄光のうちに再臨し、私たちが永遠の救いを完全に享受することは、単なる希望ではなく、信者にとって現実そのものです。さらに著者は「目に見えないものを確信させるものです。」と続けます。「確信する」と「確かである」は同義語であり、どちらも信仰の揺るぎない自信を表しています。「望んでいる事がら」は主に未来を指し、「目に見えないもの」はもっと広範囲で、天地創造からこの宇宙の終わりまでのすべての神の現実を含みます。

私たちはこの世の始まりや十字架上の出来事を目撃していませんし、洪水が山の頂を超えるのを見たこともなく、墓から復活された勝利の救い主を肉眼で見たこともありません。実際にキリストの声を聞いて、罪の赦しや再臨の約束を聞いたわけでもありませんが、私たちはそれでも信じています。信者にとって、信仰とは、見えないものを見させ、それを確信させる第六感のようなものです。

著者は信仰についてさらに多くを語る事ができたでしょう。彼は信仰の起源について、福音のみことばと聖礼典を通して聖霊が働くことによって生まれることを指摘することもできました。また、信仰の基盤について、ペテロの手紙第一1章25節が「主のことばは、とこしえに変わることがない。」と言う、神の永遠のみことばに立脚していることを、もっと詳しく説明することもできたでしょう。しかし、代わりに彼は信仰の本質を描写することで満足しています。

旧約聖書の信仰の英雄たちの例を示すことによって、著者は読者に、信仰者が神を絶対的に信頼し、神の言われることが真実であり、約束されたことが実現すると確信していることを示しています。これらの「昔の人々」は、未来と見えないものに対するこの確信を持っており、それゆえに神から称賛されました。神は彼らの信仰を旧約聖書のページに記録することで、彼らに最高の評価を与えたのです。神の約束を疑い始め、信仰ではなく目に見えるものに頼ろうとしていたヘブル人クリスチャンにとって、この記録は重要でした。それは私たちにとっても同様です！

ヘブル人への手紙 11章 3節

3 信仰によって、私たちは、この世界が神のことばで造られたことを悟り、したがって、見えるものが目に見えるものからできたのではないことを悟るのです。

著者は信仰者の殿堂を案内する前に、聖書の冒頭に戻ります。聖書の最初の一文は、まさに著者が説明したような信仰を前提とし、要求しています。「この世界が神のことばで造られた」とき、そこには永遠の神以外の誰もいませんでした。そして神は、その出来事を記録しました。天と地と、そのすべてが「神の命令によって」生まれたのです。創世記第1章に記録されているように、「光があれ。」と神が言われると、「すると光があった。」のです。

私たちの周りで目に見えるものすべては、みことばという、目に見えないものから作られたという事実を受け入れるのは、信仰によってのみ可能です。私たちは、天地創造の時に実際にいた創造主である神が、そのときの様子を喜んで語ってくださったことにこそ信頼を置きます。その場にいなかった他の者が言うことや、人間が考え出した理論に頼るではありません。著者が説明した信仰の例として、これ以上の信仰の例はないと言えるでしょう。

ヘブル人への手紙 11章 4節-7節

4 信仰によって、アベルはカインよりもすぐれたいけにえを神にささげ、そのいけにえによって彼が義人であることの証明を得ました。神が、彼のささげ物を良いささげ物だとあかししてくださったからです。彼は死にましたが、その信仰によって、今もなお語っています。

5 信仰によって、エノクは死を見ることのないように移されました。神に移されて、見えなくなりました。移される前に、彼は神に喜ばれていることが、あかしされていました。

6 信仰がなくては、神に喜ばれることはできません。神に近づく者は、神がおられることと、神を求める者には報いてくださる方であることを、信じなければならないのです。

7 信仰によって、ノアは、まだ見ていない事らについて神から警告を受けたとき、恐れかしこんで、その家族の救いのために箱舟を造り、その箱舟によって、世の罪を定め、信仰による義を相続する者となりました。

信仰の殿堂の最初の肖像画は、アベルのものです。創世記4章1節から15節は、彼の信仰について記録しています。アベルが「カインよりもすぐれたいけにえを神に

ささげ」たのは、彼が持ってきたものの内容ではなく、彼がそれを持ってきた理由によります。昔も今も、神はささげ物そのものではなく、それをささげる者とその心を見えています。創世記4章4節もこの事実を記録しており、「【主】はアベルとそのささげ物とに目を留められた。」と述べて、まず、ささげた人物に、次にそのささげ物に言及しています。しかし、昔も今も、神が信仰について証言する際には、信仰がもたらすささげ物に注目して語られます。最後の審判でもそのようになると、マタイ25章34節から40節でイエスは私たちに思い出させています。

神はアベルを「義人」、つまり神の前に正しく立つ者として認めました。それはアベルの行いではなく、彼の信仰に基づいていたのです。アベルは、やがて来られる救い主に関する神の約束を信じ、それが彼の行動に現れました。神はアベルの信仰を聖書に記録することで、アベルの信仰を認め、歴史上初めて死んだこの人物が、現代もなお私たちに語りかけるようにしました。アベルは私たちに、信仰の道は険しくとも、神の恵みは十分であり、神の承認の微笑みは甘美だ、ということをおぼろげに思い出させてくれるでしょう。

次に、信仰の殿堂には、エノクの肖像が壁に掛けられています。創世記5章21節から24節での彼の伝記はほんの数行しかありません。しかし、それは多くのことを教えてくれます。著者は、七十人訳翻訳を使用して「彼は神に喜ばれて」と言い、創世記5章24節の「エノクは神とともに歩んだ」という表現を使っています。「信仰によって」エノクは神とともに歩みました。エノクは神の約束を信じ、その信仰に基づいて生きました。エノクは死を経験することなく、肉体と魂を共に天に召されました。これによって、神が彼の信仰を認めたことが示されたのです。これは、後のエリヤに対してもそうであったように、神の恵みによってエノクに与えられた、驚くべき奇跡です。これは、パウロがコリント人への手紙第一15章51節から52節で記録しているように、「私たちはみな、眠ることになるのではなく変えられるのです。終わりのラッパとともに、たちまち、一瞬のうちにです。ラッパが鳴ると、死者は朽ちないものによみがえり、私たちは変えられるのです。」という終わりの日の予告編のようなものです。

旧約聖書の記録には、エノクについて「信仰」という言葉は使われていませんが、著者はそれが信仰であったことを思い出させています。彼は「信仰がなくては、神に喜ばれることはできません。」と言っています。ここでは「…がなくては～できません」と強調され、信仰の必要性が明確にされています。神を信頼し礼拝する者は、神が存在すること、そして神の約束が、誠実に求める者に恵み深く与えられることを確信しなければなりません。エノクは神の恵みによってそのような信仰を持ち、神はその信仰に対して極めて印象的な形で承認を与えました。エノクは私たちに「信じるのが見ることです」と、地上と天上の両方の視点から語りかけるかもしれません。

次に描かれるのは、ノアの肖像です。これは私たちの期待を裏切りません。「まだ見えていないことを確信する」ことに関して、ノアの右に出るものはいません。ノアは乾いた地に住んでおり、海を見たことがなかったかもしれませんし、山の頂を超えるほどの洪水を見たことがなかったことは間違いありませんが、神から「警告」を受けたとき、彼はすぐに箱舟を建て始めました。「恐れかしこんで」、彼は行動に駆り立てられました。不信の恐れは人を恐怖に陥れ、麻痺させますが、ノアのような敬虔な「恐れ（畏れ）」は、神に畏敬の念を抱かせ、神の命令に従う行動へと導きます。

こうしてノアは信仰によって、海のない乾いた土地に巨大な箱舟を建て始めました。Ⅱペテロ 2 章 5 節が「義を宣べ伝えた」者と呼ぶように、ノアは 120 年間にわたって箱舟を建てました。その行動によって、ノアは雄弁に彼の時代の「世の罪を定め」ました。完全に墮落した世界の中で、ノアはその時代においてほぼ一人だけと言って良いほど、神とその約束を信じ、信仰によって与えられる義を受けました。ノアは、洪水の水からだけでなく、神の約束を信じることによって、地獄の炎からも救われたのです。

私たちは世の中で孤立していると感じ、もしかすると自分が間違っていて、他のすべての人が正しいのではないかと感じることはありませんか？「心配は無用です」とノアは励ますかもしれません。「私の時代には私たち 8 人だけが救われ、他のすべての人が滅びました」と。

ヘブル人への手紙 11 章 8 節—10 節

8 信仰によって、アブラハムは、相続財産として受け取るべき地に出て行けとの召しを受けたとき、これに従い、どこに行くのかを知らないで、出て行きました。

9 信仰によって、彼は約束された地に他国人のようにして住み、同じ約束とともに相続するイサクやヤコブとともに天幕生活をしました。

10 彼は、堅い基礎の上に建てられた都を待ち望んでいたからです。その都を設計し建設されたのは神です。

アブラハムの姿に触れながら、著者は読者に少し立ち止まって考えてほしいと願っています。信仰の父とされるアブラハムが、信仰の殿堂の中心に位置するのは当然のことです。アブラハムは常に神を信頼し、何も見えないときでさえ、目に見えるものが不可能にしか思えないときにはなおさら、神のみことばに従いました。彼は行く先を知らないまま、神の導きを信じてメソポタミアの故郷を後にしました。地図もなく、ただ神の召しを心に抱いて、未知の世界に旅立ったのです。これこそが信仰とい

うものです！信仰とは、神の導きを信頼して、たとえ目隠しをされたような状況でも前に進むことを指すのです。

その未知の地は、やがてアブラハムの相続地となるはずでした。しかし、彼がカナンで所有した土地は、妻サラが亡くなった際に購入した埋葬地だけでした（創世記 23 章）。ステパノは使徒の働き 7 章 5 節で、アブラハムの信仰に驚嘆しながら、「ここでは、足の踏み場となるだけのものさえも、相続財産として彼にお与えになりませんでした」と述べています。アブラハムは約束された地で異国人のようにテントを移動しながら住みました。それは彼の息子イサクや孫のヤコブにとっても同じでした。彼らは神の約束を実際に見ることなく死にましたが、信仰を持ち続けたのです。

では、アブラハムはどのようにしてそのような信仰を保てたのでしょうか？著者は「信仰によって」という答えを示しています。信仰によって、アブラハムは目に見えないものを見たのです。実際、アブラハムの信仰の視野は驚くほど広く、地上のカナンを超えて、天国にある永遠の都を見据えていました。この都の設計者であり実際の建設者は神です。アブラハムにとって、それこそが本当の故郷でした。この都は「堅い基礎の上に建てられた都」です。地上の天幕は杭を引き抜いて移動させるだけのものです。地上の都市には長持ちする城壁がありますが、いつかは崩れます。しかし、この都は永遠に立ち続けるのです。

著者は 12 章 22 節でこの都を「生ける神の都、天にあるエルサレム」と表現し、私たちが誤解しないようにしています。アブラハムはこの天の故郷を「待ち望んで」生き、ついにはその期待の中で亡くなりました。

私たちは、時にどれほど近視眼的なのでしょうか！地上の、やがて崩れゆく砂の上に焦点を当て、天国の岸辺を見ようとしないうちの愚かさに気づくべきです。

ヘブル人への手紙 11 章 11 節—12 節

11 信仰によって、サラも、すでにその年を過ぎた身であるのに、子を宿す力を与えられました。彼女は約束してくださった方を真実な方と考えたからです。

12 そこで、ひとりの、しかも死んだも同様のアブラハムから、天の星のように、また海べの数えきれない砂のように数多い子孫が生まれたのです。

「信仰によって」アブラハムはまた、「父となる力を与えられました」。彼が 99 歳の時、イサクの誕生が告げられましたが、その年齢では子供をもうけることは不可能に思われました。また、サラも不妊でした。しかし、神の奇跡的な働きによって二人は子供を授かりました。この小さな始まり—たった「ひとりの」—そしてこの奇跡的

な始まり—「しかも死んだも同様のアブラハム」—から、空の星や海辺の砂のように数えきれないほどの子孫が生まれたのです。

肉体的には、イスラエル全体がアブラハムから始まったとされています。また、霊的には、彼の最も偉大な子孫であるキリストを信じるすべての信者がアブラハムを父と呼びます。彼から得られた収穫は非常に豊かであり、それは信仰によってもたらされたのです！アブラハムは「約束してくださった方を真実な方と考えた」と言えます。アブラハムは、決して不誠実になることのない神と、そのために必ず成就する約束を信頼しました。神とその約束に関しては、「不可能」という言葉はキリスト教徒の語彙に存在しないのです。

ヘブル人への手紙 11 章 13 節—16 節

13 これらの人々はみな、信仰の人々として死にました。約束のものを手に入れることはありませんでしたが、はるかにそれを見て喜び迎え、地上では旅人であり寄留者であることを告白していたのです。

14 彼らはこのように言うことによって、自分の故郷を求めていることを示しています。

15 もし、出て来た故郷のことを思っていたのであれば、帰る機会があったでしょう。

16 しかし、事実、彼らは、さらにすぐれた故郷、すなわち天の故郷にあこがれていたのです。それゆえ、神は彼らの神と呼ばれることを恥となさいませんでした。事実、神は彼らのために都を用意しておられました。

著者はアブラハムの信仰についてさらに語りますが、その前に、アブラハムや他の族長たちに共通する信仰の特徴を強調するために少し立ち止まります。彼らはみな、約束されたものを受け取ることなく死んだのです。アブラハム、イサク、ヤコブ、そしてヨセフは、神の約束が成就するのを見ることはありませんでした。アブラハムは息子イサクの誕生を見届けましたが、彼の子孫から生まれる大いなる国民の姿を見ることはありませんでした。ヤコブとヨセフは、その国民が成長し始めるのを見ましたが、その国民から来るはずのメシアを見ることはありませんでした。しかし、それでも彼らは信じていたのです！

ちょうどモーセがネボ山から約束の地を遠くに見たように（申命記 32:52）、彼らは遠くから神の約束を見て、それを信じたのです。信仰という望遠鏡によって神の約束を視界に引き寄せ、族長たちはその約束を喜びの期待とともに待ち望んでいました。

彼らは「地上では旅人であり寄留者であること」を認めました。これは、アブラハムがサラの埋葬地を購入したときに創世記 23 章 4 節で告白した言葉ですが、この告白は信仰の英雄たち全員に共通するものでした。彼らは「寄留者」、すなわち他の地から来た異文化の者であり、「旅人」、本来の故郷ではない場所に一時的に住んでいる者でした。この告白には、カナンの土地以上の意味が込められています。著者は、「彼らはこのように言うことによって、自分の故郷を求めていることを示しています。」と結論づけています。ここでいう「故郷」とは、祖国、つまり自分が来た場所であり、帰りたいと願う場所です。信仰は信者に「帰巢本能」を与え、この地上に根を下ろして安住することを許しません。

族長たちが探していた故郷は、メソポタミアではありませんでした。もしアブラハムが本当にそこに戻りたかったなら、荷物をまとめ、テントの杭を引き抜いて簡単に戻ることはできたはずですが。また、ヤコブも叔父ラバンのもとで 20 年間過ごした後、満足することなく「私を去らせ、私の故郷の地へ帰らせてください。」と願いました（創世記 30 章 25 節）。

彼らが求めていたのは、メソポタミアでもカナンでもなく、「彼らは、さらにすぐれた故郷、すなわち天の故郷にあこがれていた」のでした。彼らは、神が用意してくださった天のカナン、新しいエルサレムに向けて、信仰の手を伸ばし、切望しながら生きていたのです。そのため、神が彼らの神と呼ばれることを恥じることはありませんでした。

神が私たちに信仰を与え、神の家族に加えてくださることは素晴らしい恵みです。しかし、さらに神が私たちの名前を称えてくださるということを考えると、その恵みは驚くべきものです。出エジプト記 3 章 6 節で神は「アブラハムの神、イサクの神、ヤコブの神」とご自身を紹介されました。そして、イエスもマタイの福音書 22 章 32 節で同じことを言っています。私たちの名前も、そのリストに加えられることを願います。

この箇所を読んで、心に何の叱責も受けず、また何の励ましも受けないでいられるでしょうか？ 私たちは讚美歌で「私は旅人 天こそわが家 この地は荒野 天こそわが家」(CW417 *I'm But a Stranger Here*) と歌うことが好きですが、実際の生活ではしばしば異なる態度をとってしまいます。天を見上げるべき目が地上の物事に捉えられ、カナンに向かって歩むべき足は、地上の泥沼に絡め取られています。永遠の宝物に手を伸ばすべき手は、この世の派手な装飾品に縛られ、神の国のために尽くすべき背中、無価値な追求に折れ曲がっているのです。

信仰の英雄たちが私たちに語りかける言葉は、確かに厳しい叱責です。しかし、同時に大いなる励ましでもあります。「前進なさい」と彼らの声が聞こえてきます。「それは価値あることなのです。あなたが信頼している神は、必ず信頼に値する方で

す。神はそのみことばを実行し、約束を成し遂げられます。神は天国があなたの故郷だと言ひ、あなたは私たちと共に、必ず神の右手に立つことになるのです。」

ヘブル人への手紙 11 章 17 節—19 節

17 信仰によって、アブラハムは、試みられたときイサクをささげました。彼は約束を与えられていましたが、自分のただひとりの子をささげたのです。

18 神はアブラハムに対して、「イサクから出る者があなたの子孫と呼ばれる」と言われたのですが、

19 彼は、神には人を死者の中からよみがえらせることもできる、と考えました。それで彼は、死者の中からイサクを取り戻したのです。これは型です。

もう一度、著者はアブラハムの信仰に目を向けるよう促しています。創世記 22 章では、アブラハムの信仰が最も輝く瞬間を目の当たりにすることができます。神が彼に求めたことは、信じ難いだけでなく、神自身が約束されたすべてに完全に反しているように思われたに違いありません。アブラハムは、年老いてからサラとの間に授かった、たった一人の息子を神に捧げるよう命じられたのです。この息子は、彼にとって大変愛おしい存在でした。

さらに、その息子イサクは、創世記 21 章 12 節で「イサクから出る者が、あなたの子孫と呼ばれる」と神がアブラハムに約束された人物でした。ローマ書 9 章 6 節から 9 節では、この約束の深い意味が示されています。イサクからは、肉体的なイスラエルだけでなく、霊的なイスラエル、すなわちキリストを信じるすべての真の信者からなる民が生まれることが予定されていたのです。イサクを捧げることは、その偉大な約束の成就を取り消すことを意味しているように見えました。

しかし、アブラハムは神の試練に対して従順に応えました。神の命令を受けたその夜、アブラハムが、ゲッセマネでのキリストのような葛藤を、どのように経験したか聖書は語っていません。しかし、彼の信仰にもとづく従順は記録されています。翌朝早く、アブラハムは神の命令に従い、行動を起こしました。ヘブル書の著者は「アブラハムはイサクを捧げた」とさえ述べています。アブラハムの心の中では、その行為はすでに成し遂げられたも同然だったのです。それほどまでに彼の信仰は神に対して従順だったのです。

試練に直面したとき、アブラハムは信仰に基づいて神に従いました。そして、その試練の中でも彼は神の約束を信頼し続けたのです。アブラハムは「神には人を死者の中からよみがえらせることもできる」と考えていました。その信仰は、創世記 22 章 5 節でもべたちに「ここで待っていなさい。私と子供はあそこに行って礼拝をし、

それから戻ってくる」と告げたときに示されています。彼は、信仰の論理に基づき、神がイサクを授けてくださったとき、彼自身が「死んだも同然の体」であったように、神がイサクを死からよみがえらせることもできると信じたのです。比喻的に言えば、それはまさに起こったことです。アブラハムは心からイサクを神に捧げましたが、まるで死者の中から彼を取り戻したかのように、再びイサクを受け取りました。



アブラハムがイサクを捧げた

主よ、このような信仰を私たちにお与えください。山を動かすほどの信仰に加え、死に打ち勝つ信仰、そしてアブラハムの最も偉大な子孫であるキリストの死と復活によって、今やパウロがコリント人への手紙第一 15 章 55 節と 57 節で叫んだように、こう告白できる信仰を。「『死よ。おまえの勝利はどこにあるのか。死よ。おまえのとげはどこにあるのか。』しかし、神に感謝すべきです。神は、私たちの主イエス・キリストによって、私たちに勝利を与えてくださいました。」

へブル人への手紙 11 章 20 節—22 節

20 信仰によって、イサクは未来のことについて、ヤコブとエサウを祝福しました。

21 信仰によって、ヤコブは死ぬとき、ヨセフの子どもたちをひとりひとり祝福し、また自分の杖のかしらに寄りかかって礼拝しました。

22 信仰によって、ヨセフは臨終のとき、イスラエルの子孫の脱出を語り、自分の骨について指図しました。

次に紹介される三人の族長の肖像は、信仰の「遠くを見通す力」を示しています。著者は彼らの生涯からいくつもの場面を選ぶこともできましたが、それぞれの最後の日々から一つずつの場面を選びました。これらの三つの場面は、イサク、ヤコブ、そしてヨセフの信仰が、彼らの死を超えて未来を見据えていたことを表しています。彼らは生きているうちに神の約束が成就するのを見ることはありませんでしたが、それでも神が必ず約束を果たされると確信していたのです。

イサクは盲目で高齢だったため、どちらの息子が自分の前にひざまずいているかを見分けることはできませんでしたが、信仰の目を通してそれぞれの息子の将来を見通すことができました。創世記 27 章 1 節から 28 章 5 節には、イサクがヤコブに対して、救い主がその子孫から生まれるという約束を与え、エサウには地上の祝福を与えたことが記されています。

ヤコブは若い頃、自分の能力と知恵に頼りすぎることがありましたが、死の床では杖に寄りかかりながら、神の誠実さに信頼し、礼拝を捧げました。ここでは、彼が養子としたヨセフの二人の息子を祝福する場面のみが取り上げられていますが、彼の物語全体は創世記 47 章 28 節から 49 章 33 節に記されています。死にゆく族長は、はるか未来の祝福を語り、その祝福がすでに成就したかのように見ていたのです。

ヨセフは、エジプトのピラミッドに自身の遺体を立派に保存することもできたはずですが。しかし、彼は信仰の目をもって四百年先のカナンの地を見据えていました。創世記 50 章 22 節から 26 節には、このエジプトの偉大な指導者が家族に誓わせて、自分をカナンに葬るように命じたことが記されています。ヨセフは、カナンの地での生活がわずか 17 年間しかなかったにもかかわらず、出エジプトについて語り、遺骨の扱いについて指示を与えました。これらの言葉は、彼が神の約束を信じていたことを示しています。彼の遺骨は、救いの約束が成就する土地に葬られるべきものでした。これはまさに、「信仰は望んでいる事がらを保証し、目に見えないものを確信させるものです」（ヘブル 11 章 1 節）という聖句の模範です。

このことは、私たちの信仰にとっても大いなる励ましとなります。私たちは、しばしば十分に信じきれず、また遠くを見ることができないことがあります。そんな私たちにとって、彼らの信仰の例は大切な導きとなるのです。

ヘブル人への手紙 11 章 23 節—28 節

- 23 信仰によって、モーセは生まれてから、両親によって三か月の間隠されていました。彼らはその子の美しいのを見たからです。彼らは王の命令をも恐れませんでした。
- 24 信仰によって、モーセは成人したとき、パロの娘の子と呼ばれることを拒み、
- 25 はかない罪の楽しみを受けるよりは、むしろ神の民とともに苦しむことを選び取りました。
- 26 彼は、キリストのゆえに受けるそしりを、エジプトの宝にまさる大きな富と思いました。彼は報いとして与えられるものから目を離さなかったのです。
- 27 信仰によって、彼は、王の怒りを恐れなくて、エジプトを立ち去りました。目に見えない方を見るようにして、忍び通したからです。
- 28 信仰によって、初子を滅ぼす者が彼らに触れることのないように、彼は過越と血の注ぎとを行いました。

創世記と族長たちの物語から、信仰の道は出エジプト記とモーセへと続きます。モーセの信仰について、著者はしばらくの間立ち止まり、いくつかの例を挙げて説明しています。キリスト教とキリストを捨て、ユダヤ教とモーセに戻ろうとする読者に対し、著者は何かを伝えようとしていたのでしょうか。彼は読者にモーセをよく見て、モーセの中にキリストへの信仰の最も偉大な例の一つを見出してほしかったのだと思われる。

著者は出エジプト記1章と2章に戻り、モーセの信心深い両親の話から始めます。出エジプト記1章22節には、エジプトの強大なファラオが「生まれた男の子はみな、ナイルに投げ込まなければならない。女の子はみな、生かしておかなければならない。」と命じたことが記されています。しかし、モーセの両親は王の命令を恐れず、彼を3か月間隠して育てました。

モーセが生まれた時の喜びは、男の子だと分かった時の不安で薄らいだに違いありません。3か月間、成長する赤ん坊を静かに、秘密裏に育てるため、日々の不安が彼らの生活に影を落としたことでしょう。しかし、モーセの両親は信仰によってそれを成し遂げました。彼らは「その子の美しいのを見た（英訳：普通の子ではないのを見た）」のです。出エジプト記2章2節には、「かわいいのをみて（英訳：彼は美しい子どもだった）」と記されています。

両親は、出エジプトの神の約束を知り、自分たちの子が神の民を導く者になると期待していたのでしょうか？そのことは記されていませんが、これだけは確かです。彼らは信仰によってその赤ん坊を隠し、神が彼を守ってくださると信じていました。ここに、見えないものや望んでいるものを神の御手に委ね、信頼する信仰があったのです。

著者は3か月の赤ん坊から成長した成人モーセへと話を進めます。ステパノは使徒の働き7章21節と22節で、モーセが享受した特権について語っています。「ついに捨てられたのをパロの娘が拾い上げ、自分の子として育てたのです。モーセはエジプト人のあらゆる学問を教え込まれ、ことばにもわざにも力がありました。」成長したモーセは、40歳になった頃（使徒7:23）に大きな決断をしました。「パロの娘の子と呼ばれることを拒み」と書かれているとおり、彼は、ファラオの娘の息子として持っていたエリートの地位と高い特権に「ノー」と言ったのです。彼は信仰によってこの決断を下し、それがどれほどの代償を伴うかを理解していました。彼は意図的に王族としての地位を捨て、神の民と同じ立場に立つことを選びました。

この決断によって、彼は奴隷のように見える神の民の未来に対する信仰を示したのです。その結果、彼は虐待を受けました。神の民が受けていた苦しみが彼にも降りかかったのです。信仰の人にとって、それ以外の道はありませんでした。モーセが、神にイスラエルを救うよう召されたと知りながらも、ファラオの宮廷にとどまることは、罪を犯すことに等しかったのです。罪の快樂は、神がご自身の民のために備えてくださっているものと比べれば、ほんの一瞬のものでしかありません。ヘブル書の読者はこれを聞いて、自分たちを振り返ったでしょうか？モーセは彼らと同じ状況に直面した際に、信仰からキリストを選んだのです。

著者はモーセの選択についてさらに詳しく述べています。エジプトの財宝が膨大なものであったと、これまでに歴史家や考古学者が発表していますが、モーセは「キリストのゆえに受けるそしり」が、エジプトの膨大な財宝以上の最高の宝だと知っていました。キリストのために受ける辱めは、モーセにとって計り知れない榮譽だったのです。そう、モーセはキリストのことを知っていました。彼自身、申命記18章15節で、イスラエルに対し、来たるべき偉大な預言者を待ち望み、その言葉に従うようにと促していました。イエスも、ヨハネの福音書5章46節で「モーセが書いたのはわたしのことだからです。」と語っています。モーセは信仰の目で、後に来られる救い主キリストを見つめ、その民と共に歩むことを選んだのです。

苦しみが伴うことにどんな意味があったのでしょうか？モーセは「将来の報いを見つめて」いました。信仰の目は現在だけでなく、特に未来を見通します。信仰の知恵は始まりだけでなく、特に終わりを見据えて計算します。モーセは信仰によって、アブラハム（11章10節）や他の族長たち（11章16節）と同じ天の都を見つめていました。彼らの例は、パウロがコリント人への手紙第二4章18節で語った言葉を思い出させます。「私たちは、見えるものではなく、見えないものにこそ目を留めます。見えるものは一時的であり、見えないものはいつまでも続くからです。」彼らの例は、私たちにも計算を見直すよう促しているのではないのでしょうか？

40年前、モーセは強大なファラオの怒りを恐れてミデヤンに逃げました（出エジプト記2:15）。しかしその後、彼は二度とエジプトには戻らないイスラエルの民を導き

出しています。ファラオの怒りは再び燃え上がり、出発するイスラエルを激しく追いかけてきました。しかし今度は、モーセは恐れませんでした。彼は「目に見えない方を見るようにして」堅く立ちました。主が導かれたので、彼は従いました。そして、彼が必要とする力は主が備えてくださったのです。どうしてモーセは見えない方を見て、信頼できたのでしょうか？著者は、信仰の目を見たからだと教えてくれます。ペテロも1ペテロの手紙1章8節でこう語っています。「あなたがたはイエス・キリストを見たことはないけれども愛しており、いま見てはいないけれども信じており、ことばに尽くすことのできない、栄えに満ちた喜びにおどっています。」さて、私たちの見え方はどうでしょうか？

9つの災いが次々と降りかかりましたが、ファラオは依然としてイスラエルを解放しませんでした。そして、ついに第10の災いが告げられます。エジプトの家々では、長男はすべて死にましたが、子羊の血が鴨居と柱に塗られた家は守られました。人々はすぐに出発できるように準備を整え、命じられた通りに過越の食事を食べました。モーセはまだ見えないことを信じたのです！

破壊の天使がやって来ましたが、血が塗られた家々は過ぎ越されました。イスラエルの民はエジプトを脱出し、モーセは神の命令に従って、過越祭を毎年、神の救いを記念する祭りとして決めました。これらすべてを彼は信仰によって成し遂げたのです！エジプトの歴史にほんの一行二行の名を残すだけだったかもしれないモーセは、聖書という神の聖なるみことばのページにその名を永遠に刻まれることになりました。そして、モーセは待ち望んだ救い主と共に変貌山に立つという偉大な特権を与えられました。すなわち、彼はその御姿が変わり、御顔が太陽のように輝いたイエスと共に、高い山に立ったのです（マタイ 17:3）。

ヘブル人への手紙 11 章 29 節—31 節

29 信仰によって、彼らは、かわいた陸地に行くのと同様に紅海を渡りました。エジプト人は、同じようにしようとしたのですが、のみこまれてしまいました。

30 信仰によって、人々が七日の間エリコの城の周囲を回ると、その城壁はくずれ落ちました。

31 信仰によって、遊女ラハブは、偵察に来た人たちを穏やかに受け入れたので、不従順な人たちといっしょに滅びることを免れました。

イスラエルの民も最初のうちはモーセの信仰を共有していました。少なくとも最初のうちはそうでした。後になって荒野では彼らの信仰は不信仰による苦々しい不平へと変わってしまいましたが、紅海の前ではまだ信仰が輝いていたのです。出エジプト

記 14 章には、イスラエルの民全員が、そびえ立つ水の壁の間の乾いた地を歩き、安全に反対側の岸に渡ったことが記されています。それは単なる勇気以上のものでした。ファラオとエジプトの精鋭部隊にも勇気はありましたが、紅海の押し寄せる水は彼らを最後の一人まで飲み込んでしまいました。イスラエルは神の約束を信じて、無事に通り抜けたのです。紅海は彼らの信仰の障害にはなりませんでしたが、エリコの険しい城壁も同様でした。これらの城壁は強大な軍隊の攻撃に耐えられるように建てられていましたが、信仰をもって行進し、神の命令通りにラッパを鳴らし、勝利の叫びを上げるイスラエルの民には太刀打ちできませんでした。驚くべきことに、7 日目に、その城壁は崩れ落ち、信仰の力が現実のものとなったのです。



紅海が分けられた

エリコの城壁の中には、信仰の目によって見た者がもう一人いました。それは遊女ラハブです。彼女は汚れた職業を持ち、異邦人でありながらも、驚くべき神の恵みによってイスラエルの神を知り、信頼するようになったのです。ヨシュア記 2 章には、イスラエルのスパイがエリコに先行して潜入した際に、彼らをかき止めた彼女の信仰と行動が記されています。ラハブは信仰に基づいて自分の命を危険にさらした結果、最終的には自分の命を救いました。他の住民たちは「不従順な人たち」つまり不信仰の者であったことを意味しています。彼らは皆、エリコの陥落時に殺されてしまいま

したが、ラハブとその家族は救われました。そして、神の恵みによって、彼女の肖像は信仰の殿堂に堂々と飾られることになったのです。

ヘブル人への手紙 11 章 32 節—38 節

32 これ以上、何を言いましょうか。もし、ギデオオン、バラク、サムソン、エフタ、またダビデ、サムエル、預言者たちについても話すならば、時間が足りないでしょう。

33 彼らは、信仰によって、国々を征服し、正しいことを行い、約束のものを得、獅子の口をふさぎ、

34 火の勢いを消し、剣の刃をのがれ、弱い者なのに強くされ、戦いの勇士となり、他国の陣営を陥れました。

35 女たちは、死んだ者をよみがえらせていただきました。またほかの人たちは、さらにすぐれたよみがえりを得るために、釈放されることを願わないで拷問を受けました。

36 また、ほかの人たちは、あざけられ、むちで打たれ、さらに鎖につながれ、牢に入れられるめに会い、

37 また、石で打たれ、試みを受け、のこぎりで引かれ、剣で切り殺され、羊ややぎの皮を着て歩き回り、乏しくなり、悩まされ、苦しめられ、

38 ——この世は彼らにふさわしい所ではありませんでした——荒野と山とほら穴と地の穴とをさまよいました。

著者は時間が足りなくなってきましたが、信仰の例が尽きたわけではありません。イスラエルの歴史に登場するすべての信仰の英雄たちをどうやって取り上げられるのでしょうか？そこで著者は、6人の著名な人物を、時系列によらずに聖霊が思い起こさせた順番で挙げ、信仰の英雄たちの功績や苦しみも簡潔に紹介しています。

この6人のうち、5人は士師の時代の暗黒期に生きた人物です。ギデオオンは、士師記6章から8章にあるように、わずか300人の兵でミデヤンの強大な軍隊を打ち破りました。バラクは、士師記4章と5章に記されているように、デボラと共にカナン人を打ち破り、神の働きのために選ばれた時の人となりました。サムソンは、士師記13章から16章で繰り返しペリシテ人を打ち破り、エフタは士師記11章と12章にあるように、神の力によってアンモン人に立ち向かい、これを撃退しました。

士師たちから、著者は王たちに話を移し、名高い王を一人取り上げます。ダビデの偉業、すなわちゴリアテとの戦いとイスラエルのための行動は、誰もが知っているとおりです。そして、預言者たちの中からは、イスラエルの歴史の暗黒時代に、信仰の一筋の光となったサムエルを挙げています。

著者がいかに賢く例を選んでいるかを見てください。ヘブル人の読者たちが困難な状況に直面していたとすれば、ここに絶望的な状況に立ち向かい、信仰によって勝利を得た6人の人物がいます。彼らにとって、信仰とは単なる言葉ではなく、行動による神への信頼だったのです。

さらに著者は、彼らの信仰の勇敢な業績を次から次へと挙げています。彼らは国々と戦い、それらを塵の中へと引きずり落としました。（著者はダビデの勝利を記した第二サムエル記の8章を思い浮かべていたかもしれません。）彼らは「正しいことを行い」、指導者として政策を実行しました。第二サムエル記8章15節には、ダビデ王について「ダビデはイスラエルの全部を治め、その民のすべての者に正しいさばきを行った。」と記されています。ギデオン、バラク、ダビデは皆、神の約束に基づいて敵に立ち向かい、その約束が真実であることを確かめたのです。

ダニエルは獅子の穴に投げ込まれましたが、獅子たちの口は閉じられていました（ダニエル書6:21-23）。シャデラク、メシャク、アベデ・ネゴは、ネブカデネザル王の火の炉に投げ込まれましたが、七倍に熱せられた炎の中を通っても、煙の匂いさえ身にまとわずに生還しました（ダニエル書3:27）。エリヤや他の預言者たちは抜かれた剣の間を通り抜けましたが、その剣は彼らに届きませんでした（第一列王記19:1-3）。サムソンは盲目となり、弱さに苛まれていましたが、悔い改めた彼は力を取り戻し、ダゴンの神殿を倒して、数千人のペリシテ人の頭上に崩れ落としました（士師記16:30）。ダビデが強大なゴリアテを打ち倒し（第一サムエル記17:50）、また、イスラエルの民がはるかに優勢な敵軍を相手に戦ったことは、「強くされ、戦いの勇士となり、他国の陣営を陥れました」と書かれた者たちの代表的な例です。

神の力は減少したのでしょうか？神の御手は短くなったのでしょうか？神の約束は現代では有効ではなくなり、神は私たちから遠く離れてしまったのでしょうか？そうではありません。それならば、私たちはもう一度、御霊の剣をしっかりと握り、悪魔、世、そして私たちの肉という三重の敵に対して勇敢に戦いを挑むべきです。この戦いは、死をもってのみ終わります。そして、勝利をもたらすことができるのは神のみです。信仰はこのことを知り、恐れずにそれを行動に移します。

信仰の勇敢な行いの例から、著者は信仰の忍耐の例へと話を進めます。第一列王記の17章17-24節には、ザレファテのやもめがエリヤの祈りと主の力によって息子を死から取り戻したことが記されています。また、第二列王記4章18-37節では、シュネムの女もエリシャの祈りと主の力によって息子を取り戻しました。どちらの母親も、子どもを失うという苦々しい悲しみを味わいましたが、復活によってその悲しみは喜びへと変わりました。

他の者たちは、信仰のゆえに拷問を受け、さらに「より良い復活」を待ち望みながら死んでいきました。「拷問」という言葉は、犠牲者を車輪状の残酷な拷問具に縛りつけ、その体を張り詰めさせ、骨が折れるまで、あるいは最後の息を引き取るまで打

ち続ける行為を指しています。キリストを否認すれば、この恐ろしい車輪から逃れることができたかもしれませんし、解放されることもできたでしょう。しかし、それは永遠の命を失うことを意味していました。これらの殉教者たちは、この世の命よりも、来たるべき復活をはるかに尊いものとしていたのです。

神の預言者たちは、冷酷で残忍な嘲りをよく知っていました。第二歴代誌 36 章 16 節には、「ところが、彼らは神の使者たちを笑いものにし、そのみことばを侮り、その預言者たちをばかにしたので、ついに、【主】の激しい憤りが、その民に対して積み重ねられ、もはや、いやされることがないまてになった。」と記されています。偉大な預言者エレミヤも、エレミヤ書 20 章 2 節にあるように鞭打ちの痛みを受けました。ヨセフは鎖と牢獄の生活を知っており（創世記 39:20）、ミカヤもまた同様の経験をしています（第一列王記 22:27）。

キリストのために受けた迫害のリストは続きます。預言者ゼカリヤは、自分の同胞の手で石打ちにされて死にました（第二歴代誌 24:20,21）。他の者たちは、伝承によれば預言者イザヤのように、のこぎりで引き裂かれるという残酷な最期を迎えました。第一列王記 19 章 10 節は、イスラエルが「預言者たちを剣で殺しました。」と記録しています。数年後、イエスはマタイの福音書 21 章 35-36 節で、ぶどう園のたとえ話を通してイスラエルに悲しげに語りました。「さて、収穫の 때가近づいたので、主人は自分の分を受け取ろうとして、農夫たちのところへしもべたちを遣わした。すると、農夫たちは、そのしもべたちをつかまえて、ひとり袋だたきにし、もうひとりは殺し、もうひとりは石で打った。そこでもう一度、前よりももっと多くの別のしもべたちを遣わしたが、やはり同じような扱いをした。」と。辛うじて逃げ延びた者たちも、わずかなもので命をつなぐ生活を送りました。彼らは羊の毛皮ややぎの皮をまとい、生活必需品すら欠いた状態で、彼らが仕えようとしていた人々から絶えず虐げられ、迫害されながら地上をさまよっていました。まるで野生動物のように、彼らは砂漠や山々をさまよい、湿った洞窟や暗い地の穴に隠れ、そこで眠りについたので

す。けれども、それを気の毒に思う必要はありません。彼らにとって、地上の快適さは永遠のキリストと比べれば取るに足らないものでした。地上の安全も、永遠の救いに比べれば重要性を失います。地上の住まいも、天にある邸宅と比べれば、まったく価値のないものでした。彼らは主を否認しなかったのです！世が彼らをいかに低く評価しようとも、神は彼らを世界全体よりもはるかに価値ある者に見なされました。神は、苦しみに直面しても忍耐する信仰をどれほど高く評価されていることでしょうか。そして、その信仰を持ち続ける力をも与えてくださるのです。

それなのに私たちは、世の汚いあざけりを恐れて信仰に生きることをためらってしまうことが多いのです。世の嘲りのラベルが貼られることを恐れ、信仰を隠そうとし

ていないでしょうか？彼らの例を通して、私たちはもう一度、信仰に生きることの意味を見つめ直すべきです。

ヘブル人への手紙 11 章 39 節—40 節

39 この人々はみな、その信仰によってあかしされましたが、約束されたものは得ませんでした。

40 神は私たちのために、さらにすぐれたものをあらかじめ用意しておられたので、彼らが私たちと別に全うされるということはなかったのです。

信仰の殿堂を巡る中で、著者は多くの古代の信者たちの名前とその例を挙げながら、彼らに注目するよう促してきました。旧約聖書のページに彼らが名を連ねていることは、神が彼らの信仰を認めておられる証拠です。彼らの例は、神が普通の人々の信仰を通し、どのようにして驚くべきことを成し遂げる者に変えるかを私たちに示しています。しかし、これらの信仰の英雄たちにとって、すべてが完璧に満たされていたわけではありません。彼らは神から多くの約束を受け、その約束がいくつも成就するのを見てきましたが、キリストが十字架にかかることや、終わりの日に再臨されることは、彼らの生涯の中ではまだ起こっていませんでした。彼らは信仰を通して、遠くにある将来の出来事を見ていたのです。

神の約束の成就の遅れは、実は私たちのためのものでした。神が旧約聖書の信仰の英雄たちに、ご自身の約束が完全に成就するのを待たせたのは、私たちが彼らと共に信仰の仲間となるためだったのです。神は今でもその成就を遅らせておられます。それは、イエスがマタイの福音書 8 章 11 節で示されたように、「たくさんの人が東からも西からも来て、天の御国で、アブラハム、イサク、ヤコブといっしょに食卓に着きます。」という出来事が成就するためなのです。私たちは信仰の目をもって、賛美歌の作者と共に、次のような光景を待ち望んでいます。「無数の救い出された聖徒たちが、きらびやかな衣をまとい、光の階段を上って集まる。『すべては成し遂げられた、死と罪との戦いも終わった。』さあ、黄金の門を大きく開け放ち、勝利者たちを迎え入れよ」(TLH 476 番 1 節 *Ten Thousand Times Ten Thousand*)

しかしながら、著者は「神は私たちのために、さらにすぐれたものをあらかじめ用意しておられた」と書いています。これら旧約聖書の信仰の英雄たちは、天国で二級市民と見なされるわけではありません。キリストの十字架の贖いの効果は、彼らにも過去にさかのぼって届き、未来に生きる私たちに対しても届いているのです。しかし、旧約聖書の信仰の英雄たちは、私たちよりもはるかに不完全な啓示の中にありな

がらも、キリストのために勇敢に行動し、命を捧げました。わずかなものしか持っていなかったのに、これほど多くのことを成し遂げたのです。

著者が新約聖書の読者たちに投げかけている挑戦を理解できるでしょうか？十字架の完全な勝利は私たちのものです。神の約束のすべての真理が私たちの手の中にあります。では、私たちはキリストのために何を行い、何を成し遂げるのでしょうか？私たちの信仰も神の殿堂に名を刻まれるのでしょうか？神は私たちを、この世がこれまでに知りえた唯一のまことの偉業、つまりキリストの信仰のために勇敢に行動し、命を捧げる、という偉業を成し遂げた者たちの中に数え入れてくださるのでしょうか？

主よ、このような信仰を
私たちに お与えください
どんなときでも 味わえる
永遠の住まいの 喜びを

(CW 405 番 6 節 *Oh, for a Faith That Will Not Shrink*)

神の訓練を通じて信仰を成長させよう

へブル人への手紙 12 章 1 節—3 節

1 こういうわけで、このように多くの証人たちが、雲のように私たちを取り巻いているのですから、私たちも、いっさいの重荷とまつわりつく罪とを捨てて、私たちの前に置かれている競走を忍耐をもって走り続けようではありませんか。

2 信仰の創始者であり、完成者であるイエスから目を離さないでいなさい。イエスは、ご自分の前に置かれた喜びのゆえに、はずかしめをものともせず十字架を忍び、神の御座の右に着座されました。

3 あなたがたは、罪人たちのこのような反抗を忍ばれた方のことを考えなさい。それは、あなたがたの心が元気を失い、疲れ果ててしまわないためです。

著者は前章で、忍耐強い信仰の重要性を巧みに描き出しました。まるで巨大な雲のように、旧約聖書の信仰の英雄たちが読者を取り囲み、信仰の忍耐と最終的な勝利の生きた例を示してくれています。「あきらめるな！」と、聖書のページから彼らの声が響き渡ります。「走り続けろ！君は正しい道を走っているんだ！」

著者は、信仰の忍耐について励ますために、今や馴染みのある比喩を用います。彼はそれを「競走」と言っていますが、その言葉は英語の agony の語源となったギリシ

ギリシャ語の「ἀγωνία アゴニア」（苦闘、闘い）から来ており、努力と葛藤を伴う競技を意味しています。さらにこの競技は絶え間ない戦いであることを示すため、ギリシャ語では「走り続けよう」という形で書かれています。また、非常に困難な競技であり、忍耐を必要とするものであることも示しています。忍耐とは、ストレス下でも耐え抜き、どんな理由があってもペースを落としたり、立ち止まったりしないことです。信仰の競走は、100メートル走ではなく、生涯続くマラソンなのです。信仰のトラックでは、1周か2周走っただけでペースを落とすことはできません。常に全力で走り続けなければならないのです。

真剣な競技者は、妨げになるものをすべて取り除きます。体や服装の余分な重みは、ランナーのペースを落とすだけです。ギリシャのアスリートたちは、余分なものを身につけないよう、できる限り軽装で走りました。私たちは特に「まとわりつく罪」を投げ捨てるべきです。まるで緩んだウォームアップ用の服のように、あらゆる種類の罪はランナーの足に絡みつき、トラック上で彼をつまづかせる可能性があります。

ユダは、信仰の競走を始めながらも、罪の絡みつきによって最後まで走り切ることができなかつた一例です。一方、パウロは最も偉大な霊的アスリートの一人として、積極的な模範を示しています。ピリピ人への手紙3章13節と14節で彼はこう勧めています。「兄弟たちよ。私は、自分はすでに捕らえたなどと考えるはけません。ただ、この一事に励んでいます。すなわち、うしろのものを忘れ、ひたむきに前のものに向かって進み、キリスト・イエスにおいて上に召してくださる神の栄冠を得るために、目標を目ざして一心に走っているのです。」

旧約聖書の英雄たちが信仰の競走を無事に走り抜いたことは、私たちに大いなる励ましを与えます。しかし、私たちはそれだけでは力を得ることはできません。力を得てそれを持続させるためには、「信仰の創始者であり、完成者であるイエスから目を離さないでいなさい。」という教えを守ることが必要です。ここでも、著者はギリシャ語の現在形を使って、常にイエスに目を向け続けるようにと強調しています。また、「イエス」という個人名を用いることで、私たちに救いをもたらすためにあえて肉体を取られたお方に焦点を当てています。イエスは、信仰を生み出し、続けさせ、天において信仰の完成へと導くお方です。最初から最後まで、イエスは私たちの信仰の対象であり、その源なのです。イエスは私たちが信じるべきお方であると同時に、信じる信仰を授けてくださるお方でもあります。

イエスの模範は、私たちにとって何と強力な励ましでしょうか。2節で著者は、イエスが「十字架を忍んだ」ことに言及しています。この「忍ぶ」という言葉は、1節の「忍耐」という言葉と同じ言葉から派生しています。拷問と恥辱を伴う十字架は、イエスにとって計り知れない苦しみでしたが、主はそれに耐え抜かれました。救いのわざを完成させ、神の右に座して勝利を得るといふ喜びは、その恥辱をはるかに上回

っていたのです。ヨハネの福音書 17 章 4 節で、イエスは喜びをもって父なる神にこう語りました。「あなたがわたしに行わせるためにお与えになったわざを、わたしは成し遂げて、地上であなたの栄光を現しました。」

終わりの日には、私たちもまたこの喜びを、救い主の言葉の中に聞くことになるでしょう。「そうして、王は、その右にいる者たちに言います。『さあ、わたしの父に祝福された人たち。世の初めから、あなたがたのために備えられた御国を継ぎなさい。』」（マタイ 25 章 34 節）。イエスはなぜこのような苦しみを耐え忍ばれたのでしょうか？なぜ喜んで、あるいは自ら進んで十字架と墓へと進まれたのでしょうか？その答えは、私たちの言葉をなくさせるほどの愛と恵みに満ちています。イエスは私たちを贖う、つまり買い戻すためにそれを行われたのです。

このようなイエスを、読者たちは思い巡らすべきです。イエスをよく見て、あらゆる側面から彼を考察するのです。足が鉛のように重くなり、もう一步も走れないと感じるとき、心が足と同じように重くなり、魂があきらめそうになるときは、イエスを思い巡らすときです。助けようとして来られた罪人たちから受けた敵意と反抗を、罪のないイエスはどれほど耐え忍ばれたことでしょうか。彼が直面された敵意は、ヘブル書の読者や私たちが今後直面することのないほどのものでした。しかし、揺るぎなく、恐れることなく、イエスは勝利されました。

著者は「イエスから目を離さないでいなさい。」と促します。また「このような反抗を忍ばれた方のことを考えなさい」と勧めます。イエスは、私たちが今向かっている場所にすでに到達しており、私たちもまたイエスがおられる場所に行くことになるのです。イエスは、私たちに走り方を教えてくださるだけでなく、信仰の成長がペースを上げ、天国への道の歩みの歩幅を広げるための力をも与えてくださいます。

ヘブル人への手紙 12 章 4 節—6 節

- 4 あなたがたはまだ、罪と戦って、血を流すまで抵抗したことはありません。
- 5 そして、あなたがたに向かって子どもに対するように語られたこの勧めを忘れていません。「わが子よ。主の懲らしめを軽んじてはならない。主に責められて弱り果ててはならない。
- 6 主はその愛する者を懲らしめ、受け入れるすべての子に、むちを加えられるからである。」

イエスにとって、人々の反対に直面することは、ゴルゴタで血を流すことを意味していました。旧約聖書の英雄たちの中にも、血を流して命を落とした者がいました。しかし、ヘブル書の読者である初期のキリスト者たちは、まだそのような試練には至

っていませんでした。彼らは過去に困難な時期を経験しましたが（10:32-34）、罪との戦いの中にあっても敵対者たちからの脅しに耐え、イエスへの信仰をまだ守っていました。将来にはさらに厳しい試練、命をかけるような状況が訪れるかもしれません。だからこそ今は、試練の役割について混乱したり、曖昧なままにしてはいけません。そこで著者は、試練（「訓練」とも呼ばれる）について、すべての答えを提示するわけではありませんが、忍耐を励ますための重要な指針を与えています。

まず、著者は七十人訳聖書の箴言3章11節から12節を引用し、神の御言葉が子どもとしての立場と訓練を密接に結びつけていることを示します。訓練とは、子どもを成熟へと導くために父親が絶えず行う指導と戒めです。それは、性格を形成し、成熟を達成させるために必要な訓練なのです。

時には、訓練が神の手から直接与えられることもあります。また、今回のヘブル人のキリスト者たちのように、敵からもたらされる場合もありますが、神はそれを用いてご自分の目的にかなう形に整えられます。しかし、いずれの場合も、それは常に神の子どもたちの益のためであり、それが、神が私たちの父であることの証明です。ローマ書8章28節は、このことを「神を愛する人々、すなわち、神のご計画に従って召された人々のためには、神がすべてのことを働かせて益としてくださることを、私たちは知っています。」と見事に表しています。

神の訓練に対する正しい反応は、神の愛への信頼です。「軽んじてはならない」と著者は勧めます。神が訓練を与えられるとき、無関心な態度はふさわしくありません。神が語られる重要なメッセージは、いい天気の中でくつろいでいる時よりも、嵐に出会って震えている時の方が耳に届きやすいことがあります。神の訓練を軽んじることは、神のメッセージを聞き逃すことにつながるかもしれないのです。

また私たちは「弱り果ててはならない」とも言われています。神はご自分の民を見捨てることはなく、試練の中でも強めてくださいます。パウロはコリント人への手紙第二10章13節で、慰めの言葉をこう述べています。「あなたがたの会った試練はみな人の知らないものではありません。神は真実な方ですから、あなたがたを、耐えられないほどの試練に合わせることはなさいません。むしろ、耐えられるように、試練とともに脱出の道も備えてくださいます。」

神の訓練に対する正しい反応は、神の愛への確信です。神は愛する者を訓練します。時には、「懲らしめる」という言葉が示すように、むち打ちのような厳しい方法も含まれることがあります。適切な訓練には、進むべき道を教えることと、行動が間違っているときの矯正の両方が必要です。このような行為の背後には、神ご自身と同じく、人知の及ばない、壮大な目的を持つ最高の愛が存在します。このような愛に満ちた天の父からは、その子どもたちにとって必要以上でも以下でもない、ちょうどよい訓練が与えられるのです。

ヘブル人への手紙 12 章 7 節—9 節

7 訓練と思って耐え忍びなさい。神はあなたがたを子として扱っておられるのです。父が懲らしめることをしない子がいるのでしょうか。

8 もしあなたがたが、だれでも受ける懲らしめを受けていないとすれば、私生子であって、ほんとうの子ではないのです。

9 さらにまた、私たちには肉の父がいて、私たちが懲らしめたのですが、しかも私たちは彼らを敬ったのであれば、なおさらのこと、私たちはすべての霊の父に服従して生きるべきではないでしょうか。

次に、著者は神の訓練に込められた配慮について、さらに詳しく読者に思い起こさせています。彼は苦難を「訓練と思って耐え忍びなさい。」と勧めます。現在の困難は、実は訓練のためのものであり、その訓練は彼らが神の子であることを示す目に見える証しなのです。父親は息子を幼いままにしておくのではなく、成長のために教え、導くものではないでしょうか？

箴言 13 章 24 節にも同じ考えが表れています。「むちを控える者はその子を憎む者である。子を愛する者はつとめてこれを懲らしめる。」正当な父親がいない者は訓練を受けずに成長してしまいます。なぜなら、彼らを育てる父親がいないからです。ヘブル書の読者たちは、神の訓練に疲れ果て、これを取り除いてほしいと願っていたのでしょうか？訓練がないことは一見良いことのように思えますが、実は深刻な問題を示しています。それは、彼らが神の子として認められていないことを意味し、悲劇的な結末を招くことにつながるのです。

著者は再び、私たちの地上の家族の例を用いて語ります。「私たちには肉の父がいて、私たちが懲らしめたのですが」と彼は言います。もちろん、クリスチャンの母親も子供を訓練しますが、家庭の長である父親がその最終的な責任を負うのです。そのような訓練を受けたとき、私たちは最初、反発したかもしれません。しかし、多くの場合、後になって父親が何をしようとしていたのかを理解し、尊敬するようになったのです。

では、私たちの肉体だけでなく、霊的な存在までも見守る天の父には、どれほど従うべきでしょうか？神が私たちが戒めるのは、決して怒りを発散するためではありません。それは、迷い出た子どもを取り戻し、正しい方向に導くためなのです。この父は、尽きることのない愛と、過ちを犯さない知恵を持っておられます。人生の試練の背後にある神の配慮を見出し、その訓練に従うことこそ、真の意味で「生きる」ということなのです！

ヘブル人への手紙 12 章 10 節—13 節

10 なぜなら、肉の父親は、短い期間、自分が良いと思うままに私たちを懲らしめるのですが、霊の父は、私たちの益のため、私たちをご自分の聖さにあずからせようとして、懲らしめるのです。

11 すべての懲らしめは、そのときは喜ばしいものではなく、かえって悲しく思われるものですが、後になると、これによって訓練された人々に平安な義の実を結ばせます。

12 ですから、弱った手と衰えたひざとを、まっすぐにしなさい。

13 また、あなたがたの足のためには、まっすぐな道を作りなさい。なえた足が関節をはずさないため、いやむしろ、いやされるためです。

第三に、著者は読者に神の懲らしめに込められた目的をより深く思い起こさせます。ここでも、彼は小さなことから大きなことへと進んでいきます。地上の父親たちは、子どもが成長している間の「少しの間」だけしか懲らしめを行うことができません。また、地上の父親たちは自分が最善だと考える方法でしか懲らしめを行えないため、時には間違いを犯すこともあります。

一方で、神の懲らしめには誤りがなく、常に子どもたちにとっての益があります。神が念頭に置いている益とは「私たちが神の聖さにあずかること」です。イエスはマタイ 5 章 48 節で、「だから、あなたがたは、天の父が完全なように、完全でありなさい。」と説明しています。聖なる神は、すべての罪から離れ、罪に反応するお方であり、ご自身の子どもたちもご自身と同じように聖くあることを望んでおられます。まず神は彼らを救い主へと導くことで聖くし、その後さらに彼らを導いて、救い主の聖なる足跡をますます歩ませてくださいます。そして最後に天国において、完全な聖さの冠で彼らを飾ってください。この神の恵み深い目的の光に照らしてみると、懲らしめがどれほど重要であるかがわかります。

確かに、その時は懲らしめが痛みを伴うことがありますが、それはすぐには結果が見えないからです。果実が木で熟すには時間がかかるように、懲らしめの実りが現れるまでには時間が必要です。神の懲らしめを、魂を鍛えるジムのように捉える者は、「義と平安の実」を刈り取ることができるでしょう。キリストのあがないによって神との正しい関係を持つ者は、ますます神に対して正しい行いを歩むようになります。その結果得られるのが「平安」です。この短い言葉には、深い意味があります。平安とは、私たちの罪がキリストのゆえにゆるされていること、そして私たちが神に仕える力を神から与えられていることを知ることで得られる安心感です。このように懲らしめを理解することで、信仰の不満や崩壊を防ぐことができます。

神は人を強めるために訓練されます。このことを知っている者は、自分自身のためにも、他者のためにも最善を尽くすべきです。著者は、イザヤ書 35 章 3 節の言葉を引用し、信仰の崩壊寸前にいる読者に対して、霊的な戦いのために「弱った手と衰えたひざとを、まっすぐにしなさい。」と励まします。また、箴言 4 章 26 節の言葉を引用し、「また、あなたがたの足のためには、まっすぐな道を作りなさい。なえた足が関節をはずさないため、いやむしろ、いやされるためです。」とも促しています。

神の訓練によって強められた者は、弱い者の旅路を容易にするために、道を整え、障害物を取り除くべきです。どちらに進んでよいのかわからず、キリストから離れてしまう危険にさらされている足の不自由なクリスチャンは、強い者からの助けを必要としています。信仰の道が困難な状況にあるとき、たとえばヘブル書の読者たちのように、その道が険しいほど、弱った者が完全に無力になる危険性は急激に高まります。だからこそ、著者は「弱った手と衰えたひざとを、まっすぐにしなさい。」「また、あなたがたの足のためには、まっすぐな道を作りなさい。」と強く促しているのです。その霊的な活力を得る力については、すでに信仰の道を走るすべての人々に対して、信仰の創始者であり完成者であるイエスから目を離さないでいなさい、と勧めることで示されています。

私たちの中で、神の訓練を味わったことのない者がいるのでしょうか？時には、その訓練は鋭く速やかに私たちに訪れ、息をのむほどの衝撃を与えます。また、時にはゆっくりと絶え間なく波のように押し寄せ、私たちを疲れ果てさせます。そのようなとき、私たちは誰もが「なぜですか？」と尋ねてしまうのではないのでしょうか。不思議なことに、私たちは自分の子どもたちに対して訓練するとき「なぜ」と尋ねることを許さないのに、自分は天の父にその問いをぶつけてしまうのです。子どもたちは私たちの知恵を絶対的なものとして受け入れなければならない一方で、私たちは全能者の方法について自由に疑問を呈してしまいます。

訓練が与えられたときの適切な問いは「なぜ」ではなく「何を」です。「なぜ」という問いについては、これまで何度も説明されてきましたし、ヘブル書の著者も繰り返し私たちに教えてくれました。それは、父なる神が私たちを愛し、天国での成熟に導きたいと願っておられるからです。「何を」という問いの答えは、私たちが神に時間を委ね、神が私たちの信仰を強め、他者を励ますために私たちを用いられるときに示されるでしょう。

神の訓練は永遠に続くものではありません。信仰をもって私たちが目を向けている方、すなわちキリストが再臨される日がやがて訪れます。そして、キリストが戻られるとき、私たちは「その時には顔と顔とを合わせて」キリストを見ることになり、そのときには私たちが完全に神に知られているように、すべてを完全に知ることができるのです（I コリント 13:12）。

警告

シオンの山で神を拒み、滅びてはならない

ヘブル人への手紙 12 章 14 節—17 節

14 すべての人との平和を追い求め、また、聖められることを追い求めなさい。聖くなければ、だれも主を見ることができません。

15 そのためには、あなたがたはよく監督して、だれも神の恵みから落ちる者がないように、また、苦い根が芽を出して悩ましたり、これによって多くの人が汚されたりすることのないように、

16 また、不品行の者や、一杯の食物と引き替えに自分のものであった長子の権利を売ったエサウのような俗悪な者がないようにしなさい。

17 あなたがたが知っているとおりに、彼は後になって祝福を相続したいと思ったが、退けられました。涙を流して求めても、彼には心を変えてもらう余地がありませんでした。

著者はまだ信仰の競走のことを念頭に置き、私たちが互いに助け合いながら走るためにできることについて述べています。「すべての人と平和を追い求めなさい。」と彼は促しています。まるで競走者がゴールを目指して走るように、読者は平和を追い求め続けるべきだということです。人間はわがままで自己中心的な性質を持っているため、平和の追求はそもそも簡単なことではありません。さらに、困難が生じるとその追求は一層難しくなります。そのようなとき、人は神経質になり、近くにいる者に苛立ちをぶつけやすくなります。しかし、迫害がヘブル書の読者たちに不和をもたらしてはならず、むしろ彼らが互いに平和を追い求めることに一層熱心になるべきだ、と著者は語っています。これはまさにイエスがマタイの福音書 5 章 9 節で教えられたことです。「平和をつくる者は幸いです。その人たちは神の子どもと呼ばれるから。」

目標は、仲間の信者に対して平和をもたらし、神に対してきよさを持つことでした。イエスの血と聖霊の働きによって聖なるものとされた信者は、今やきよさを追い求めるべきなのです。信仰は、心という温室から、日々の生活という庭へ移植され、信者たちはますます主の足跡をたどろうと努めます。パウロはコリント人への手紙第二 5 章 17 節でこう述べています。「だれでもキリストのうちにあるなら、その人は新しく造られた者です。古いものは過ぎ去って、見よ、すべてが新しくなりました。」もはや「いつもの生活」ではなく、キリストが望まれる生き方が求められるのです。

そのような聖なる生活は自動的に生じるものではありません。信者はその生活を、生涯を終えて天国で完全なきよさが与えられるその日まで追い求め続けなければなりません。追い求める中で疲れてしまったときには、よい知らせである御言葉と聖さんによって力を得る必要があります。クリスチャンであると主張しても、生活の中できよさを追い求めることが見られない人は、主を見たことがないのです。そしてそのような者には、主を目にすることができないでしょう！ヤコブが「行いのない信仰はむなし」（ヤコブの手紙 2:20）と言ったように、著者も同じことを語っています。イエス・キリストだけが天国への切符ですが、私たちがきよさを追い求めることは、恵み深い神がその切符を私たちに与えてくださった証拠なのです。

著者は「あなたがたはよく監督して」と続け、他の信者に対して絶えず配慮することを促すために、特別な動詞を用いています。すべての信者は、見張り、警告し、導き、守るという監督の役割を果たすべきで、「神の恵みから落ちる者がないように」するべきだと著者は言います。「落ちる」とは、競走の途中で遅れをとることを意味します。そのような遅れは致命的な結果を招き、神の恵みである救いを失ってしまうことにもつながりかねません。ヘブル書の読者の中には、迫害のために競走の途中で脱落しそうになっている者がいたのでしょうか？それならば、強い者が弱った者のそばに寄り添い、肩に手を回し、神の恵みを指し示して励ます時だったのです。

神の恵みを失う者は、自分自身に永遠の損害をもたらすだけでなく、他者にも非常に大きな危険を及ぼします。申命記 29 章 18 節でモーセは、イスラエルの民の間で主を離れることについて「苦い根が芽を出して悩ましたり、これによって多くの人が汚されたりすることのないように」、と警告しています。ヘブル書の著者は、この比喩を借りて、同じ罪に対して警告を発しています。キリストから離れることは、地中にある毒の根のようなものです。ゆっくりと成長し、その汚染を周囲にも広げ、やがては他者も汚染されてしまいます。もしヘブル書の読者の中にキリストから離れようと考えている者がいるならば注意しなさい、と著者は警告します。そのような離反は伝染性があり、他者を悩ませ、最終的には信仰を失って神の前に立てなくなる危険をもたらします。

読者に対する警告の例として、著者はエサウを挙げています。エサウについて、著者は「俗悪な者（訳注：英語では「性的に不道徳」）」と表現しています。旧約聖書にはエサウが性的に不道徳な行為を行ったという記録はありませんので、別の説明が必要です。士師記 2 章 17 節では、イスラエルの不貞を「彼らは、、、ほかの神々を慕って淫行を行い、それを拝み」、と表現しています。これは神への不信仰を性的な不貞にたとえた比喩です。著者は同じように、神とその約束に対するエサウの不忠実さを表すためにこの比喩を用いているのかもしれませんが。

さらに「俗悪な者」という言葉は、世俗的で神聖なものに敬意を払わない者を意味しています。創世記 25 章 29 節から 34 節の出来事は、エサウが霊的なものに対して

価値を見いださなかったことを明確に示しています。空腹を満たすための一杯の食べ物は、長子の権利よりも、彼にとっては現実的で価値のあるものに見えました。長子としての権利や、救い主が彼の子孫から生まれるという約束を受け継ぐことを、彼は簡単に取引の対象とし、神聖な相続の権利を軽んじました。すべての俗悪な者と同様に、エサウは目先のことだけに生き、永遠の価値あるものを顧みませんでした。

読者がキリストから離れることも、まさにこのようなことではないでしょうか？迫害から逃れるためにキリストを捨てることは、エサウがキリストの系図に連なる長子の権利を、一皿の煮物と一片のパンと引き換えにしてしまったことと同じです。その逃れは一時的には安堵をもたらすかもしれませんが、最終的な結果は恐ろしい喪失です。

エサウの警告がここにあります。創世記 27 章 30 節から 40 節の内容からわかるように、エサウは自分の行動を後悔し、父イサクの決定を変えてもらうよう試みしました。エサウは苦々しい涙を流して父に懇願しましたが、拒絶されました。救い主の血筋を受け継ぐ祝福は弟ヤコブに与えられ、取り戻すことはできなかったのです。ヘブル書の著者は、エサウの悔い改めについて何も語っていません。ただ、彼の行動がもたらした損害が取り返しのつかないものであったことだけが強調されています。これはキリストを離れようとする者に対する警告です。彼らは、自分自身と他者に対してもたらす最終的な損害について、よくよく考えるべきなのです。

ヘブル人への手紙 12 章 18 節—21 節

18 あなたがたは、手でさわれる山、燃える火、黒雲、暗やみ、あらし、

19 ラッパの響き、ことばのとどろきに近づいているのではありません。このとどろきは、これを聞いた者たちが、それ以上一言も加えてもらいたくないと願ったものです。

20 彼らは、「たとい、獣でも、山に触れるものは石で打ち殺されなければならない」というその命令に耐えることができなかったのです。

21 また、その光景があまり恐ろしかったので、モーセは、「私は恐れて、震える」と言いました。

エサウが約束された祝福を取り返しのつかない形で失った例は、この手紙の最後の警告部分に向けた導入となっています。この手紙全体を通して、著者は読者に対して、優れたキリストに忠誠を誓うよう促し、彼のより優れた契約から離れることを戒めてきました。著者はもう一度警告の声を上げ、こう切実に訴えています。「語っておられる方を拒まないように注意しなさい。」（出エジプト 12:25）。

この箇所では、古い契約と新しい契約の対比が、聖書の中でも最も劇的な形で描かれています。著者は、キリストを信じる者たちが、もしユダヤ教に戻ったならば、どれほど大きなものを失うことになるのかを、鮮やかに示しています。まず、読者はモーセの律法が与えられたシナイ山へと連れ戻されます。著者は、出エジプト記 19 章と 20 章、申命記 5 章に記された、シナイ山での恐ろしい光景を再現しています。シナイ山は地上にあり、触れることのできる実在の山です。現代においても砂漠の中でその険しい姿を残しています。

しかし、その山で起こった出来事は、完全にこの世のものとは思えないものでした！ 燃え上がる炎、濃い煙、漆黒の闇、荒れ狂う旋風、そして鳴り響くラッパの音が入りに恐怖を抱かせ、彼らの心に神の臨在と力を深く刻み込みました。すでに震え上がっていた人々にとって、神が戒めを語る声を聞くことは耐え難いものでした。彼らはモーセに懇願しました。「どうか、私たちに話してください。私たちは聞き従います。しかし、神が私たちにお話しにならないように。私たちが死ぬといけませんから。」（出エジプト 20:19）。

彼らの恐怖は、このおそるべき出来事のために神が与えた行動規範によってさらに高まりました（出エジプト 19:9-13）。ここで触れられているのはその規範のうちの一つで、彼らを完全に怯えさせるものでした。それは、山に触れた動物は石で打ち殺されなければならない、という内容でした。人々はその迷い込んだ動物にさえ触れることを禁じられ、石を投げるか矢を放って殺すよう命じられたのです（出エジプト 19:13）。

もし、これが何も理解できない動物に対する罰だとしたら、警告を理解できる人間に対してはどれほど厳しい罰が課されることでしょうか。シナイ山での出来事は、神の臨在と力を目の当たりにした全ての人々にとって、恐れと不安に満ちたものでした。彼らの指導者であり、神の友であったモーセでさえも震え上がり「私は恐れて、震える」と言ったのです。これは旧約聖書のシナイ山の記述にはありませんが、明らかにモーセも「宿営の中の民はみな震え上がった。」と記された出エジプト記 19 章 16 節の民の中に含まれていたのです。

著者は問います。読者は本当にそれを望んでいるのですか？ 本当に旧約の律法の契約に戻りたいのですか？ 雷鳴とラッパの響く律法には、罪に悩む心を赦し、罪で傷ついた良心を癒す力はありません。それが提供できるのは、神の義なる要求を恐ろしくも明らかにし、それを破った者への正しい罰を示すことだけです。律法は、罪が人と神との間を隔てる越えがたい、また越えることのできない距離を指し示すだけで、その溝を埋める手段を提供することはありません。

シナイ山には未来がありません。神への道はなく、神に受け入れられることもなく、神と共に永遠を過ごすこともありません。それなのに、人々はそれを試みるのです。悪魔に惑わされ、自らの傲慢により、あるいは教会から誤って教えられた結果と

して、人々は自分の行いを通して聖なる神に近づけると考えるのです。これはなんと悲劇的なことでしょうか。聖なる神にこのように触れようとしても、待っているのは地獄での永遠の死しかないのです。

ヘブル人への手紙 12 章 22 節—24 節

22 しかし、あなたがたは、シオンの山、生ける神の都、天にあるエルサレム、無数の御使いたちの大祝会に近づいているのです。

23 また、天に登録されている長子たちの教会、万民の審判者である神、全うされた義人たちの霊、

24 さらに、新しい契約の仲介者イエス、それに、アベルの血よりもすぐれたことを語る注ぎかけの血に近づいています。

著者は「しかし」という言葉で、旧い契約と新しい契約のはっきりとした対比を始めます。彼は読者に「あなたがたは、、、に近づいているのです。」と思ひ起こさせ、彼らが神の恵みによってどこまで進み、今どこに立っているかを示しています。彼らはすでに「シオンの山」に来ているのです。シオンはエルサレムの丘の一つであり、ここでは神の住まいである天国を象徴しています。地上にいながらも、信者はすでに天国を所有しており、今日という日に、すでに明日という未来を手に行っているのです。このシオンには「生ける神の都、天にあるエルサレム」があります。地上のエルサレムは、この天の都のかすかな影にすぎません。その永遠の都は、神が設計し、建設された場所であり、生ける神が住んでおられる場所です。

この都には偉大な仲間がいます。「無数の御使いたちの大祝会」が開かれているのです。天使たちはシナイ山で律法が与えられた時にも共にいて、ガラテヤ 3 章 19 節に記されているように、その荘厳な出来事に参与しました。神は天使たちを地上に遣わし、「救いの相続者となる人々に仕えるため」に働かせます（ヘブル 1:14）。しかし、天国では彼らは祭りの集会に加わり、神が罪人に対して示された愛を讃美するのです。黙示録 5 章 12 節には彼らの賛美の歌が記されています。「ほふられた小羊は、力と、富と、知恵と、勢いと、誉れと、栄光と、賛美を受けるにふさわしい方です。」地上の信者たちも、この天使たちの賛美に不完全ながらも加わり、やがて天国では完璧な調和の中でその賛美を歌うことになるのです。

信者にはさらに多くの仲間がいます。彼らは「天に登録されている長子たちの教会」の一員です。すべての信者は神の前で長子としての地位を持っています。彼らは救いを受ける相続人であり、神は彼らの名を天国の家族名簿に記しておられます。それは、地上のユダヤ人が家系図を厳密に記録していたこと以上に確実なものです。

聖書は「天に登録されている」という表現を好んで用いています。ルカの福音書 10 章 20 節でイエスは弟子たちに「あなたがたの名が天に書きしるされていることを喜びなさい。」と語り、ピリピ 4 章 3 節ではパウロが「いのちの書に名のしるされている」と同労者たちについて言及しています。すべての信者は、神の恵みによって書かれた、決して取り消される事のない天国の市民権を持っており、天の父の家には、それぞれの信者のために用意された部屋があるのです。

この栄光の場面の中で、「万民の審判者である神」に言及されていることは、信者にとって恐れるべきことではありません。その恵みを軽んじたり、捨て去ろうとしたりする者たちにとっては恐ろしいことですが、神はすべての人を公正に審判されます。しかし、長子として、御子の義によって覆われて神の前に立つ者たちは、審判を恐れる必要はありません。私たちが審判を通過する時、私たちは「全うされた義人たちの霊」に加わるのです。モーセやアブラハムのそばに立ち、パウロやヨハネの話聞き、ルターや私たちの先祖と語り合うことは、まさに極上の体験です。これらの義人たちの魂は、地上の私たちも待ち望んでいるように、いにしへの墓から体がよみがえる時を待っているにせよ、すでに天国の完全なゴールにたどり着いているのです。

もしイエスと彼の新しい契約の血がなければ、私たちは父の御座に自由に近づくことも、父の家の相続財産を得ることも、天使たちと共に喜びに満ちた仲間となることも、信仰の旅路における同伴者たちを持つことも、審判での憐れみを受けることも、墓の彼方に希望を持つこともできません。そのため、著者は信者たちが受けている祝福の数々をまとめ、こう語ります。「あなたがたは、、、新しい契約の仲介者イエス、それに、アベルの血よりもすぐれたことを語る注ぎかけの血に近づいています。」

著者は「イエス」と呼び、そのお方が私たちを救うために、肉体を取ってこの世に来られたことを思い起こさせます。また、イエスを「新しい契約の仲介者」として、ヘブル 8 章 6 節に戻り、イエスはその尊い血を流すことによって神の恵みの契約を成立させたことを説明しています。創世記 4 章 10 節にあるように、アベルの流された血は復讐を神に訴えましたが、イエスの血は罪人にゆるしと平和を語っています。著者は 12 回目の「すぐれた」という言葉をここで用い、イエスの血が語る福音の赦しのメッセージを表現しています。

読者はどちらを選ぶべきでしょうか？シナイ山でしょうか、それともシオン山でしょうか？律法の厳しい雷鳴か、福音の優しい愛でしょうか？律法の呪いの言葉、「あなたがたの咎が、あなたがたと、あなたがたの神との仕切りとなり、あなたがたの罪が御顔を隠させ、聞いてくださらないようにしたのだ。」（イザヤ 59 章 2 節）か、それとも天国の宴への招待、「さあ、おいでください。もうすっかり、用意ができましたから。」（ルカ 14 章 17 節）でしょうか？果てしない地獄の悲惨さか、永遠の天国の栄光でしょうか？

答えは、イエスの血による福音のメッセージと、そのメッセージを通じて聖霊が生み出す信仰の中にしかありません。私たちが毎日、天国の清らかな空気を胸いっぱい吸い込み、信仰をもって次のように祈ります。「イエスよ、憐れみによって、その安息の地へ私たちを導いてください。父なる神とともに、霊とともに、永遠に祝福されるお方よ。」(TLH 605 番 5 節 *The World is Very Evil*)

へブル人への手紙 12 章 25 節—29 節

25 語っておられる方を拒まないように注意しなさい。なぜなら、地上においても、警告を与えた方を拒んだ彼らが処罰を免れることができなかつたとすれば、まして天から語っておられる方に背を向ける私たちが、処罰を免れることができないのは当然ではありませんか。

26 あのとときは、その声が地を揺り動かしましたが、このたびは約束をもって、こうわれます。「わたしは、もう一度、地だけではなく、天も揺り動かす。」

27 この「もう一度」ということばは、決して揺り動かされることのないものが残るために、すべての造られた、揺り動かされるものが取り除かれることを示しています。

28 こういうわけで、私たちは揺り動かされない御国を受けているのですから、感謝しようではありませんか。こうして私たちは、慎みと恐れとをもって、神に喜ばれるように奉仕をすることができるのです。

29 私たちの神は焼き尽くす火です。

「より大きな特権」には、当然「より大きな責任」が伴います。そして、その特権を悪用すれば、「より大きな責め」を負うことになります。神は、地上のシナイ山において律法を、そして天上のシオン山からは福音を語られました。神の語られた律法を拒んだ者たちは、その結果がどれほど深刻なものであったかをすぐに知ることとなりました。イスラエルの民が神とその戒めを拒否したとき、例えば金の子牛を拝んだときや、荒野を旅する際に幾度も繰り返した反逆の行為において、彼らはその報いを免れることはありませんでした。彼らの骨は荒野の墓に埋もれ、天のカナンも失ってしまったのです。

へブル書の読者たちは、神が天から警告の声を発し、彼らに語りかけられたのを聞いています。ペテロはこのことをペテロの手紙第一 1 章 12 節で、「天から送られた聖霊によって」と説明しています。福音は、天からの神の声です。それを通じて、神の霊は愛をもって語りかけ、罪人の心を引き寄せ、その大きな愛の力で人々の魂を獲得しようとしています。神が律法の雷鳴のような声で語られた時にそれを拒否することよりも、優しく愛に満ちた福音の声を拒むことの方が、はるかに責められるべきで

す。なぜなら、愛に満ちた招きを断るような者には救いがなく、罪に対する他の救済手段は存在しないからです。著者がヘブル書の読者たちに求めているのは、キリストのゆるしと平安という、よりすぐれたメッセージにしっかりと耳を傾け、恵みから振り落とされないよう、その内容に必死にしがみつ়くことです。

さらに、カルバリ丘から恵みの福音をもって語られたその声は、再び語ります。神がシナイ山で語られたとき、山は揺れ動きました。出エジプト記 19 章 18 節には、「【主】が火の中であって、山の上に降りて来られた」と記され、「全山が激しく震えた。」と書かれています。しかし、その大きな地震は、これから起こることに比べれば何でもありません。ハガイ書 2 章 6 節では、主の約束が示されています。この約束は今も有効であり、著者はそれを自由な形式で引用しています。主は再び地を揺るがすのです。キリストが終わりの日に再臨するとき、地球だけでなく天も揺れ動きます。かつては永続的であると思われていた「被造物」は滅びるのです。すべての揺るがされるものは取り除かれます。ペテロの手紙第二 3 章 12 節には、「天は燃えてくずれ、天の万象は焼け溶けてしまいます。」と書かれています。

著者はそれが何かを具体的に説明していませんが、前に述べられていることを指しています。つまり、土台のある天のエルサレム、またはシオン山、神の子どもたちが永遠に共に住むことのできる、生ける神のおられる場所です。

このように偉大な王の声を無視し、最後の偉大な行為の準備をしておられる方を拒む者がいるでしょうか？著者が伝えたいのは、天からの福音の言葉をもっとしっかりと聞き、それにしがみつ়くことです。そうすれば、読者は最後の偉大な日に、永遠に揺るがされないものの一部となることのできるのです。

もう一度、著者は読者に彼らが持っているものを思い起こさせます。儀式と古いモーセの契約に縛られたユダヤ教は、揺り動かされるものでした。しかし、彼らがすでにキリストにおいて受け取った宝と、彼らに一部与えられていた永遠の天の御国は、揺るぐことのないものだったのです。その揺るがされることのない宝に対して取るべき唯一の適切な反応は、それを軽んじたり、投げ捨てたりするのではなく、「感謝」し、「慎みと恐れ」をもって神を礼拝することです。ここでの「奉仕」という言葉は、広い意味の一般的な奉仕を含んでいます。感謝する信者は、神の前でへりくだりつつ、畏敬の念をもって神への奉仕を捧げます。また、神を恐れつつ、主を喜ばせないことを避けようと努めるのです。

著者は信仰と恐れを組み合わせた厳肅な訴えを私たちにしています。揺るがされることのない御国を持つ者が、うろうろと迷ったり、忠誠心を分割したりすることは許されません。神は私たちにすべてを与え、さらなる約束をしてくださったのです。

「私たちの神は焼き尽くす火です。」と、著者は申命記 4 章 24 節を引用して厳肅に結論付けています。モーセはイスラエルの民に対し、主を離れて偶像崇拜に陥ることのないようにと警告していました。

しかし、著者は私たちに墮落と離反に対する警告を与えつつも、福音の調子を残しています。著者は「私たちの神」と呼びかけています。裁きの火が臨むのは、私たちが神を自分の神として受け入れない場合だけです。神の恵みを軽んじれば、神の激しい怒りを受けることとなりますが、神の恵みの中に生きるなら、永遠に生きることができるのです。

「今日、もし彼の声を聞くなら、心をかたくなにはならない」（出エジプト 3:7,8,15、4:7）。

周囲の人々に対しての信仰の生活

へブル人への手紙 13 章 1 節—3 節

- 1 兄弟愛をいつも持っていなさい。
- 2 旅人をもてなすことを忘れてはいけません。こうして、ある人々は御使いたちを、それとは知らずにもてなしました。
- 3 牢につながれている人々を、自分も牢にいる気持ちで思いやり、また、自分も肉体を持っているのですから、苦しめられている人々を思いやりなさい。

これまでに、キリストと契約、信仰と畏れについて、著者は十分に説明しました。そして、ここからは、信仰を行動に、愛を働きに変えるための実践的な教えを詰め込んだ結論部分に入ります。著者は「兄弟愛をいつも持っていなさい。」という言葉でこの部分を始めています。兄弟愛の炎は、すでに彼らの間に輝いていたのですから、それが今になって消えてしまうのはいけません。迫害が起こると、人々は身を引き、自らの保身に走るため、兄弟愛を保つのが難しくなります。そこで著者は、同じ母親から生まれた者たちに対するような愛と配慮を実践するように勧めています。

同じ霊から生まれた者たちには、さらに一層の優しさと助けが示されるべきです。これはイエスご自身が語られたことでもあります。イエスは聖木曜日に弟子たちに「あなたがたに新しい戒めを与えましょう。互いに愛し合いなさい。」（ヨハネ 13:34）と教えました。使徒たちも繰り返しこれを教えました。たとえば、パウロはテサロニケ人への手紙第一 4 章 9 節で、「あなたがたこそ、互いに愛し合うことを神から教えられた人たちだからです。」と読者に思い起こさせ、ペテロの手紙第一 1 章 22 節では「互いに心から熱く愛し合いなさい。」と勧めています。愛の使徒と称されるヨハネも、ヨハネの手紙第一 3 章 11 節で「互いに愛し合うべきであるということは、あなたがたが初めから聞いている教えです。」とまとめています。

この教えを、私たちは必要としているのでしょうか？信者仲間を見渡したとき、そして自分自身を振り返り、信者仲間への態度や行動を振り返るとき、何が見えるでしょうか？私たちは仲間に対して愛と成功を願う心を持っているのでしょうか、それとも自己中心的な考えがあり、激しい競争心を抱いているのでしょうか？仲間の必要に対する兄弟姉妹としての配慮があるのでしょうか、それとも自分の利益を求める無関心さがあるのでしょうか？その仲間の才能を受け入れ、成長を助ける気持ちがあるのでしょうか？それとも批判的に彼の言動を見ているのでしょうか？主が私たちに求める兄弟愛は、絶え間ない実践と集中した力を要し、それは私たちの兄であるキリストの十字架からのみ与えられるものです。

このような愛は、知っている者や身近な者に対してだけでなく、見知らぬ人にも向けられるべきです。古代の世界では宿屋はそれほど多くなく、評判も良くなかったため、もてなしは貴重な美德とされていました。迫害により故郷を追われたクリスチャンや、説教の旅に出るクリスチャンには特に、もてなしが必要とされました。彼らが提供するもてなしは、もてなされる側はもちろん、もてなす側にとっても大きな益になりました。創世記 18 章 3 節ではアブラハムが、また創世記 19 章 2 節ではアブラハムの甥であるロトが、自宅に招き入れた見知らぬ人が、実は天使であったという大きな祝福を受けています。

私たちが見知らぬ人をもてなすとき、天使を迎えることはないかもしれませんが。見知らぬ人を助けることが難しくなりつつある現代ですが、主ご自身が、こうしたキリスト教的なもてなしに大きな価値を置くことを忘れてはなりません。最後の日に、主から「あなたがたが、これらのわたしの兄弟たち、しかも最も小さい者たちのひとりにしたのは、わたしにしたのです。」（マタイ 25:40）と明かされる時の驚きに思いを馳せましょう。また、信徒たちが移動し旅行することが増えている今、私たちの教会がもてなしの暖かさで満たされていることを確認しましょう。見知らぬ人が礼拝に出席することを歓迎し、新しい会員を心から受け入れ、遠巻きに見つめるのではなく温かく接しましょう。

見知らぬ人だけでなく、苦しむ者たちにも兄弟愛を注ぐべきです。囚人や迫害されている者には、同情だけでなく、彼らと共に苦しみ、彼らのために行動する愛が必要です。コリント人への手紙第一 12 章 26 節はクリスチャンたちが「もし一つの部分が苦しめば、すべての部分がともに苦しみ」とあるように、一心同体であることが述べられています。ヘブル人クリスチャンたちは、以前の迫害の日々においてまさにそのように応答してきました（出エジプト 10:32-34）。今も同様に、苦しむ聖徒たちに同情を示し続けるべきです。

確かに、良きサマリア人のたとえに出てくる祭司やレビ人のように、兄弟の必要に目を閉じ、耳を塞ぐことの方が簡単です。強盗の被害に合った人が倒れている道で、その人の反対側を通り過ぎる方が安全にも見えるかもしれませんが、それは、

兄弟愛ではありません！大学の講義で嘲笑され、不信仰の家族から疎外され、職場でキリスト教の原則を守り、立ち上がる勇気を持つ信徒たちには、ただの無言の拍手以上の励ましが必要です。彼らには力強い愛が必要なのです。

ヘブル人への手紙 13 章 4 節—6 節

4 結婚がすべての人に尊ばれるようにしなさい。寝床を汚してはいけません。なぜなら、神は不品行な者と姦淫を行う者とをさばかれるからです。

5 金銭を愛する生活をしてはいけません。いま持っているもので満足しなさい。主ご自身がこう言われるのです。「わたしは決してあなたを離れず、また、あなたを捨てない。」

6 そこで、私たちは確信に満ちてこう言います。「主は私の助け手です。私は恐れませんが、人間が、私に対して何ができましょう。」

著者は、愛が表れるもう一つの領域、結婚、特に結婚の寝床について触れています。異教の世界に住む人々には、結婚が神の制度であり、神が与え、支配し、守るものであることを伝える必要がありました。世界に罪が入り込む前から、つまり世界が神によって創造された当初から、結婚は存在していました。しかし人間の罪によって結婚は汚され、その寝床も汚されてしまいました。「結婚がすべての人に尊ばれるようにしなさい。」と著者は勧めています。神が貴重な贈り物として与えたものは格下げにされ、辱められ、捨てられています。性という贈り物が人間に祝福をもたらすのは、結婚の寝床においてだけです。結婚外でそれを汚す者は裁かれるでしょう。人間の世界の裁きがそれを許し、世間の目が見逃したとしても、神は必ずそれを見て、すべての違反を容赦なく裁かれます。たとえ多くの人が聞きたくなくても、教会はこの重要な領域において、神の聖なる御心を勇敢に宣べ伝えましょう。信者は現在の不道徳の流れに逆らう力を神から得て、神の祝福を受けましょう。

続いて著者は、今度は警告として別の愛について語り、「金銭を愛する生活をしてはいけません」と勧めます。彼は不道徳への警告から、金銭への愛に対する警告に移りました。これは自然な流れです。なぜなら、聖書ではこれら二つをしばしば結びつけているからです（I コリント 5:11、エペソ 5:3）。欲深い人は自己中心的に自分の目的を追求し、性欲や金銭的な目標のために他人の福祉にほとんど注意を払いません。クリスチャンは、金銭に対するこのような愛から自分の生き方や考え方を守らなければなりません。そうしない者、欲にまみれた心と貪欲な手から、神よりも金を求める者は、パウロがテモテの手紙第一 6 章 10 節で警告している言葉を思い出すべきで

す。「金銭を愛することが、あらゆる悪の根だからです。ある人たちは、金を追い求めたために、信仰から迷い出て、非常な苦痛をもって自分を刺し通しました。」

その解毒剤は「持っているもので満足する」ことです。クリスチャンは、神が自分にとっての最善を知っておられると信じています。今持っているものはすべて神から来たものであり、神のために管理するものと考えます。そして、そこで止まります。それを超えると、罪深い心配や不信仰な欲望を招くことになります。持ち物や地位に基づくこの世の中で、満足を実践するのは簡単ではありません。ピリピ人への手紙4章11節で「私は、どんな境遇にあっても満ち足りることを学びました。」と語ったパウロのようになるのは簡単ではありません。

満足の秘訣は何でしょうか？著者はそれを指摘しています。それは、神が「わたしは決してあなたを離れず、また、あなたを捨てない。」という約束を思い出すことです。この恵み深い約束は、モーセの重い役割を引き継ぐヨシュアに最初に与えられたものですが（申命記31:6、ヨシュア1:5）、私たちにも適用されます。神は決して私たちを見捨てず、支えてくださいます。常に共にいてくださり、永遠の助けとなってください。これ以上、私たちが望むものがあるのでしょうか？父としての神の臨在と、決して変わらない約束を常に心に留めることが満足への鍵です。

神が語るとき、信者は応答します。詩編118篇6節に基づいて「主は私の味方。私は恐れない。人は、私に何ができよう。」と自信をもって宣言します。神の完全な備えに満足し、神の完全な保護に覆われて、信者は恐れることなく天国の岸に向かって歩いていきます。神が味方であるならば、たとえどのような敵や恐怖に直面しても、その人は「一人で多数派」なのです。迫害を恐れていたヘブル人クリスチャンたちは、これをよく聞いていたでしょうか？私たちはどうでしょうか？

ヘブル人への手紙 13章7節—9節

7 神のみことばをあなたがたに話した指導者たちのことを、思い出さない。彼らの生活の結末をよく見て、その信仰にならなさい。

8 イエス・キリストは、きのうもきょうも、いつまでも、同じです。

9 さまざまの異なった教えによって迷わされてはなりません。食物によってではなく、恵みによって心を強めるのは良いことです。食物に気を取られた者は益を得ませんでした。

著者は決して目標を見失うことはありません。弱りかけたクリスチャンたちには励ましが、さまよいかけた者たちには警告が必要です。そのため、著者は読者を以前の指導者たちに立ち返らせようとしています。彼は「神のみことばをあなたがたに話し

た指導者たちのことを、思い出さない。」と勧めています。指導者たちが忠実に神の真理を宣べ伝えたことは、過去において読者たちに多くの益をもたらしました。迫害の今こそ、その指導者たちや彼らの教えを思い起こすことで、同じ益が得られるのです。

著者はさらに「彼らの生活の結末をよく見て」、と勧めています。読者は、過去の指導者たちの忠実な生き方や恐れを知らぬ死を、注意深く振り返るべきでした。殉教による死であれ、自然の死であれ、イエスにあって眠りについた彼らの姿は、特に迫害に直面している者たちにとって大きな励ましとなりました。

著者はさらに「その信仰にならいなさい。」とも勧めています。これらの指導者たちは、終わりまでキリストに忠実であり続けました。彼らは、誘惑にさらされている読者たちが陥りそうな弱体化や、動揺を示すことはありませんでした。ユダヤ人クリスチャンにとって、考慮すべき、そして従うべき模範がここにありました。このような忠実な指導者が、私たちの周りにもいるのでしょうか？そうであれば、神に感謝しましょう！そのような忠実な指導者のみが、私たちが従うのにふさわしい存在です。私たちが、忠実な指導者の手本を真似ることができるよう神に祈ります！

かつての指導者たちは去りましたが、彼らが教え信じたものは永遠に変わりません。彼らの救い主は私たちの救い主であり、私たちの子どもたちの救い主にもなるのです。救い主は常に信者とともに歩む存在です。彼が過去の信者にしてくださったことは、私たちにもしてください。そして、彼が私たちにしてくださることは、後に続く者たちにもしてください。彼の名「イエス」は、私たちを救うために肉体を取られた神を示し、「キリスト」は預言者、祭司、王としての偉大な役職を示します。時の流れは地上の物事をまるで砂のように変えますが、永遠の救い主を変えることは決してありません。イエス・キリストとそのすべての約束は「きのうもきょうも、いつまでも、同じです。」どの時代の信者も、その信仰の基盤と人生の目標はただひとつ、「イエス・キリスト」にあります。

著者はまた、永遠のキリストとその変わらない御言葉以外の何かを教えることについて警告を続けます。この警告は的を射ています。なぜなら、読者たちは「さまさまの異なった教え」によって、信仰が脇道にそれる危険にさらされていたからです。それらのさまさまな異端が何であったのか、具体的には示されていませんが、著者も読者たちもその意味を理解していました。儀式的な「食べ物」という言葉から、キリスト教を犠牲にしてユダヤ教を推進する動きが示唆されているようです。キリストとその言葉のために迫害を受けていたユダヤ人クリスチャンにとって、儀式的なユダヤ教は安全で満たされる避難所に見えたことでしょう。しかし著者は、その行動は間違ったものに耳を傾け、誤った道を進むことになることを警告しています。儀式的な食べ物が心に益をもたらすことはありません。きよさは外面的な儀式から来るのではなく、キリストの贖いのみわざと神の聖化の恵みから来るのです。

読者たちは信仰を強める必要があったのでしょうか？ヨハネの福音書 17 章 17 節で、救い主が信者のために天の父に祈った際に、その唯一の方法を示しています。「真理によって彼らを聖め別ってください。あなたのみことばは真理です。」とイエスは祈りました。神の恵みだけが人の内なる命を強めることができ、それは御言葉を通してのみ行われます。私たちも信仰を強めることを望んでいるのでしょうか？それならば、神の恵みの永遠の福音である御言葉に向かいましょう！

ヘブル人への手紙 13 章 10 節—14 節

10 私たちには一つの祭壇があります。幕屋で仕える者たちには、この祭壇から食べる権利がありません。

11 動物の血は、罪のための供え物として、大祭司によって聖所の中まで持って行かれますが、からだは宿営の外で焼かれるからです。

12 ですから、イエスも、ご自分の血によって民を聖なるものとするために、門の外で苦しみを受けられました。

13 ですから、私たちは、キリストのはずかしめを身に負って、宿営の外に出て、みもとに行こうではありませんか。

14 私たちは、この地上に永遠の都を持っているのではなく、むしろ後に来ようとして、いる都を求めているのです。

そのユダヤ人クリスチャンたちはなぜユダヤ教に戻りたがっていたのでしょうか？目に見える神殿や祭壇、犠牲を求めていたのでしょうか？彼らは、キリスト教が持っているものを考えるべきでした。著者は勝ち誇ったように「私たちには一つの祭壇があります。」と指摘しています。その祭壇とは、キリストがご自身を犠牲にして、私たちのために永遠の救いを確保してくださった十字架です。「幕屋で仕える」こと、つまりユダヤ教の古い儀式に固執する者たちは、十字架の祝福にあずかる権利はありません。儀式的な食物が、キリストにある神の恵みよりも彼らにとって重要なのです。

著者はもう一度、キリストとその優れた犠牲に目を向けさせます。イエスの十字架とその犠牲こそが、すべての人に必要なことのすべてです。旧約聖書の贖罪日も、これを前もって指し示していました。贖罪日に、大祭司は牛の血を自分の罪のために、そして山羊の血を民の罪のために、最も聖なる所へ運びました。しかし、十字架という祭壇では、インマヌエルの血が、すべての罪に対する十分な犠牲として流れました。贖罪の日には、血が贖いの座に振りかけられた後、動物の体が宿営の外で焼かれ

ました（レビ記 16:27）。宿営の外で燃えるその火は、イスラエルに罪の取り除きがなされたことを思い起こさせました。

これは、まさしくイエスの影です！イエスの十字架は都の門の外に立っていました。ヨハネの福音書 19 章 20 節では、それが「都に近かった」場所だと記されています。十字架そのものが罪の恐ろしさの象徴であり、ガラテヤ人への手紙 3 章 13 節の「木にかけられる者はすべてのろわれたものである」という言葉がそれを思い出させます。都の門外に立つその十字架は、最も深い屈辱を象徴していますが、その祝福の結果は永遠に続きます。過去に流された無数の動物の血とは異なり、イエスの血によって人々は聖別されるのです。カルバリ丘の十字架でのイエスの犠牲は、繰り返されてきた動物の犠牲が決して成し得なかったことを成し遂げました。それは人々を罪深い世界から神の聖なる家族に迎え入れるものでした。

このような素晴らしい犠牲を持つ祭壇を読者は離れるべきでしょうか？いいえ、著者はむしろ大胆な呼びかけをしています。「ですから、私たちは、キリストのはずかしめを身に負って、宿営の外に出て、みもとに行こうではありませんか。」

イエスとその完全な十字架を知る信者にとって、ユダヤ教には何の価値もありません。ユダヤ教に戻ることは、十字架を離れ、その祝福を失うことを意味します。ユダヤ教との決別は重要でしたが、危険でもありました。キリストを信仰によって受け入れることは、「キリストのはずかしめを身に負って」いくことも意味しました。異邦人は彼らを迫害し、同じユダヤ人は先祖の神と信仰を裏切った者として彼らを非難したでしょう。

しかし、この大胆な信仰の一步は、それだけの価値があったのです。著者が一貫して主張しているように、その先には、「朽ちることも汚れることも、消えて行くこともない」相続財産を備えた天のエルサレムが待っています。（ペテロ第一 1 章 4 節）この天のエルサレムこそ、信者の信仰の目を、常に上へと引き上げる磁石です。迫害は背中を打つかもしれませんが、信者の歩みを止めることはできません。辱めは涙を誘うかもしれませんが、天の岸から目を逸らすことはできません。こんな宝物を一握りの砂や一瞬の安全と引き換えにすると、なんと愚かなことでしょう。

20 世紀の信者たちはこの呼びかけに耳を傾けているでしょうか？私たちは皮肉や嘲笑の鋭い矢を感じたことがあるでしょうか？信仰の皮膚がどれほど薄く、どれほど簡単に傷つくかを思い知ったことがあるでしょうか？マタイの福音書 16 章 24 節で主が「だれでもわたしについて来たいと思うなら、自分を捨て、自分の十字架を負い、そしてわたしについて来なさい。」と語られた言葉が何を意味するのか、考えたことがあるでしょうか？今こそ、心と生活を改めて注意深く見直す時かもしれません。そして、「ですから、私たちも、彼のもとへ、宿営の外に行こう」という著者の緊急の呼びかけを、再び聞く時かもしれません。

ヘブル人への手紙 13 章 15 節—16 節

15 ですから、私たちはキリストを通して、賛美のいけにえ、すなわち御名をたたえるくちびるの果実を、神に絶えずささげようではありませんか。

16 善を行うことと、持ち物を人に分けることとを怠ってはいけません。神はこのようないけにえを喜ばれるからです。

キリストの十字架による救いの信仰を持つ人たちは、もはや罪のための犠牲が必要ないことを理解しています。しかし、その人たちは他の捧げ物の必要性を感じます。キリストへの感謝と愛の思いが、自ら喜んで神にささげたいという思いを強くするのです。そして、それらの捧げ物は、決まった時間や特定の機会に限られることはありません。むしろ、神に対して絶えずささげられるものとなるでしょう。

まず著者は、「賛美のいけにえ、すなわち御名をたたえるくちびるの果実」について言及しています。イエスはマタイの福音書 12 章 34 節で「心に満ちていることを口が話すのです。」と語られました。賛美も同様です。賛美とは、信者の心が恵み深い神に向かってハレルヤをささげることです。賛美は心から無理に引き出したり、無理に口に出したりする必要はありません。果実のように自然に熟していくのです。

特に、賛美はイエスの御名を大胆に告白することに現れます。「イエスが私のためにしてくださったことを見てください。イエスがあなたのためにしてくださることを見てください」と、信仰は大胆に告白します。迫害のためにイエスとその恵みから離れそうになっていた人々にとって、これはどれほど大切なことだったのでしょうか。そして、イエスに感謝すべき理由がこれほど多くあり、その救いの御名を告白すべき人々が多くいる私たちにとって、どれほど大切なことでしょうか。

著者は、恥じることのない信仰告白から、思いやりのある奉仕へと話を進めます。信仰の実は唇だけでなく、生活の中にも現れるのです。「善を行うことと、持ち物を人に分けることとを怠ってはいけません。」と著者は言います。「善を行う」とは一般的なことを指し、他者のために行うことすべてを丁寧に行うよう、私たちに促しています。「分け合う」はより具体的なことで、お金や物のような具体的なもの、また悲しむ人への慰めや、困っている人への配慮のような抽象的なものも含まれます。賛美の言葉と愛の行為は、神に喜ばれる犠牲ですが、それもすべて「キリストを通して」のみ当てはまります。それで、著者はその重要なフレーズを強調して冒頭に置いています。

イエスによってのみ、心は感謝で満ちあふれます。イエスによってのみ、感謝に満ちあふれた心が、ささげる心へと変わります。そしてイエスによってのみ、私たちの捧げ物に残された不純物が取りのぞかれ、神がそれを喜んで受け入れてくださるので、救い主は、ヨハネの福音書 15 章 5 節で同様に語られました。「わたしはぶどうの

木で、あなたがたは枝です。人がわたしにとどまり、わたしもその人の中にとどまっているなら、そういう人は多くの実を結びます。わたしを離れては、あなたがたは何もすることができないからです。」

へブル人への手紙 13 章 17 節

17 あなたがたの指導者たちの言うことを聞き、また服従しなさい。この人々は神に弁明する者であって、あなたがたのたましいのために見張りをしているのです。ですから、この人たちが喜んでそのことをし、嘆いてすることにならないようにしなさい。そうでないと、あなたがたの益にならないからです。

7 節で著者は、過去の指導者たちを覚えるように勧めました。今度は現在の指導者たちに目を向け、彼らについて語っています。「あなたがたの指導者たちの言うことを聞き」と命じ、「また服従しなさい。」と勧めています。聖書は霊的な指導者たちについて多くを語り、彼らの資質や責任についても述べていますが、私たちが彼らにどう反応すべきかについてはあまり触れていません。このため、この節には特に注意して耳を傾ける必要があります。

私たちは指導者たちに従うべきですが、それは彼らに賛同している時は難しくありません。しかし、たとえ賛同しない時でも、その権威に服従することが求められています。明らかに、へブル人クリスチャンの霊的指導者たちは、真実の教師であり、キリストの強固な告白者であり続け、そうした従順に値する者たちでした。著者が読者たちに、指導者に従い、ユダヤ教への安易な回帰の誘惑を捨てる警告を聞き入れるよう勧めている様子が目に浮かびます。

指導者へのこうした正しい反応は必要不可欠でした。著者が指摘しているように、「この人々は神に弁明する者であって、あなたがたのたましいのために見張りをしている」からです。愛情深い羊飼いのように、これらの指導者たちは群れの一匹一匹に対して眠らずに注意を払い、神の御言葉という牧草地へと導き、罪の危険から守り、弱った者や傷ついた者を優しく扱い、迷い出た者を愛情深く追いかけていました。指導者たちにとって一人一人の魂はかけがえのないものであり、その魂について、最高の羊飼いに報告しなければならなかったのです。

このような、おそれ敬うべき責任は、羊飼いに真剣な使命感を抱かせ、説教や教え、訪問や交流のすべてにおいて最善を尽くすよう求めます。この重い責任は、群れの一匹一匹への要求も伴います。羊たちが喜んで従う時、羊飼いの仕事は喜びに満ちます。しかし、もし彼らが反発し、さらには不従順であれば、羊飼いの喜びは嘆きに

変わり、群れの前進は遅れ、時には止まってしまいます。「それはあなたがたにとって利益にならないでしょう」と、著者は書き送っている群れに警告しています。

神が私たちを、群れよりも自分の名声や財産を優先するような自分勝手な羊飼いかから守ってくださいますように。神が私たちを、気分が乗ったときだけ従い、自分が望む時だけ従う羊から守ってくださいますように。神が私たちに、忠実な羊飼いと従順な羊を与えてくださいますように。

個人的な指導と最終的な挨拶

ヘブル人への手紙 13 章 18 節—21 節

18 私たちのために祈ってください。私たちは、正しい良心を持っていると確信しており、何事についても正しく行動しようと願っているからです。

19 また、もっと祈ってくださるよう特にお願いします。それだけ、私あなたがたのところに早く帰れるようになるからです。

20 永遠の契約の血による羊の大牧者、私たちの主イエスを死者の中から導き出された平和の神が、

21 イエス・キリストにより、御前でみこころにかなうことを私たちのうちに行い、あなたがたがみこころを行うことができるために、すべての良いことについて、あなたがたを完全な者としてくださいますように。どうか、キリストに栄光が世々限りなくありますように。アーメン。

著者は読者たちを厳しく戒め、強く警告しましたが、それでも彼らを神の子ども、自らの兄弟と見なしています。ですから、著者は彼らに引き続き祈りを求めています。「私たちのために祈ってください。」と彼は促し、自分自身と仲間のために祈り続けることを求めています。特に、早く彼らのもとに戻れるよう祈ってほしいと願っています。

何らかの外的な力が、彼をヘブル人クリスチャンたちから引き離しました。それが投獄だったのか、病気だったのか、あるいは別の任務だったのかは分かりませんが、彼は読者たちのもとへ戻ることを大いに望んでおり、読者たちも彼の存在を必要としていたことは、手紙の内容からも明らかです。

また、彼と彼の仲間に対する批判が一部の者から向けられていたようです。おそらく、ユダヤ教を推奨する者たちが、著者の行動や動機を批判することで有利に立とうとしていたのでしょう。もしそうであれば、「正しい良心を持っている」「何事につ

いても正しく行動しようと呼んでいる」という彼の言及が説明できます。この著者は、清らかな良心をもって人々に祈りを求めることができる指導者でした。

また、彼は人々のために祈る方法を知っている指導者でもありました。彼は簡潔で美しい祈りを通して手紙全体をまとめています。わずか一文で、彼は読者たちに対しキリストが与えてくださるすべての祝福を願っています。キリスト教には「平和の神」がいます。確かに、この方は天と地を恐れで揺るがす大審判者ですが、私たちにとっては救いの神です。この神から「人のすべての考えにまさる神の平安」（ピリピ 4:7）がもたらされ、さまよう心が必要とする平安、つまり神との関係が回復された平安が与えられます。



良い羊飼い

著者は神がどのようにしてこの平和をもたらしたかを再び読者に明確に示しています。「私たちの主イエス」に目を向け、著者は自分と読者たちの信仰が、救いの「主」であり「イエス」でもある方と結ばれていることを示しています。これは神が「永遠の契約の血」をもって死からよみがえらせた救い主です。著者は手紙の中でしばしば「契約」について語っていますが、キリストの復活については、ここで初めて触れています。彼は二つを密接に結びつけています。カルバリ丘の十字架で流されたキリストの血は、罪の代価を完全に支払い、神の救いの契約を確立しました。しかし、その尊い血も、キリストが墓にとどまっていたなら無駄になっていたでしょう。キリストの復活は、罪が償われ、天国の門が開かれた生きた証です。十字架で実行さ

れた刑罰と、空っぽの墓は、私たちの救いの確証なのです。この恵みの契約は永遠であり、更新や代替を必要としません。

また、著者はここで初めてイエスを羊飼ひ、しかも「大牧者」と呼んでいます。イエスは死と復活によって最高の地位を得られたので、信者はイエスを完全に信頼することができます。たとえ迫害が襲おうとも、この流血の羊飼ひは信者を「いのちの水の泉」まで養い導き、そこで「神は彼らの目の涙をすっかりぬぐい取ってくださる」（黙示録 7:17）のです。

著者は、キリストにおいてこれほど多くをしてくださった「平和の神」に、「みこころを行うことができるために、すべての良いことについて、あなたがたを完全な者としてくださいますように。」と祈ります。神の御心を行い、神に喜ばれることを行うことが人生の主要な関心事です。神の御心は、罪人が悔い改めて生きること、そして感謝に満ちた信仰をもって神の聖なる戒めに従おうと努めることです。

それは簡単に聞こえますが人間にとって非常に難しいことです。神が準備し、神が信仰を人の心に植え付け、それを日々の生活に生かす力を与えなければ、人はそれを成し得ません。ピリピ人への手紙 2 章 13 節でパウロも同じことを言っています。「神は、みこころのままに、あなたがたのうちに働いて志を立てさせ、事を行わせてくださるのです。」神が要求される信仰は、御言葉と聖礼典による恵みを通して与えられます。神が信仰の木に求められる信仰の実もまた、同じ恵みによって育まれます。

著者は最後にもう一度「イエス・キリストにより」と読者に思い出させています。モーセの契約や動物の犠牲によってではなく、イエス・キリストによって神はゆるし、平安、力を与えられます。その完全な救い主にこそすべての栄光が永遠に帰されるのです。天の宮殿は永遠の歌で満ちるでしょう。「イエス・キリストは私たちを愛して、その血によって私たちを罪から解き放ち、また、私たちを王国とし、ご自分の父である神のために祭司としてくださった方である。キリストに栄光と力が、とこしえにあるように。アーメン。」（黙示録 1:5-6）。すべての過去および現在の読者がこの手紙を読み、信仰の勝利の「アーメン」を共に響かせることができますように。

ヘブル人への手紙 13 章 22 節—24 節

22 兄弟たち。このような勧めのことばを受けてください。私はただ手短に書きました。

23 私たちの兄弟テモテが釈放されたことをお知らせします。もし彼が早く来れば、私は彼といっしょにあなたがたに会えるでしょう。

24 すべてのあなたがたの指導者たち、また、すべての聖徒たちによろしく言ってください。イタリアから来た人たちが、あなたがたによろしくと言っています。

祈りを終えた著者は、結びの言葉を書きます。まず、彼はこの手紙に対する読者たちの反応を気にかけています。彼はかなり長く書きましたが、この手紙を「短い」と呼んでいます。それは、この手紙が扱っている重大な問題のためです。彼は率直に、時には厳しい口調で手紙を書きましたが、読者が反発しないことを願っています。今や兄弟に対するように愛情深く、彼は自分の勧めの言葉を受け入れてほしいと訴えています。まるで信徒たちのためにタイムリーな説教をした牧師のように、彼は信者が真理を受け入れ、従うことをただ一つの反応として望んでいます。

彼にはまた、彼らがよく知るテモテに関するニュースがありました。テモテは何らかの監禁や任務から解放され、まもなく著者と共に戻る予定でした。そうすれば、二人は一緒に再び読者のもとに行けるのです。その間、この手紙を受け取った人たちは、指導者や「すべての聖徒たち」に挨拶を伝えるよう勧められています。これは初期の教会で信者を指す一般的な表現でした。「イタリアから来た人たち」も著者と共に挨拶を送っています。この表現は、イタリアから他国へ移住した信者たちが、ローマの母教会に挨拶を送っていることを示唆していると考えられる人もいます。正確な場所は分かりませんが、互いの霊的な安否を気にかけている信者たちが、仲間の信者に挨拶を送っていたのです。

へブル人への手紙 13 章 25 節

25 恵みが、あなたがたすべてとともにありますように。

この最後の一節は、新約聖書の多くの手紙に見られるもので、「敬具」のような一般的な締めくくりを超えた意味を持っています。それは、私たちには値しないキリスト・イエスの豊かな恵みが、すべての読者に注がれるようにという祈りです。この言葉は、キリストの恵みに満ちた手紙にふさわしい締めくくりといえるでしょう！

こうして、新約聖書の中でも特に深く豊かな書物のひとつを旅してきました。私たちの学びが、キリストにある最高の宝を再び思い起こし、その宝をどのように大切にすべきかを教えてくれるものとなるよう祈ります。

神に栄光が、永遠にありますように。

アーメン